

文集

(頒布版)

捜真女学校

2020

はじめに

照 下 千 恵

「喪失」という詩を書いたことがあった。前任校でのことだ。漢字テストで「喪失」を出題すると、少女たちは、何か足りない気がして、下の部分を「衣」にする。採点をしながら、願わくは、この子たちが、「喪失」を経験することがないようにと祈る、というような、他愛ない内容だった。

この学校に来てから、「喪失」のとらえ方が変わった。文集には、生徒たちの瑞々しい「喪失」の様相がよく描かれる。しかし、彼女たちにとって、喪失はただの傷ではない。喪失の痛みを痛みのままに抱え、それでも喪失の意味を問い、歩き始める姿がある。

教職に就いたばかりの頃、三浦綾子さんの本を貪るように読んだ。「道ありき」の中に、敗戦後の虚無感に囚われていた三浦綾子さんが「伝道の書」（コヘレトの言葉）を読むように勧められて、それまでお人好しに見えていたクリスチャンを見直した、という段がある。信仰の根底には、徹底的な虚無がある。その虚無の中に立ち、それでも共に在る救い主の姿を見るのが信仰だ、ということか。虚無の上に立って歩む。この学校の生徒たちが描く「喪失」にも、それと同じものを感じる。

コロナ禍という分断・喪失の一年。しかし、この痛みを起点として、私たちは歩き始めることができる。彼女たちの文章を読んでいると、それが分かる。彼女たちが共に在るので、私は何も怖くない。

文集 第四十六号 目次

〈中学部〉

◇作文

描く 一年

私の心は雨模様

結局は

あたりまえってあたりまえじゃないみたいだ

冬のアイスの食べ方

お母さん

桜

多得多失

二百円ちようだい

流れ

強敵の母

パパ観察日記 二年

初夢

(15) (14) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (4) (3) (2) (1)

変わりゆく	17
失ったものより得たものを。	18
切実なる願い	19
妹とカメラ	20
夜の十時に光る隣の家	22
猫は夢への案内人	23
生きる	25
タイムマシンは机の中から	26
不時着先は笑顔	28
空と雨とエトセトラ、エトセトラ	29
波卵の予感	30
うちら姉妹はサンタクロース	31
私のメタモルフォーゼ	33
きつとその香りをかくたびに思い出す季節がある	34
ミルクチョコレート	35
卵の殻	37

〈高等学部〉

◇作文

春泥棒 一年

理由 39

何も何も、小さきものは、みなうつくし。 40

私と彼女の世界 42

私と写真 43

TIME WARP 二〇三〇↓二〇二〇 45

かたち 46

広島行きへのチケット 48

本当の「正義」 50

自分を愛するための最適解 51

花と怪物 53

ときどきヒト 54

青い表紙のペイ・フォワード 55

千円札の価値 二年

わたしけんきゅうしや 60

二年

大事だけど好きではない。	61
私を創る	62
ぐるぐる	63
正義の反対は、悪ではない	64
中間人間	65
青春症候群	67
忘却への反抗	68
なんか面倒くさいヤツ	69
Photograph	70
未来の私をプロデュース	71
ガチャガチャ	72
気になる	74
責任	76
つくること	77
真の贅沢	79

〈第二回エーカック記念作文コンクール テーマ「青」〉

〈作文・エッセイ部門〉

青 高一

ブルーハワイ・パラドクス 高一

ビビットブルーのあなたへ 高二

(84) (82) (81)

〈創作部門〉

空白とみかんのアルペド 高一

海の声―乙姫の秘密― 高二

(90) (86)

描く

中一

絵を描くことが好きだった。そして、それを誰かにほめられることが好きだった。本やテレビ、誰かの話を聞いて、想像し、絵に表すことが好きで仕方なかった。さまざまな色の線が、さまざまな方向に飛び交い形になっていくそのさまを見ていると、どんな場所にも、どんな存在にもなれそうな気がした。描き終えても、まだその思いが心の中に残っていて、うずうずしてしまうときは、誰かにその絵を自慢していた。いま思えば、バカだったなと思う。

小学生の四年生の時だったと思う。本を読んで想像して絵を描く、と言う授業があった。しかも、上手な絵はどこかのコンクールに出品されるとのことだった。その話を聞いた私は、とてつもなく浮かれていた。描けた絵は自分でも満足するほどうまく描けていた、絶対に選ばれる自信があった。しかし、その予想はみごとに外れ、コンクールにはほかの子が選ばれた。誰だったかは忘れてしまったけれど、たしか知らない子の名前だった気が

する。休み時間になった時すぐさま教室をでてその子の絵を探した。信じられなかった。いままで描いた絵の中でトップ10に入るほど自信のある絵だったからである。その子の絵は一組の教室の前にかざられていた。私はその絵を見た時「ああ、負けた。」と思った。なんの絵だったのか、もう思いだせないけれど、その気持ちだけは忘れない。手をのばせば、肌をなでるような風の音も、肺を満たすようなすがすがしい空気も、感じられそうな風景がそこに描かれていた。いつのまにか私は自分の部屋にいた。どうやって帰ってきたのかも思いだせなかった。心にぽっかり穴があき、そこからいろんな物がぬけ落ちてしまっていたからである。目を閉じてあの絵を思いうかべてみた。「悔しい」とこからかそんな声が聞こえた。しばらくしてそれが私の心の声だと気付いた。私の心が悔しい悔しいと泣いていたのだと。そして私は気がついた。絵は私の誇りだったのだと。そんな存在である絵を私は愛していたのだと。けれど、そんな思いは悲しむ暇すら与えずに消えてしまった。それから私は、がんばって何かを作ってもかなわないにかがあることを私もなんとなくわかった気がするからである。でも絵を描くことはやめなかった。たとえ、絵が誇りでなくなっても、絵を描くその時間が好きで好きで、た

まらないからである。もしももう一度、力のあるなにかを見ることがあるならば、私はきつとそれにくぎ付けになり、感動し、心のどこかで嫉妬するだろう。けれどそれでいい、一番になれなくても、特別になれなくても、ただその存在を楽しめれば、私はそれだけで幸せだからである。

私の心は雨模様

中一

位置について、よいい、どん！

雲一つ無い青空の中、スターターピストルの音が鳴り響いた。

それと同時に私の足は、まるで宙に浮いたように、“ふわっ”と地面から離れ、太陽がジリジリと照り差し中に走り出した。

私の隣にはライバルのさなちゃんという子がいた。その子は私よりも足が速く、運動神経も良い。私にとつては憧れの人だった。私はさなちゃんに会う度に「勝ちたい」と心の隅で小さく思っていた。

私の通っていた小学校では毎年運動会があり、その中の種目である九十メートル走の練習があった。私と走る

相手は六人いて、もちろんさなちゃんもいた。結果は私が負ける、毎回だ。何度悔しがっただろうか。何度諦めようと思っただろうか。

そう考える度に私の頭の中は雨模様になっていった。

そして運動会当日、その日は少し、小粒の雨が降っていた。まるで私の心の中を表しているようだった。いくつかの種目が終わり、九十メートル走が回ってきた。九十メートル走は私の学年全員が走り、私の順番は、最後から二列目だった。

「位置について、よいい、どん！」

この言葉が何度も何度も繰り返し耳の中に入ってくる。そして到頭私の順番が回ってきたのだ。隣を見ると、自信に満ち溢れた顔のさなちゃんとしっかりと目が合った。そしてまた、

「位置について、よいい、どん！」

この声で私は前へ進んだ。走っている途中でも、心臓がバクバクといっているのが分かった。地面は雨で濡れていた。私はその灰色に染まった小さな水溜まりをピョンと飛び越えた。前を見ると真っ赤なリボンが風でひらひらと揺れていた。最後に大きな歩幅で赤色のリボンへ飛び込んだのだ。

しかし私はギリギリさなちゃんに負けて、二位になってしまった。走った後は息が荒く、一気に緊張が解れた

のか言葉を話すことが出来ないほどだった。さなちゃんの顔を見ると、満面の笑みで、そのとたん悔しくて大粒の涙がこぼれ出した。そして「悔しい」の気持ちと同時に「次は絶対に勝つ」という熱い火が私の心の中に灯った。

それから三カ月ほどして、市の体育大会というものが行われることになった。そして大会の種目である四×百メートルリレーで私とさなちゃんは選ばれたのだった。そのリレーでは私とさなちゃんは同じチームで協力をする仲間になったのだ。

走る順番は、さなちゃんが二番目、そして私がアンカーを務めることになった。大会までの数カ月間、必死に協力し合って練習し続けた。そして本番、またスターターピストルの音で一番最初の人走り出したのだ。その時は七人いる中で三位だった。さなちゃんにバトンが渡った時、ものすごい速さで、私の方に走ってくるのが分かった。しかし順位は三位。そして四番目の人にバトンが渡され、私は走る姿勢をとった。手にバトンが渡され、走り出した。その日は空がとても綺麗で、沢山の友達応援の声で私は三位から一位へ抜かすことが出来、ゴールへ飛び込んだのだ。

私の夢は、部活を精一杯頑張って、大きな大会に出場し、勝利すること。自分を信じれば、なんだって出来る

から。

結局は

中一

「一日が二十四時間以上あつてはしなかった。」そう感じたのは、ピリピリとした空気が漂う入試会場だった。

一番最初の問題がなんだったかなんて、覚えていないわけでもない。そもそも、最初の教科さえも覚えていない。

だが、最初の問題から「難しいなあ」と思っていたことは覚えていいる。もちろん、最初を難しいと思つて最後が解けるはずもないことは、私にだつて分かっていた。それでも、「自分は受かつてここに通う」と自分自身に念じ続け、なんとか解く努力をしていた。だが、思い出せそうで思い出せない問題を何問もパスするうちに、「昨日、いやもっと前から、寝る前にあと一分でも勉強していれば……。」と思い始めた。もうそれ以上は覚えていない。きつとあの場で私なりに全力を出していたから。

文字通り一分一秒を悔やんだのは、あれが人生初だった。私が遊んでいた一分、私がのろのご飯を食べていた一分、一秒に努力を積み重ねていた人がいて、それは小さな差に見えても、一問の問題の正解、もしかしたら

合否をも分けてしまう、大きな差なのだ。

第一志望校というのは一番自分が行きたいところであるが故に、その反動は大きいものだとあの時感じた。全力で臨まないわけがなく、「不合格」になった時、辛い人などいないのではないだろうか。自分のように落ちた人は他にもたくさんいると分かっている、それは痛みを和らげる何の薬にもならない。母と父が、不合格を私に伝えるのものすごく気を遣ってくれていたことを覚えていいる。

でも、どんなに悔やんだとしても、入試は終わって結果も出ている状態に変わりはなく、覆すことはできない。それを頭では理解しているつもりでも、「もしかしたらこれは悪い夢で、もう一回チャンスがあるのかも。」などと馬鹿なことを考えたりしていた。

よく、「寝る間を惜しんで」とか、「休む暇なく」という言葉を聞く。でも私はいつも、「休まない」と体疲れちゃうし」と言い訳をつけて毎日休み続ける日々を送っていた。塾の宿題をそこそこやり、塾の授業を数だけこなして――。私は勉強が嫌いで、どんな状況でもそれを避ける努力をしていた。だが受験を経て、初めて一分一秒を悔しく思い、私は反省した。――はずだった。それなのに、今も勉強から逃げる方法はないかと探しているし、目の前の勉強も避けてしまうタイプだ。あれだけ大

きな「ミス」をして、反省しない自分にあきれている。でもいくらあきれても、「あの時の一分の悔しい思いをくり返さないようにしよう。」などと思ったりできない。そしてまた、勉強に関する色々なことで後悔する。

あの受験の日から、私にはある種の後悔が取り憑いているのではないかと思う。だがそれは、あの日私が同時に感じた失敗という「結果」によって「諦め」に変化したところがある。「一日が二十四時間以上あつてほしい。」あの時感じたこの言葉がもし実現するならば、きっと私は寝るために使ってしまうのだろう。

あたりまえつてあたりまえじゃないみたいだ

中一

三月十九日木曜日。卒業証書授与式。

「はい、チーズ。」

卒業式の日、私は男子、女子、先生関係なくたくさんの人と写真を撮った。もともと私は、写真に写るのも、撮るのも得意ではない。でも、この時はとにかく小学校の記憶、そう、この瞬間を残したかった。だいぶ暖かくなってきた心地よい風が、さくらの花びらと私が小学校で作った最高の思い出を乗せて、私の頬を通り過ぎていっ

た。

私はいつも、あの頃に戻りたい、と思ってしまう。中学生となった今、ランドセルを背負って通っていた時とは何もかもが違うように見えてしまっていた。何が違うのか。それは、私には分からなかった。苦いチョコレートを噛んだような、もう温かくもなんともないカイロをただただ握っているような。とにかく、「中学校」という場所が、その学校生活が不思議な感覚だった。

ある日、私は教科書を忘れた。忘れる、そんなことは小学校の時だってあったし、その日はたまたま教科書を使わなかったし、内容だって理解できた。だが、私の中にはイヤホンがからまってなかなかほけない時のような、ぐずぐずした、変な感じで気になって仕方がない気持ちがあった。音質がきれいな音楽が流れてくるような物ではなく、メロディーが途切れ途切れで、古びたイヤホンがからまっている。その時は、自分でも驚いた。どうしてこんな思いになってしまったのだろう。教科書を忘れただけで。今考えたら笑ってしまいそうだ。でも、そんな気持ちになる日が続いた。漢字テストで満点が取れなかったとき、分かっていた問題を間違えたとき。親にしようもないことで怒られたとき……。光は当たっているのに、私だけ暗くて前が見えない。そんなよく分からない思いをするようになった。友達と笑っているとき

も、私の心の奥には何かがぐるぐるとしていた。イヤホンがまたからむ。そして、必ず毎回こう思った。

“小学生の頃に戻りたい”

“あの時の心の軽さに戻りたい”

そんな私の思いをすべて打ち消してくれた出来事があった。それは国語現代の授業で読んだ、『木精』という小説だった。この物語の主人公フランツは思い入れのある谷間へ来ると「ハルロー」と呼び木精が返ってくるのを楽しんでいたが、フランツが大きくなってからこの谷間へ来ると木精の返答がなく、悲しんでしまう、というあらすじの話だ。授業で話を読み進めていくうちに、私は気づいた。私は“あたりまえ”から逃げていたことに。フランツは、木精の返事が返ってくるというあたりまえを楽しみ、大切にしている。そんなフランツとは違って、私は“日常”というあたりまえに思えて、あたりまえではないものから逃げていたと。そして、フランツは大人になって声変わりをしたため、ハルローと呼んでも返事はなかった。つまり、もう二度と返事が返ってきた時代に戻ることはない。私も同じだ。もう小学生に戻ることはない。その時その時を楽しんでいれば、きっと苦いチョコレートを噛むような、冷めたカイロを握っているような気持ちになることはないだろう。この話を読んでから私の考え方は変わった。イヤホンのひもも、す

一つとほどけた。

どんなにつらい日、どんなに大変な日でも。いや、普通の日常だったとしても、それはそれで良かった日なのだ。そんないつも通りの日だって、二度と私のところへやってきてくれることはないのだから。改めて、卒業式の日にかくさんの写真を撮っておいで良かったと感じた。きつとその写真達には、その瞬間の思い出がつまっているのだから。ありふれた毎日を写真に収めるのは本当に難しい。だからこそ、一日一日を大切な一瞬、大切な一日の思い出として考える。その時、その日、ありふれたいつもを最高に楽しんで。

そう、だから、

あたりまえってあたりまえじゃないみたいだ。

冬のアイスの食べ方

中一

冬のアイスは何故あんなにも美味しいのだろうか。確かに、夏のアイスも美味しい。あの暑さの中ヒンヤリとしたアイスはまさに砂漠の中のアアシスだ。しかし私は冬に食べるアイスにも一味違った美味しさがあることを知っている。そのことを知らない、知らなかった人には

是非この文章を読んでほしい。

私が冬のアイスが美味しいと知ったのは一昨年の冬休みにコンビニに行ったときだった。散歩ついでにコンビニに寄り、何も買うものが無かった私は、何か新作のアイスは無いのかと気になりアイスボックスをのぞいていた。その時、他の売り場に行っていた母がやって来て、「知ってた。冬に食べるアイスは上手くすれば夏のアイスよりも美味しいんだよ。」といった。その時私は呆れていた。ただでさえ寒いこの冬に更に冷たいアイスを食べるということは寒がりの私にとっては完全なる自殺行為だった。しかし、それと同時にどれほど美味しいのかわくにも気になってしまったため、物は試しというとうことで私は一番お気に入りのアイス「ガリガリ君ソーダ味」を手に取り、買い、帰路に着いた。

いざ食べようとするときに、母に止められ「自己流冬のアイスの食べ方」を教わった。

一、寒いところではなく暖かいところで食べるべし。寒いところで冷たいものを食べるのは冬のアイスの真の美味しさが損なわれるので暑すぎず寒すぎない所で食べるべし。

二、少し時間を置くべし。

今回私が買ったガリガリ君を例にすると、少し時間を置いてあえて少し溶かしておくとしーダ味のシロップと氷

の部分相まってとても美味しいのだ。

食べた時に私に衝撃が走った。世界に、それも身近にこんな美味しいものがあつたのかと恐ろしくなるぐらいに。少し溶かしただけでソーダ味のシロップと氷はこんなに美味しくなるのかと、とても信じられなかった。大袈裟だと思うだろうが、夏のアイスしか知らなかった私にはそれほどまでに驚きだったのだ。

この文章を読み終わつた貴方に言いたい。悪いことは言わない。今日家に帰る途中でコンビニに寄りお気に入りのアイスを買って帰り、初めての人は母の「自己流冬のアイスの食べ方」を、試してほしい。また新たな幸せが見つかるだろう。

お母さん

中一

「あ、そう。」

私がいかに相手をおかしくしている態度で言う。

「あ、そう。じゃなくて、真央はどう思ってるの。」

お母さんが真剣に、少し怒ったように言う。

「知らない。」

と言って私は、乱暴にドアを開けて乱暴に閉める。

「自分の気持ちを知らないなんてことないでしょ。」と自分につっこんだ。

「知らないなんてことないでしょ。」

今、まさに考えていたことを言われた。でもそれに聞こえないふりして、トイレのドアを乱暴に開けて乱暴に閉めた。

トイレの中でひざを抱えて座る。私はいつもこうだ。

お母さんとけんかして、苛立つてトイレに逃げる。本当はお母さんの言っていることが正しいと分かっているけれど、どうにも反抗してしまふ。多分私は反抗期というやつだ。なんだか子供っぽくて嫌だなと考えた時、ふと前にお母さんとけんかした時のことを思い出した。その時は、おこづかいをもらうためにお手伝いをしていたのに、それをもらえなくてけんかしていた。お母さんは意地悪でやったのではなく、忘れてしまっていただけだった。それだけなのに、私は今回のけんかと同じで、また相手をばかにしている態度で文句を言い、トイレに逃げた。その時お母さんが、「お母さんはおこづかいもらえないけどね。」と言った。

それを思い出した時、心の中にあつた怒りがぐらっと揺れた。そうだ。お母さんは毎日洗濯物を干したり、ご飯を作ったり、食器を洗ったり、自分も仕事をしているのに私のお弁当を作ってくれたり。私がお手伝いをすれ

ばもらえるおこづかいも、お母さんはもらえない。けんかだつてそうだ。面倒臭そうに話を聞く人になんて話したくないはずなのに、何度も叱ってくれた。鼻の奥がちゃんと痛くなった。

ドアのむこうから、

「真央、おせんべい食べる？」

とお母さんの声がする。私は心を決めてドアノブに手をかける。今度は乱暴にならないように、静かにドアを開けた。

桜

中一

水たまりにうつる晴れた美しい空、そこに浮かぶ小さな花びら。春の暖かい優しい風が頬を撫でていく。短い、でもとても幸せで忘れられないひと時だった。

その時は雨上がりで、空には美しい虹が出ていたのを覚えている。

小学五年生最後の日、帰りの会の前の休み時間だった気がする。私は大切な友達と学校の中庭にいた。本当はグラウンドで遊ぶうとしていたのだが、行くために降りてきた階段から見えた中庭のあまりの美しさに目を奪わ

れて二人共引き寄せられて行つたように思う。そこには満開を少し過ぎて散りゆく桜達の、この世のものではないかのような美しい光景が広がっていた。

そんな風にして私達は中庭に來た。こんなにもきれいなのに、なぜか周りには人がいなかった。だからこそ他人の目を気にせずに遊ぶ事が出来たと思う。「運がいいね」と二人で笑い合つたのを覚えている。

そこで私達は、雨上がりで水たまりがあつたので、水たまりをぬれないように飛びこえる遊びをした。水の表面にたゆたう桜の花びらとそこにうつる晴れた空のコントラストがとてもきれいで幸せな気持ちになったのを覚えてる。また、地面に落ちていたくさんの桜の花びらから泥のついていないきれいなものを探し出して、笛として吹き、どちらがより大きな音を出せるか競つた。

結果はあまり覚えていない。たぶんどんぐりの背比べだったと思う。でも、私が友達に教えて出せるようになった時、彼女がとても喜んでいたので覚えている。それを見ると私もなんだかうれしくなつた。

こんな風に童心に返つて遊ぶのは二人共久しぶりで、来学期から小学校最高学年となつて学校を引っ張つていくという責任感を忘れて小さい子のように思い切り遊ぶ事が出来たと思う。それに、他の人がしていない、幸せな時間を二人で過ごせた事が私は誇らしかつた。

六年生になった後も、私とその子はずっと仲が良く、学校でもそれ以外でもたくさん遊んでたくさん楽しい思い出を作った。でも、そんな中で一番はつきりと覚えていたのは二人で中庭で過ごした、こんな他愛ないひとときだった。他愛なくとも、一番きらきらと輝いていた思い出だ。これは私と彼女とのたくさんの思い出の中で一番大切なものと私は思っている。今でも晴れた日、少し散りはじめた桜を見ると彼女と過ごした幸せな日々を思い出す。桜は私の中で、私と彼女とをつなげてくれるようなとても大切な花になった。中学に上がる前、彼女と別れるのが怖くて不安になっていた私を、桜が彼女との日々を思い出させて励ましてくれた。

これからどんな事が起きたとしても春は来て、きっと桜は咲く。その時私が落ち込んでいたら桜はまた私をいやし、励ましてくれるだろう。だから、私は桜が好きだ。



多得多失

中一

四月に入り、期待と不安を胸に、入学式に出席する。中学生になって、テニス部に入部する。先輩に色々と教えてもらいながら、がんばる日々を送る。初めての合唱コンクールに向けて皆で励まし合いながら練習をする。本番では、緊張で手汗がすごい。初めての定期試験。がんばったけど、勉強の仕方が浮かばず、次はがんばろうと思う。夏休みに入り、毎日毎日部活で汗を流す。たまに、お友達と遊びに行く。夏休みの宿題に悪戦苦闘する。二期期に入り、久しぶりに会うお友達と夏休みの思い出を共有する。毎日目まぐるしく過ぎるけれど、まちがいなく充実している。クリスマス礼拝では夜の学校でキャンドルライトサービス。夜の学校は少しドキドキする。

はずだった……。

令和二年二月の終わり頃、私たちの今までの「当たり前」が、突然ひっくり返った。神奈川県には、四月七日に緊急事態宣言が発令された。

四月、五月、学校に登校できなかった。入学式は六月だったが全員マスク姿だった。七月の中旬まで分散登校で、クラスの半分のお友達と会うことはなかった。夏休みは短縮され、どこにも遊びに行けなかった。九月になって、やっとテニス部に入部できた。でもありとあらゆる試合が中止になった。新型コロナウイルスの第一波、第二波が起こり、十二月の末頃から第三波がやってきた。毎月、目を疑うような数の感染者のニュースを目にする。そして今、二回目の緊急事態宣言の最中である。新型コロナウイルスの感染拡大でたくさんものを失ったが、同時にたくさんに気付くことができたはずだ。

例えば……

・学校に行かなくても、オンラインで、勉強をすることができると知った。

・いつでも、どこにでも出かけることが「本当の自由」ではないことに気付いた。

・今分る限り私の近くの大切な人に感染者はいないが、どこかの誰かの大切な人が苦しんでいるかもしれないということを考えるようになった。

私たちの今までの「当たり前」はもう戻って来ないのかもしれないが、「新しい生活様式」の中で、私たちは確実に生きる喜びを見い出すことが出来ると私は信じて

いる。

多得多失なれど、コロナ退散せよ！

二百円ちようだい

中一

少しツーンとする寒さにおいて、サラサラと舞う雪、そしてシューッとすべるスキーやスノーボードの音。こは長野県野沢温泉スキー場。当時保育園の年中だった私は、スキースクールの先生に「みなさん、お父さんかお母さんに二百円もらってきてください。リフトに乗りますよー。」と言われた。

年中だった私は、一つ年上の友達の家と一緒に初めてのスキーをしに行った。当時は多分、雪の上は歩いているとすべり、ところどころフカフカしているというイメージしかなかったのだと思う。しかし、スキー場で思い思いに楽しんでいる人たちを見て、雪が積もっている場所ではできないことがたくさんある、ということが分かったのだろう。そりや、スキー、スノーボードですべっている人たちの中で、スキーをやってみたいと思ったことは、今でもはっきりと覚えている。

その日、私は午後のスキースクールに参加した。先生

はとても優しく、何度転んでも励ましてくださった。残り時間も半分を切った頃、「みなさん、お父さんかお母さんに二百円もらってきてください。リフトに乗りますよー」と先生がニコニコしながら言った。その時、私は先生が冗談を言ったのだと思った。でも、周りのみんながすぐに動き出したので、私も遅れて動き出し、近くで見ていた父に声をかけた。「これからリフトに乗るんだって。だから二百円ちょうだい。」するとこんな声が返ってきた。「冗談でしょ。」からかわれたような、少しバカにされたような気分になった。でも、父は半信半疑で二百円をくれた。その二百円は重たいような軽いような、よく分からない感じだった。でも絶対に、なにか特別な二百円だった。私は不安と嬉しさでいっぱいだった。足がガクガクする程怖かったのは、リフトの順番の間と、リフトに乗っている時だった。人生で初めてのリフトは、友達と他のもう一人の子、先生、私の四人で乗った。思っていた通り、だんだん緊張と怖さが高まっていく。手に持っていたストックが、頑張つてにぎりしめていても落ちそうだ。

よろけそうになりつつも、何とかリフトから降りた。スキー場を上から見下ろした途端、恐怖が消え、早くすべりたいという気持ちにパッと切り変わった。すべり始めると、途中で転びそうになりながらも、顔に風がひゅ

うひゅと当たり、風と一緒に舞う雪の中で息をするとひんやりとした空気が入ってくるのがとても気持ちよかった。スキーってこんなに楽しいんだと心から思った。スキースクールが終わると、すぐに父に「もう一回リフトに乗りたい。」とねだり、あと一、二回すべったことを思い出す。「一日ですべれるようになるなんて思ってたなかったよ。」と父にほめられ、嬉しくて誇らしかった。

来年も再来年もその次の年も、ツーンとする寒さとおい、サラサラと舞う雪、そしてシューッとすべるスキーやスノーボードの音にスキー場は包まれるのだろう。そしてその中で私はすべれるのだろうか。

一回二百円のリフトは千円札で足りるのだろうか。

流れ

中一

いつか終わる。いつの間にか過ぎていつて瞬きをする暇もなく朽ちていく。

私は時間というものがどうしようもなく嫌いだ。全て大切なものを一瞬の内に消し去って、新しい記憶で埋めてくる。

十一歳のとき、飼っていたハムスターが死んでしまった。何かのドッキリかと思った。朝見た時は確かにそこに命があつて温かかった。最近、毛が抜けてきたなどか元気がないなどか思っていたし、ああ死期が近いのかなとも思っていた。だけど、いつもの日常とは変わらないものだと思っていた。今思えば変わつて欲しくなくて、いつまでも永遠に続いて欲しくて事実から目を背けていただけなのかもしれない。だから、その時は誰か何かネタバラシしてくれるのではないかと待っていた。

一瞬、瞬きをする間の一瞬。それくらいの時間が何分何時間、途方もない時間に感じた。私の目から止めどなく流れる大粒の涙も、手に持っていた紙パックから溢れるジュースも床に落ちて混ざつていく。

その日は一日中泣いていた。泣きながらいつかは忘れてしまうのか、このやるせない気持ちも色々な後悔も全て時間が持ち去つていくのか。そんなことは嫌だけれど、一方で忘れられたら私が辛い思いをする必要がなくなるならいいと思っていた。

次の日の学校、いつもと変わらず何事もなかったかのように通っていた。同級生にはかわいがってくれた人もいたので一応教えた。その人たちと話しているときに

「一日中泣いてたんだよね」
と笑いながら言っている自分がいた。特に笑いで誤魔化

しているというわけでもなく本当に何も感じなかった。ただ事実を友達との話の種として淡々と語っていた。

年々一日が早く過ぎていくように感じる。ふとしたときに「ああ、何時間後かには家にいるんだろうな」とか「いつかは、今のことを忘れるんだな」と思う。

できるものならずつと子供でいたい。馬鹿みたいに友達と騒いでいて何もわからないままでいたい。でも、そんなことは叶はずがない。だから、そんなめんどくさいことは考えないでその一瞬を楽しめればそれでいい、いつか何かあつてもそれまでの思い出を引き出してその時を楽しめばいいんだ。

今でもハムスターが死んでしまった日付も時間も感情も後悔も何もかも覚えている。そろそろ命日だ。何を供えてあげようか。そんなことを思いながら宿題をしている私の耳には時計の針の音がやけに大きく聞こえた。

強敵の母

中一

大抵の人は私の絵を過大評価する。その理由は様々で、年下だから、友達だから、家族だからと必ず良い評価をする。

そんな甘やかされてきた私だが、一人だけ強敵がいる。それは、実の母である。

私がまだ幼い頃に描いた作品を一目見るなり、母はこんなことを吐き捨てた。

「なにこれ、本当に花？」

「へー、車なんだ。虫かと思った。」

今思えば当たり前の評価だ。ほぼ丸の花が画用紙一面に咲き乱れている花畑。楕円形の車体に、虫の目のような位置に描かれた黄色く光る車のライト。

しかし、それらの作品たちは当時の私にとって限りなく大切なものだった。

母の言葉が耳に入った瞬間、頭に血が昇っていく。血管の中を熱い血液がドクドクと流れる。じわっと汗をかいた。目を合わせて私が怒りを口にした。喧嘩が激しさを増していく。数分経った頃には全身が焼けるようになっていた。二人の怒りと熱が部屋中に籠っている。怒りに染まる怒鳴り声が、日の差し込む穏やかだったはずの日曜日に響き渡り続けていた。周囲の人々に褒められてばかりいた私の脳に、母の当然の評価が突き刺さる。

そんなやりとりを続けていたからか、気がついたら絵を描くことに意味を感じなくなっていた。以前のように鉛筆を持つても、描きたくない。——いや、絵を描くことによって、母の口から発せられる言葉が怖くて臆病に

なっていただけなのかもしれない。

こんなことを書いているところ考える人がいると思う。「冷たい母親だ。」「まだ幼かったんだから、もう少し優しくしてもいいんじゃないか。」確かにその時の私はまだ小学校低学年。描いた絵を見せれば優しい言葉が返ってくるのが恐らく普通のことなのだろう。

私は母に少しも感謝していなかった。友達とそのお母さんが仲睦まじく会話している様子を傍から見ていると、どうしようもなく複雑な気分になっていた。友達が幸せそうに、弾けるような笑顔を振りまくのを見て、辛くなっている自分が嫌だった。私をそんな風にした母のことも。今考えると母は何も悪くはないのに、幼稚だった私はひたすらに嫌っていた。

ある時、母としばらく会えなくなるということになった。いきなりの事であったため、嫌っているとは言えず悲しかった。

しかし、心の奥底では嬉しかった。

これからしばらく、優しい祖父母、叔母二人と暮らすことができるのだ。夢にまで見た最高の生活ができる。

そんな生活に慣れた頃だった。私はすっかり絵を描くことの楽しさに目覚めていた。

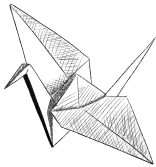
ただただ絵を描き続ける毎日。夢中とはまさにこのことだ。気の向くままに鉛筆を走らせていった。母への恐

怖が雪のように溶ける。

いなくなると知ることとはやはりあるもので、成長するにつれて母の「真っ直ぐな評価」がいかに大切か知るようになったのだ。周囲の人間が空気を読んで私を褒めていると気づき始めた。私はこの時初めて、「真っ直ぐな評価が欲しい。」と切に願ったのだった。

真っ直ぐな評価を再び得るために、
大人と同じ土俵に立つために、

また今日も夢中になって筆を走らせている私を黒い額縁越しに、厳しく、そして優しく見守る強敵の母の姿は、私を努力へと向かわせてくれる。



パパ観察日記

中二

やべ、話題がもうない。なんか、気まずい。いつも私の頭を混乱させるのは、父だ。父と二人きりになると、どうも話がしづらい。このままにしておくのは自分の中で納得がいかない。そこで、父を観察して彼を知ろう！という作戦を立てた。

小五の時から去年の七月まで単身赴任していた父に、私はあまり良い印象を持っていなかった。一緒にいる時間が少なかったのもあるが、怒られた時のトラウマのせいだ。父は怒ると他の何より怖い。だから、人に父の話をするときには一番初めに怖い、短気と答える。また、父は仕事柄機械に強い。たまに休日の昼間にリビングで仕事をすることがある。そのときの集中力ときたら恐いものだ。観察前の父への印象は怖い、短気、機械に強い。それくらいだ。やはり、印象は良くない。

そこから観察開始。話すことはどんなことが多いとか、父に質問するとか、色々なところに焦点を当てた。分かったことは沢山ある。例えば、意外と優しいこと。お腹が痛いと言えば、自分のことのように心配してくれる

る。テレビが見たいと言えば、呆れつつ貸してくれる。優しいと言うより、甘いのだ。また、意外と熱血なところ。ある漫画に出てくる台詞の中でそれが一番好きかを話している時だった。父が選んだ台詞は「やれるまでやればできる」だった。正直、私は驚きを隠せなかった。父のことだから、もつとクールな返答だとばかり思っていた。意外な発見をして、父を知ることが楽しくなった瞬間だった。あと、励まし下手であること。辛くて泣いている時は何も言わずうなずいてくれれば良いものを。この発見はあまりしたくなかった。

観察の中で、一番心に残った出来事がある。父がふいに私たち双子に質問したのだ。「本当にパパとママから愛されている自覚はある？」正直、どう答えるのが正しいのか分からなかった。頭の中は疑問でいっぱい。何故そんなこと聞くの？ 私たちが思春期だから？ 父は今、何を考えているの？ うなずくことしかできなかった。すると父は優しく微笑んだ。何も答えられず、少し罪悪感があった。しかし、それよりも理解できない気持ちの方が大きかった。今思えば、両親からの言葉を素直に受け取れない時期だからこそ、父は父で不安を抱いていたのかもしれない。本心は分からないけれど、父の人間性を感じた。

私の父は、優しくして笑顔の似合う人。怒りっぽいところ

ろはある。でも、それも父なんだ。面白いところも屁理屈なところも、負けず嫌いなところも、全部父だ。そして何より、私たち家族を世界一愛している。父が私の父親で本当に幸せだ。パパ、不安に思わないで。私はちゃんと家族から愛されているよ。大きな財産を抱えて私の観察日記は幕を閉じた。

初夢

中二

布団の上で半日過ごす。寝て、起きて、スマホ見て、また寝る。その繰り返し。私の長期休みの一日。ちなみに宿題は後半になって焦りながらやるタイプだ。自粛期間中もこんな風に過ごしていたものだから、体重は増え顔は丸くなった。スマホは手から離れないし、枕も頭にくっ付いていたかもしれない。当然、今回の冬休みもそんな感じで気づけばクリスマスは終わっていた。今日は大晦日。今日の夜は推しのカウントダウンコンサートの配信がある。私の推しのSUGAは眉を怪我していたので、最近のステージには上がっていないかった。今回のコンサートで久しぶりに歌っている姿を見られた。正確にはパソコンとだが私の中では推しと年越しをしたとい

うことにした。この上ない幸せだ。今年も良い一年になって欲しいと思いながら寝た。

気付いたら朝だった。昨日そのまま寝てしまったのでまずスマホを片手にシャワーに向かう。今日は驚くほど顔と髪の手調子が良い。それもまだ八時。お風呂から出ると、お母さんが作ってくれたおせちとお雑煮が食卓に並んでいた。とても、美味しかった。お年玉ももらった。何に使うか考えるだけで楽しい。ニュースを見てみれば、コロナはおさまったらしい。つまり、学校は以前のように戻り、部活は通常の時間でできるようになるということだ。折れた指は治って痛くも痒くもない。指につけていた固定テープからも、お箸の持ちにくさからも解放されて清々しい。部活でも以前のようなプレーができるに違いない。ご飯も美味しい。さらに、天気は晴れ。今にも飛べそうだ。家から見える富士山はいつも以上にきれいに見えた。驚くことに、富士山を見ていたら鷹が目の前を飛んで行ったのだ。いつもなら、カラスカスズメしかいないのに珍しい。群馬に住んでいる祖母からなすが送られて来た。そして、午後には家族で初詣に行った。おみくじを引いてみると、大吉。努力は百倍になって返ってくると書いてあった。今日は良いことばかりだ。ふと、「努力」の言葉に目が止まる。思い返してみると、私は、小さい頃から努力を沢山した記憶がない。中

学に入学したのも内部進学だったので、外部から受験した子に比べれば勉強していない。小学生の時も、少し塾に通っていたので学校の成績がもの凄く悪いという事は無かった。それに比べて、私の周りの人はダイエツとして物凄く可愛くなっていたり、夜遅くまで塾に行っていたり。よく考えれば今日一日だって、両親やいろいろな人のお陰で成り立っていたと思う。言い換えれば、その人たちの日々の努力の上に私の幸せがあったと言える。私はまだ未成年。大人と比べると出来ることに限界はあるだろう。しかし、何も努力をしないで行くのは違うと気付いた。

だからせめて、自分のできるだけでも自分の力だけで努力して、達成した時の幸せを感じてみたい。誰かではなく、出来る限りの自分の努力で。だから今年は、「目標達成するために努力」する事を目標にして頑張ろう。目標が達成しなくても、努力すれば良し。

そこで目が覚めた。夢から現実に戻されたが、私の決意は変わらない。今年の最後に、幸せ沢山の一年だと思えるように頑張ろう。

変わりゆく

中二

これは、世界が変わってしまいう前のお話。「学校」英語にすると「スクール」。私はこの響きがあまり好きではなかった。この言葉を聞くと何かに追われ、つきまといわれているように感じる。なぜなら、学校は「責任」のオンパレードだからだ。上下関係、人間関係、学習。学校の中では比較的責任を負うことがない下級生でさえ、たくさん責任を抱えている。その中の一つが、学校生活で必要不可欠である「目に見えないもの」を探る。つまり、「空気を読む」こと。私はこれが得意ではない。しかし、必要である以上、常に求められる。それがストレス耐性が弱い私にとっては大きな負担で、日に日に学校に対する苦手意識が強くなっていた。もちろん、学校に良いところもある。だが、学校が楽しいと手放しで思えるところまでは到達しなかった。そして月日が経ち、何とか学校に慣れてきた頃、突然、空白の期間が訪れた。休校期間だ。コロナウイルスによる影響で世の中の全てが変わったこの期間。それまでは「もう慣れただ」と思っていたが、休校期間中の生活はそれまでとは真

逆だった。家族以外の人とは全く接する機会がない。そんな生活が三カ月続いた。ほとんどの人が同じだったのではないかと思う。その中で、私の学校に対する意識は変わっていた。休校期間は学校から送られてきた課題を、自分の家で、自分だけで解く。これもまた今までとは全く違っている。その中で、私はふと「学校にいくことでしか得ることのできないことは何だろう」という疑問を抱いた。初めはそこまで深く考えていなかったが、休校期間がどんどん延長されていく中、時間があることの疑問の答えを探るようになった。一つ気づいたことは、学校は、「身につけたことを社会に出てどう活かすか」を考える場だということだ。学校生活にあって、休校期間にはないもの。それは「人と接する時間」だ。私が強いストレスを感じていた「人間関係」は学校でしか経験できないものなのかもしれない。そして、これはいつか学校を卒業して、社会に出たときにとっても大切なのではないだろうか。「苦手」と思う人もいる。空気を読むことへの苦手意識もなくなるらない。しかし、社会に出ると苦手な人と接する機会や空気を読まなければならぬ場面は増えると思う。そして、今よりもっともつと「責任」に追われることになるのだろうか。だからこそ、今から少しずつそう言う場面に慣れたり、どう対処すると良いか、を考えたりする。その経験が社会に出た時役

に立つかもしれない。そう考えることで一見面倒臭くて避けたいことにも前向きに取り組むことができる。私にとってこれは大発見だった。この発見のおかげで、心も軽くなったような気がする。

休校期間明け。やはり元の生活に戻ることはなかった。それでも世界は前に進んでいこうとしていて、元に戻ることは不可能なんだと思い知らされた。学校という狭い世界も、世の中全体も変わってしまった。しかし、この休校期間で私が大発見をしたように、人々は与えられた環境で吸収し、活かし、変化するのだろう。人間は変化の繰り返しで生きてきたのだと痛感した。人は支えあいながら生きている。そのため、どこにいても人と接することはある。だから、いろいろなことが変わったが、ただ一つ、人と人との繋がりは変わらない。

失ったものより得たものを。

中二

「この一年間、一体私達は何を失っただろう。」そんなことを、最近良く考える。例えば友人との時間、制限されずにのびのびいられること、挙げ出したら切りがない。私たちの自由をかつさらっていったウイルス。

憎むべきウイルス。自他共に認める、生粋のネガティブな私にも、とても許せるものではなかった。

私は信じられない程思考が消極的である。しかし、それはきっと自分に自信が無いからだと思う。機械音痴、方向音痴、人の話は基本的に聞いておらず、バカ真面目で空回りが多い。特に機械音痴はひどく、これまで何度もの物を壊して来ている。だから、このような事態となり休校期間中に、オンラインでの授業という新しい環境には不安で胸が押しつぶされそうだったのだ。

まず、新しいアカウントを作る所でつまづいた。朝一で起きて、夜中まで操作をしても作れず、結局作り終えることが出来たのは二日後の夜中だった。しかしそこから、先生からクラスへの招待が来ない、課題が届かない、そもそも家のWiFiが故障しているかもしれない、悩み、不安、疑惑が多すぎて何がなんだか訳が分からなくなってしまうていたことを思い出す。それでも、必死に操作方法の説明動画を見て勉強し、自分なりにしっかりと話を聞くようにした。よって今は、やっと出された課題が提出できるまでに成長した。本当に、我ながら褒めてあげたい。この大の機械音痴が少しでも機械を使えるようになったという大事件により、私の最も大きな問題である、“ネガティブ”も少しずつ変化していくのである。まず、人の話を聞いていないこと。厳密に

いうと、聞いてはいるがすぐ忘れるのだ。しかし、自分は機械において周りより圧倒的に遅れているという意識が痛い程湧いていた為、必死に聞き、メモを取るようにした。それが機械以外の所でも習慣化し、結果聞きもらしが激減した。そのおかげでバカ真面目で柔軟性に欠けた性格も直ってきた。一つ一つの行動に余裕が出て来たからだ。習った事や、ある程度まで知識のある事以外は以前まで怖かったのに、今では少しずつやってみようかな、と思えるようになった。一体何のおかげなのだろうか。機械音痴が多少直ったからか。いや、もしかしたらこのひどすぎる状況のおかげなのかもしれない。

ぽーっとしている私に気が付いた妹が、

「何考えてるん。」

と聞いて来た。私がつい前まで考えていたことの全てを妹に話すと、しばらく険しい顔をして、

「確かに、今年一年間は大変やったしつまらんかったけど、何も変われなかったっていうのは嘘やんな。精神的にも一歩前に進めたんじゃないかな。」

とだけ言い残して、その場を去っていつてしまった。想像以上に大人びた回答をされたのでびっくりしてしまっただが、確かにそうなのかもしれない。どこにも行くことが出来なかったからこそ、家での趣味を楽しんだり、自分と向き合う時間をくれたのはこの状況になったからな

のかもしれない。とても怖いし、心配なのは皆一緒である。しかし、明けない夜はないというように、きつといつか収束するはずなのだ。だから、少し心に余裕がある今にしか出来ない事を、私は最大限やってやろうと思っている。

ふと気が付くと、以前の自分からは考えることの出来ない程のポジティブな言葉の数々。よし、残るは方向音痴のみか。来年こそは色々な所へ行行って直してやる。そう心に誓った。

切実なる願い

中二

身長が欲しい。できれば一六〇cmはいきたい。あわよくば一七〇cm欲しい。これが私の最たる願いである。流石に一七〇cmは残念ながらも叶わないだろう。だが、一六〇cm、いや一五〇cm後半にいけるならば、どんなストイックな生活をも受け入れる覚悟だ。

昔から身長は私のコンプレックスだった。小学校低学年の体育の時間の整列。の順番を決める時間。案の定地獄である。大げさな言葉選びではない。あれは紛れもない地獄であった。身長の低い私は最早クラスの全員と背

を比べる必要もなく、せめて私と同じく比べてもらえなかった同士達と背比べするくらいだった。背中を合わせ、一体どっちが「勝者」か、はたまた「敗者」か、相手が勝つかも、いや私かも、とドキドキしながら迎えた決議。大抵私が負ける。そのことへのショックの度合いは、その後しばらく相手の顔を見られない私の様子で一目瞭然だっただろう。そして家に帰る度に「お母さん、何故私には身長がないのだろう……」と嘆くと、決まってる母はこう返す。「だーいじようぶ。それはまだね、成長期がきていないからだよ。成長期がくればそんな不安、どっかへ飛んでっちゃうよ！」と。母は身長が一六〇cm後半とそこそこ高かったので、その頃の私にとって母の言うことは絶対だった。そして身長に対し一縷の望みを得た私は、どんなに周りからチビチビ言われようと、成長期を迎えスラッと背が高くなった架空の自分を想像して耐えてきた。

そして今現在、私は猛烈に焦っている。実はその後小三の頃に身長がグイッと（そこまでではないが）伸び、背の順で前の方の人達の中では一番大きくなった。プチ勝者になることができた。だが、絶頂の幸せも束の間、またもや落ちていった。地獄に。小三以降は学年を重ねる度に身長を抜かされていき、チビの称号が我が手元に返ってきたのだ。そんな称号欲しくもない。そして既に

成長期らしきものを迎えてしまった今では、もう希望などない。一体私は何に縋ればいいのか。身長を諦めきれない私は、取り敢えず牛乳に成長促進ココアを混ぜて飲みまくっている。

妹とカメラ

中二

私の妹は優秀だ。私がすることを真似しては、私以上のことをして自分の手柄にする。おまけに顔立ちが良く、成績も良くて手先が器用なためか、可愛いね可愛いねえ、と愛されて育っているのだ。

もちろん姉としては、そんな可愛くて賢い妹がいることはとても嬉しいことだし、私よりも優れていることは認めている。だが同時に、うらやましいとも思う。妬みとはちがうような感情が時々、私の中でうまれるのだ。どれだけ点を上げて、更に上を行く妹に劣等感を抱いているのかもしれない。本来ならば妹が姉に抱くはずの感情を自分は感じてしまっているのかと思うと、悲しい様な恥ずかしい様な感覚になる。

それでも気持ちの切り替えが得意と思われる私は、不機嫌な顔を見せないために、スマホで写真を撮っ

たりするのが日課だった。家が高台に建っていることもあってか、空が夕焼けなどで美しく見える。その写真を撮ることが好きで、毎日という程ではないが気の向いた時に写真を撮ってはフォルダに入れて暇な時に眺めているのだ。妹はスマホを持っていないため、私だけができる、そんな感情が、その一時だけ、心から感じられるのだ。

中二になってから、妹がスマホを持つようになった。連絡用ではなく、遊ぶ用。アプリなどを入れて見られる自分専用のスマホが、私（お姉ちゃん）のように欲しいと強請って。新しい物ではなく、父がネットで買った古いスマホ。それでも妹は喜んで、おそろいだなんだとはしゃいでいた。

胸が痛かった。仕方の無いこととは分かっていたが、また真似されたのかと怒りのような何かが込み上げてきた気がした。憎くてたまらない、なんてことはないが、ため息が出る程には悲しみか何かを感じていた。

「お姉ちゃんとおそろいで良かったね。」

母は相変わらずそんな事を言っていた。女性とは同じの物を持つ習性の様な行動をすることは生物学的に証明されているらしい。前にテレビで見たことを思い出し、そんなものかな、と考えるながら妹とコンビニへアイスを買いに行った時だった。

「夕焼け、すごい綺麗だね。」

と、私が妹に言くと、妹はすかさずスマホを取り出して空の写真を撮った。手がぶれて歪んでいる写真を見て、ぷくーと頬を膨らませた妹に、貸してみな、と言って空を撮って見せた。妹はむっとした顔から一転、すごいすごいと笑顔ではしゃいでいた。

家に帰ってから妹は母に写真を見せて、これは私が撮って、こっちはお姉ちゃんが撮ったの、と喜んでいた。

「稟央は写真を撮るのが上手ね。」
と、母は笑った。

私は今まで妹に対して感じていた劣等感が少し軽くなった気がした。自分は自分、人は人というように妹には妹の良い所が、私には私の長所短所があるのだ、と改めて思えた気がしたのだ。

「お姉ちゃんは写真を撮るのが好きなんでしょ？　じゃあ今度、瑠衣とママのこといっぱい撮ってね！　約束ね、可愛くだからね！」

妹はそう言って、買ってきたアイスを食べ始めていた。彼女がつけたした「可愛く」とはどういった意味なのか。もしかすると、私の妹は、私以上に自分の魅力を感じていたのではないか。

また一つ妹の長所を見つけてしまった。やはり私は妹に敵わない、そう感じて、無邪気にアイスを食べる妹に

向けてシャッターを切った。

夜の十時に光る隣の家

中二

静かなる時計の音。だんだん針が重くなってゆく。一分がとても長く感じる。夜。私は長い時間時計を見つめていた。五分前にさかのぼる。

私は机の上に数学の問題集を出した。範囲を忘れた。たくさん紙とゴミが入っているクリアファイルの中から範囲の書いてあるプリントを探した。何枚もある紙の中から一枚のプリントを見つけ出すつまらない宝探し。ようやく見つけた。それだけで私は達成感につつまれ、私は天才と自分をほめまくった。そこから三分。範囲の書いてあるプリントを見つけただけでやる気をなくした私。上の方を見あげ気付いたら、時計をみつめていた。そして私は時計とコミュニケーションをとり、寝室に向かった。眠いからという理由で寝室に向かったのではない。ただ単に勉強をする気分ではなかったから。それともう一つ。現在夜の九時五十七分。あと三分で隣の家が光に包まれる。夜の調査開始。

妹は太陽のあたる部屋だった。窓から見える横浜の風

景はいつ見ても綺麗だった。朝は日がのぼり、太陽が海を反射してきれいにうつる。夜はキレイな夜景が見れる。妹の部屋は五つ星レストランなみの部屋だった。それに比べて私の部屋はカーテンを開けるとそこにあるのは隣の家の壁だった。最初の方は気分も暗く、当然落ちこんでいた。だが最近、その暗い自分の部屋で毎晩奇妙なことが起こっていると気付き始めた。夜十時になるとチカチカと三回から五回。多い時には、十回以上のライトが点滅するように隣の家から光がさしこんでくるのだ。それが毎晩続いた。私は夜、本を読みながら寝てしまふ。そしてまた起きて電氣をつけて本を読む。そしてまた、寝て起きて。この独特な本の読み方は私のクセであつた。隣の家の人が、それを嫌がつて私に毎晩いやがらせするようになってしまったのか。そんな不安もいだしながらその夜、私はついに窓をあけて、隣の家の壁をのぞきこんだ。おかしいことに隣の家の壁には、窓が一つしかなかった。そしてその窓に光はなかった。しかしどうしてだろう。まだ隣の家は光っている。私は、不気味に思った。その瞬間体全身に鳥肌がたち、その夜の調査はあきらめた。隣の家から光は出ていない。ではなぜ、隣の家が毎晩十時になると光に包まれるのだろうか。私には、不思議で仕方がなかった。

次の日。もう一度、十時に窓を開けて確かめた。確か

に隣の家から光は出ていない。私は隅から、隅まで探した。そして私はようやく見つけたのであった。自分の家に、取りつけてあったライトを。私は今まで隣の家の壁ばかり気にしていたが、下をのぞくとそこにはライトが光っていた。毎晩点滅していた物がまさか自分の家のものとは思ってもいなかった。朝になってあのライトの正体は何だったのか母にきいてみることにした。母は一言。

「猫用のライトでしょ。」

とつぶやいた。あのライトは、動く物を感知して光るライトであった。そこに毎日夜の十時に猫が来るという。本来、猫よけとして使うライトが、逆に猫をおびきよせていたのだ。私はいてもたってもいられず、ライトを見にいった。ライトがついている壁は、隣の家との細い道があり、猫が通る道にとっても適していた。私も入れるくらいのもので、とてもいごちが良かった。この道だけ、都会とはかけはなれた草いきれや虫の臭いがして、自然の中に迷いこんだような気持ちになった。猫が通っていた道は、私たちが生活している世界とは別世界だった。しばらく私は自然を味わった。

その日から、ライトが光ることはまったくといって良いほどなくなった。猫は私が秘密を知ったと分かったのか。私は分からない。最初は迷惑だった光が今はもうないことに私は、悲しさを感じていたのかもしれない。た

だ、私はその猫を、一目でも見てみたかった。それだけ。猫は消えた。私から。私はまだその猫のことを夢の中で追っている。

猫は夢への案内人

中二

私は小さい頃にこんな夢を持っていたのである。今自分がいる所とは違う世界に行ける場所がどこかにあって、その先には本の中のような素晴らしい世界が広がっていると想像していたのだ。私は幼い頃、母に絵本を読んでもらうのが大好きだった。また朝起きたとき、寝ている間に見た夢について自分で想像を膨らませ、その物語が面白ければ面白いほど楽しくて母に興奮しながら話していたのを覚えていいる。このように私は本当に想像するのが好きだったのだが、それは今もさほど変わっていない。

ある日こんな私にちょっとした出来事が起きたのだ。家から習い事へ向かう途中、ほぼ白だけどしつぽだけ灰色の猫に出会ったのだ。普通、野良猫ならすぐに逃げてしまうから「見かけた」という感じなのに、この猫は逃げずに私をじっと見ていたので「出会った」とい

う感覚に陥った。そして私を誘うように横の道へ入っていき、しなやかな動作で数段ある階段を登り、建物と塀の間へ入っていき奥からずっと私のことを見つめていた。不思議な空間だった。猫がいるというより、意志を持った人がそこで私を誘い出しているように思えてならなかったからだ。

私は結局、少しの間見詰め合った後その場を立ち去った。しかしこの出来事は私の頭の中でのトレンドニュースとなった。それはあの猫から感じた意志はなんだったのだろうと考えていると、ある想像が浮かんだからだった。あの猫は私のことをことは違う世界へ案内しようとしてくれていたのかなというものだ。その時、今浮かんだ想像と小さい頃の想像が繋がって、本の中のような素晴らしい世界の存在が少しだけ近くにあるように思えた。

小さい頃に想像していた夢の存在を近くに感じられた。そう思ったとき、私はとても嬉しくて幸せだった。このことは私にとって夢が叶ったようなものだったからだ。ただの想像だった夢の世界に手が届きそうに思えたのだから。

誰もがなにかしら夢を持っていたことがあると思う。ちよつとした夢だったとしても、大きな将来の夢だったとしても。そして叶った夢もあっただろうけれど、諦め

ようとした夢やまだ叶っていない夢がたくさんあると思うのだ。私は今回の出来事によって、心の中で夢を持ち続けていれば、いつか思いがけない形で叶うこともあるのではないかという可能性を信じようと思えた。だから夢は諦めない。他の夢を持ったとしても心の中に残しておく、と心に決めた。



生きる

中三

私は今日も生きている。学校へ行き授業を受けたり、休日友達と遊んだり……そんな変わり映えのしない単調な毎日を、何度も何度も繰り返している。しかし、そんな「明日」が必ずやってくるとは限らないことを、私は知っている。

私は小学生の時、友達に命を助けて貰ったことがある。あの日、学校の帰り道に友達と鬼ごっこをしながら帰っていた私は、鬼から逃げるのに必死で、横断歩道をあまり確認せずに猛ダッシュ。するとその瞬間、一緒に逃げていた友達が、「危ない！」と私を引き止めた。横断歩道を確認せずに渡ろうとした私は、あと少しで猛スピードで向かってくる自動車にぶつかる所だったのだ。あの時、友達が声を掛けてくれなければ、今の私はこの世に存在していない。

あの時、友達が助けてくれなかったら——そう改めて考えることが出来たのは、最近あるニュースを目にしたからである。それは、『池袋暴走事故』についてのニュースだった。この事故は、二〇一九年四月十九日に東京

・池袋で、高齢者の運転する車が暴走、横断歩道を渡っていた母子がはねられ死亡し、十人が重軽傷を負ったのにもかかわらず、被告は起訴状の内容を否認し、無罪を主張しているという、何とも凄惨な内容だった。この事故で妻と娘を亡くした松永さんは、「一瞬で私たちの未来を奪われてしまった。」と涙を流しながら苦しそうに話していた。その姿は、突然大切な人を失う悲しみ、そして理由もなく今まで通りの明日がやってこない恐ろしさを物語っていた。

また会いたいのに。もうすぐで娘の誕生日だったのに。帰ってきて欲しいのに。なぜ大切な人達が亡くならなければならなかったのか。その答えが分かる日は来るのだろうか。あの日、もう少し家を出るのが遅かったら、自転車に向かっていなかったら、何かが少しでも違っていたら、大切な命は失われずに済んだかもしれないと思うと、胸が本当に苦しくなった。

もし、あの時、私がこの二人のように死んでいたら、家族や友達はどれだけ悲しんだろうか。想像しただけで涙が出そうになった。私はこのニュースを見る前は、「あの時死んでいたら、今みたいな苦しみや辛さに合ううことは無かったのに」「別に今死んでもいいや」、そんな風に思っていた。しかし、そんなことを少しでも考えていた私は、命について真剣に考えたことが無かっただ

けだったのだ。

きつとあの時死んでいたら、家族はとても悲しみ、自分を責めて、苦しんでいたかもしれない。私の死を目の当たりにした友達も、一生トラウマで苦しみ続けていたかもしれない。そう思ったら、「今、生きていて良かった。」そう心から感じる事が出来た。

今、社会問題になっていている自殺。いじめやネット上での誹謗中傷などに耐えきれなくなり、「もう生きるのが辛いから死んでもいい。」という理由で、自殺してしまう人が沢山いる。しかし、どんな状況下であつても、そんなことは絶対にしてはいけないのだ。世の中には生きてくても生きられなかった命があることを忘れてはいけない。自分が死んだ後、悲しむ家族や友達がいることを忘れてはいけないのだ。

私達は毎日毎日生きている。しかしその中で、苦しいこと、悲しいこと、失敗して落ち込んでしまうこと、そういうことがよく起こる。でも、学校での友達とのおしゃべり、部活での達成感、毎日のご飯が美味しいこと、帰る家があること。そういう日常の中に隠れている小さな当たり前こそが、本当の幸せだということに気が付いた。そして生きているだけで、誰かを幸せにしているという事にも気が付くことが出来た。

だから私はこれから生き続ける。友達から守って貰

ったこの命。当たり前の明日をただ待つのではなく、自分で迎えに行けるように、「ありがとう」そう伝えられる思いやりの心を持ち、生きていることに感謝して、自分の一度きりの人生を、輝かせながら生きていく。

タイムマシンは机の中から

中三

私は二十歳になったら何をしているのだろう。人は未来の自分を想像する。だが本当にそれは、楽しいのか。

私は三歳で自分のことを認識してから、「大人の私」ばかりを思い描いていた。その頃の「大人の私」の基準は二十歳。お酒にでも懂れていたのだろうか。

六歳になって、文字を書けるようになり、「手紙」の存在に気付いた。それまで知らなかったわけではない。幼稚園でも、友達と手紙の交換はしていたのだ。文字も書けないのにどうやって、やり取りしていたのかまでは覚えていないが。

私が気付いたのは、自分の気持ちを未来の「私」に伝えられるということ。「これを使えば、未来の自分とコミュニケーションが取れる」と思い、「二十歳の私へ」という手紙を作った。封筒まで手作りし、習いたての字

を使って一生懸命、未来の自分への質問を書いた。

それから誕生日や、大きなイベントがあるたびに手紙を追加した。その時の自分の悩みを打ち明けていたのかもしれない。

私がなぜ、そんな昔のことを覚えているかというと、証拠があるからだ。ある日、部屋の片付けをしていると、机の引き出しの中から「二十になったらみて」と書いてある赤い折り紙で作られた封筒が出てきた。私は書いた記憶がなかったのです、すぐに書いてあった掟を破り、開けた。中には、四つ折りにされた五枚の手紙が入っていた。

一枚目を見ると、「あたしが二十さいのころには、はだがいけいかもしれない。あたしのほうがかっているけど。あたしは六さい。」と書いてあった。すぐに部屋のドアを閉め、もう一度落ち着いて読んだ。ツツコミ所がありすぎて、顔が真っ赤になるほど一人で笑っていた。

他の手紙にも目を通した。

二枚目と三枚目は、ひどく落ち込んでいたようで殴り書きだったが、所々文字が滲んでいた。何回も読み直している、不思議と手紙を書いている時を思い出して、今度は一人で泣いてしまった。

四枚目は未来の私への質問しか書いていなかったが、五枚目は十二歳の時のもので、自分がなりたいたい身長や職

業、性格、頭脳、趣味などが事細かく決められていた。息が詰まりそうな目標ばかりで、当時の私は何を考えていたのだろうかと思った。

思い出した記憶の中では、五十枚ぐらい書いたつもりだったが、この十二歳の時に捨てたのだろうか。

そもそも、今まで忘れていた私自身に驚いた。中学に入ってから忙しくなったからか。やはり手紙は残さなければいけないと感じた。

五枚の手紙でこんなにも一喜一憂出来るとは、このプロジェクトを始めた六歳の私に拍手を送りたい。

だが、本当に大人の私は十五歳の私の手紙を読んでくれるのだろうか。受け入れてくれたらいいけれど。



不時着先は笑顔

中三

「長方形の形の紙があると紙飛行機が折りたくなくなります。」

中学一年生、初回の聖書の授業。またやつてしまった。自己紹介をする時、緊張しておかしなことを口走る私。まだ名前も覚えられていないクラスメイトの印象に残ればそれでいいか。不用なプリントで折った紙飛行機を見て、苦笑いをする。自己紹介の失敗はこれで何度目だろう。

祖母の家は私の家の隣にある。玄関から約十歩で着くのが小さい頃の自慢だった。祖父はいつも小上がりの奥に座っていた。朝と夕方には必ずヨーグルトに砂糖をかけて食べていた。常に無表情、物静かで、怒ったり大きな声で笑ったり、人の悪口も言わない人だった。日本生まれ、日本育ちのはずだが、目は青みがかった色をしていた。父が初めて祖父に会った時、ロシア人かと勘違いしたらしい。

一見誠実そうな祖父だが、身の回りのことはすべて祖母と叔母がしていた。なんだか偉そうだ。今思うと、家

事をしないというより、苦手だったのではないかと思う。

保育園から帰り、母の仕事が終わるまで、私は祖母の家で過ごしていた。祖父から文字の読み書きなどを教わったが、その中で私が一番熱中したのは紙飛行機だった。いろいろなチラシや新聞紙で沢山の紙飛行機を折り、毎日のように飛ばしていた。

ある日、初めて自分一人で紙飛行機を折ってみた。自信満々に小上がりから向こう側のピアノまで紙飛行機を飛ばした。しかし、端も揃っていないガタガタの紙飛行機は、そう遠くへ飛ぶはずもなく、祖父の食べていたヨーグルトに墜落。私は大慌てで謝ったが、祖父はなぜか笑っていた。その後、祖母にこっぴどく叱られたが、この時見た祖父の笑顔は頭から離れなかった。

あれから数年たった夏の朝。目を覚ますとなんだか周りが忙しそうに見えた。母に声をかけると、
「おじいちゃんね、お星さまになったよ。」

当時小学二年生だった私にも、母が何を言っているのかわ解できた。祖父が入院していたのは知っていたが、あまりにも唐突で、涙すら出なかった。

葬儀の準備は着々と進み、当日は沢山の人に来ていた。祖父の戒名は呪文のように長かった。最後に棺に花を入れた。せっかくなら一番目立つ所に入れよう。頭の左右対称に花を添えてお別れをした。しばらくして祖父

は骨になって帰ってきた。私が花を入れた場所は祖父の瞳みたいにほんのり青く染まっていた。

今まで、「死」に対して悲しいというイメージが強かったが、初めて身近に感じた「死」は、なんだかあつけないように思えた。だからこそ、一日一日を大切に生きていかなければいけないのだろう。

もう祖父が亡くなって八年になるが、今もあの小上がりの奥に座っているように思える。長方形の紙があると紙飛行機を折るのは変わらない。毎日のように折っていた習慣はそう簡単にはなくならないようだ。出来上がった物が遠くに飛ぶか飛ばないか、どこに落ちるかは関係ない。ただ、祖父との思い出を、あの時見た笑顔を忘れないために私は折り続けている。

空と雨とエトセトラ、エトセトラ……

中三

空が好きなんです。朝焼けや快晴も良いですし、夕焼けや夜空も好きです。人の気持ちのみならず、街の色彩さえも塗り替えてしまう、そんな大きな存在って、安心しますよね。

そんな空たちの中でも一番好きなのは……。雨空なん

です。

「雨」というものに、すごく惹かれるんですよね。しかし、湿気やジメジメしたものは嫌いなんですが……。なのになぜか、雨は好き。

鉛色の空だったり、どんよりとした街に花のように開く色とりどりの傘だったり。モノクローム絵にポツリ、ポツリと絵の具を落としたようです。

雨音も聞いていて飽きないですよ。傘を差して聞いてこえる軽快な音も好きですが、トタン屋根を叩く大きな音や、木の葉に打ちつける雨の激しい音もまたいいです。雨漏りを受け止めるバケツやたらい、鍋たちは、いつしか己の本質を忘れ、楽しげに音楽を奏でます。

少し前に、某テレビ番組で雨音のリズムに合わせて作られた歌が流れていたんです。それを最近思い出しまして、雨をモチーフにした曲を作りたいなあ、なんて思っています。

雨の日って、無性に外に出たくなるんです。ちよつと小降りの時に、ちよつとお洒落なレインコートを着て。濡れた街が水たまりに反射してキラキラと輝くのは何とも綺麗ですし、その水たまりを、パシヤン、と踏むと、街がゆらりとゆらめいて蜃気楼のよう。

雨の街というと、独特な匂いがしますよね。あの匂い、私は結構好きなんです。が、正体はアスファルトと土

波卵の予感

中三

ほこりの匂いなんだとか。個人的には少し衝撃だったのです。でも、この匂い、「石のエッセンス」という意味の、何とも素敵な名前が付いているんです。その名も「ペトリコール」。歌い出したくなるような名前です。響きが素敵です。

雨の中を歩きながら、モノクロの蟹気楼の街を旅して、ペトリコールに思いを馳せながら、殻を濡らしたかたつむりと追いかけてこをする。そんな日があってもいいですなあ、などと考えを巡らせる、今日この頃の私です。

私が最近胸躍ったシチュエーションは、雨の日に、ちよつぷりお洒落な街のちよつぷりお洒落なカフェ（街を見下ろせるから二階とか！）で、ちよつぷり昔の外国文学を片手にホットココアを飲む、というもの。レイ・ブラッドベリやO・ヘンリーなんかを読んでいると、雨粒に濡れた窓にうつるいつもの街並が、ちよつぷり特別に見えるんです。

雨には、日常風景の「見え方」を変える、特別な力があるのかもしれない。

嘘をつく時、鼻が伸びるのはビノキオ。嘘をつく時、目が泳ぐのは私。これは私の中の格言である。一口に嘘といっても、人を貶めるための嘘や、都合の悪いことを隠すための嘘、人を思いつく嘘など、様々な嘘がある。今回取り上げていくのは、人のためを思いつく嘘についてだ。

私がついたこの嘘は、今まで誰にも話したことがない嘘である。それは明太子よりたうの方が実は好きであるということだ。

なんだそんなことかと思われるかもしれないが、私にとつては重大な問題である。私は辛いものが好きで、家族もそう思っている。だから

「ふみは辛いのが好きだから、たらこじゃなくて明太子買ってきたよ。」

となってしまうのである。

そりゃあ明太子も嫌いではないけれど、私はたらこが好きなのである。しかしもし私が、この場で何故たらこではなく明太子なのかと憤慨すれば、家族の善意を踏み

にじった極悪非道な親不孝者になってしまう。それだけは避けたい。

だから私は明るくこう答えるのだ。

「うわあ、明太子、買ってきてくれたんだ。ありがとうね。」

と。ここでニツコリと笑うとなおよい。

こうして家族は私が明太子が好きな子と認識して、また明太子を買ってくるのである。そうこうしている内に、私がこの嘘をつき続けてから早六年たった。

ある日の食卓にてその事件は起きた。本当に平和だったはずなのに。

「ふみって嘘つくの下手だよね。」

この一言から戦いの火ぶたは切って落とされたのである。姉の言葉だった。私は焦った。何故なら明太子を美味しい美味しいと食べていたからだ。焦る私を気にも止めずに母は言った。

「全部表情に出てるよね。好きじゃないと口数が少なくなるし。」

これはもしかしてバレているのだろうか。私の嘘など見抜いた上で、此奴らは手のひらの上で私を弄んでいるのだろうか。そんな考えが私の頭の中を回った。悪魔だ。彼奴らはなんて意地が悪いんだ。明太子を買ってきた父の前でそんな話をするなんて。しかも凶星だから下手に

挽回できない。口を挟んだ所で彼奴らに言い負かされるのがオチだ。

私は腹を括った。ここで全てを終わらせるために言った。

「私が明太子よりたらこの方が好きなの知ってたの。」一呼吸おいてから彼奴らは顔を見合わせて一言。

「そうなの？」

ああ、墓穴を掘った。

うちら姉妹はサンタクロース

中三

「サンタさんって本当にいるよね？」

五年生の三女の彩莉にこう言われた。二年ほど前に母が「サンタさんはいない」ということを私達に話していたので、そう言われて、とても驚いた。だが本当に信じているのなら、子どもの夢を壊すことはしたくない。その場は曖昧な返事をして自分の部屋へ逃げ込んだ。

次女の杏莉にLINEで先程起きた出来事を伝えた。昨年からサンタさんからのプレゼントは来ていないから、今年も来ないだろう。そう考えるとだんだん可哀想に思えてきた。すると杏莉から一件の返信が来た。

「サントになろうよ。」

びっくりしすぎてスマホをぶん投げてしまった。私はサントデビューするのは数十年後だと思っていた。まさか中学生でサントになるとは思ってもみなかった。

作戦はこうだ。二十三日に私達三姉妹で映画を見に行く予定だから、映画を見終わったら、杏莉が彩莉の気を引いている間に私がダッシュで買に行くという、私の行動の速さにかかっている作戦だ。のろまな私にとって、とても難しい作戦だが、同じ歳の他の皆より一段大人になった気分嬉しさもあった。

サントクロース作戦当日。みなとみらいのブルク13で映画を見た後、マークイズへ移動をした。トイザらスがあるからだ。マークイズに着いてからそのままトイザらスに行くことバレてしまうから、一つ下の階にあるユニクロに行くことにした。ユニクロに入ってから、彩莉が子ども用コーナーに行くのを見届けて、早歩きで出た。

本当は走ってはいけないエスカレーターもダッシュで上り、一分もかからずトイザらスに着いた。商品をカゴに入れ、レジまで急いだ。ところが急いでいる私を尻目に、レジには長蛇の列が出来ていた。並んでいる人のほとんどが私と同じ状況らしく、ソワソワしていた。少し時間がかかったものの、無事会計が終わった。

妹達の場所に戻ると、悠々と試着を繰り返していた。

安心してホッと一息ついた。その後、色々な場所を回って家へ帰った。

二十四日の夜。彩莉がいびきをかき始めた頃、私と杏莉はむくりと起きた。目で合図をし合い、杏莉がプレゼントを別の部屋から持ってきた。ドキドキ。心臓の音が速くなっていくのが分かる。そと彩莉の枕元にプレゼントを置くと、急いでベッドの中に入り、二人で小さな声で笑った。

「ところでさ、なんかもう一つ変なやつあったけど、あれなに?」

「あれはね……」

そう、実は杏莉にもプレゼントを用意していた。甘いキヤンデイーだ。手渡すと杏莉はニッコリと笑い、ハゲをしながら、

「ありがとう」

と私の耳元で囁いた。私も力いっぱいハゲをしながら杏莉の背中をゆっくりと撫でた。



私のメタモルフォーゼ

中三

プリキュアメタモルフォーゼ夢見る乙女の底力受けてみなさい

これは、私の大好きな「Yesープリキュア5」に出てくるセリフです。小さい頃、意味も分からず言っていたセリフですが、「メタモルフォーゼ」つてなんなのよと思っていた覚えがあります。調べてみたら「変身」という意味だそうです。

小さい頃は、プリキュアが突然街の下真ん中で変身をはじめると何も違和感を感じずに観ていました。しかし、あれから十年程たった今見てみると、思考が「メタモルフォーゼ」してしまったようで、「え。パンツ見えるじゃん。なんで髪の毛伸びるんだよ」と違和感しか感じませんでした。

「思考がメタモルフォーゼ」はとても良い言葉です。ツイッターのトレンド入りしてもおかしくない言葉です。もし、この言葉を誰かが気に入ってくれてトレンド入りをした時に、私の言葉だと証明出来るようにこの作文をスマホのメモに残しておこうと思います。

私はなんでもスマホのメモに残しておきたい性質なようで、後から見返してみると書いた憶えのないものばかりで、まるで「君の名は。」の映画のようです。

一番昔のメモは、二〇一七年十一月です。私が小六の時ですね。ついこの前まで、ランドセルを背負っていたみたいです。メモには見た夢の内容が細かく書かれていたり、やりたいこと、見たい映画やドラマなど。特に重要なことをメモしないのにはなにか訳があるはずです。きっと。

最近のメモを見ると、礼拝の原稿や、やらなければいけないこと、とそのようなことしか書いています。ランドセルを背負っていた時はやり「たい」、と自分の欲だけを書いていました。けれど、責任を背負っている今は、やらなくては「いけない」と変化しました。この変化は親に頼りっぱなしだった私が自分で行動できるまでに成長しているという、大人への大きな一歩なのです。あと何歩、大人への道を歩めばいいのかと考えてしまいます。そんなことを考えている内は、大人になてなれないでしょうに。

でも、この十五歳は子供にも大人にも素直に変身できると考えています。バケツ程の大きいアイスクリームを夜中にひとりで食べる時は子供であるし、妹と喧嘩する時は大人（子供になつてしまうことは少しあります）に

なれます。沢山、変身しているのでもうプリキュアです。

私は、大人になってもこのままでいたい。

下らないことですぐ笑える大人になりたいです。変わらないためには変わり続けていくことが大事だと思います。矛盾してますよね。分かります。でも、お母さんは「世の中には、なんとなくて良いものもある」と言っていたので、ここは、私のお母さんに従って下さい。

ある程度、変わり続けた後は、プリキュアではなくなってしまうけれど、次はプリキュアの師匠になる番です。だから今、楽しんでおきます。

プリキュアになれる幸せを。

きつとその香りをかぐたびに思い出す季節がある

中三

人間の嗅覚は不思議だ。ある匂いを嗅いだ瞬間に、過去の光景がフラッシュバックすることがある。この不思議な現象の正体は何なのかと調べてみると、「ブルースト効果」といわれるものであった。フランスの人気作家であるマルセル・ブルーストの「失われた時を求めて」という作品で、主人公が紅茶にマドレーヌを浸した時の

香りで幼少時代の記憶を思い出す、という描写に由来しているそうだ。

嗅覚は五感の中で唯一、感情・本能を司る脳の器官に直接つながっているため、匂いから記憶や感情が呼び覚まされるという現象が起きるらしい。

反町駅から学校へ行く道の途中にキンモクセイが咲いている。人によつては「臭い」とも感じる、あの独特な香りをもつキンモクセイだが、その香りは私にある季節を思い出させてくれる。

幼稚園の頃の話だ。私は幼稚園が嫌いだった。なぜなら、ある女の子によく指図されていたからだ。逆らえば何をしてくれるか分からないため、黙って従っていた。まるで王様と召し使いだった。

ある日、皆で工作することになった。何を作ったかは忘れたが、その時にでんぶんのりを使ったことは覚えていた。王様はのりを忘れたらしく、私が使っている最中に当然の如く横取りしてきた。取り返そうと必死になっていると、召し使い二人目が頭を叩いてきた。痛くて悔しくて泣いてしまった。

この事件があつてからはでんぶんのりが嫌いになった。そしてでんぶんのりの匂いに似ているキンモクセイも嫌いになった。家の近くにキンモクセイが咲いているのだが、その匂いを嗅ぐ度に嫌な気分になっていたこと

を覚えている。まあ、楽しいこともあったが、私の幼稚園時代はこんな感じであった。

時は流れて小学六年生になったばかりの頃。図工の授業でどんぶんのりを使うことになった。新しいクラスに入ってまだ間もなく、同じ班のメンバーの誰とも話した事がない状況だった。私は久しぶりにどんぶんのりと御対面し、事件の一部始終を思い出してしまっていた。と、その瞬間。

「おいしい！」

という声があった。図工の時間に何事かと思い、声のした方を見ると、同じ班のメンバーの一人であるみずきちゃんがあると、どんぶんのりを食していた。

しばらく私は呆気に取り残っていたが、思い直して本当においしいのかと聞き返した。するとみずきちゃんは、

「塩麴の味がする。食べてみな。」

と言った。今度こそ私は嘔き出した。勇気をふり絞って、言われた通りでどんぶんのりを口にしてみると、食べられなくはない味だった。

それをきっかけに、私とみずきちゃんは親友と呼んでもいいくらいに仲が良くなった。思ったことは何でも言い合えたし、悩んでいる事があればお互いに助け合っていた。私の小学校生活において、かけがえない友達となった。みずきちゃんとは今でもメールでやり取りをして

いる。

私とみずきちゃんとの出会いのきっかけは、やはりでんぶんのりである。ありがとう、のり。こういうわけで私のでんぶんのりの香りに対する記憶は嫌な思い出から良い思い出へと塗り変わった。

匂いを通して昔の思い出に浸れるのが好きだ。その時着ていた服も、立っていた場所も、全部思い出す。そして、決まって最後に心の中が温かなもので溢れる。これからは私は、キンモクセイの香りをかぐたびにその季節を思い出すことだろう。

ミルクチョコレート

中三

兄の悔しがる顔が見たい。どうしても私と同じ思いをさせたいと思った。

私には五つ上、現在大学生の兄がいる。兄は昔から何でも完璧だった。勉強もできるし、運動も音楽も得意でルックスも悪くなく、性格までがいいという非の打ち所がない人なのだ。そんな兄が、親戚やご近所さんに事あるごとに褒められているのを、幼い私はずっと唇を噛んで見ていた。そして、この人よりも努力して優秀になら

なければならぬと思ひ込んでいた。

小学校に入学した私は、兄が三十分勉強したなら一時間、兄が一時間勉強したなら一時間三十分と、常に兄よりも多く努力するようにした。そうすればいつか兄に勝てる気がしたからだ。しかし、そう簡単にいくものではない。兄とは逆に、私は酷い点数を取って補習と呼ばれたことさえある。同じくらい、いやそれ以上努力しているはずなのに、どうしても兄には手が届かなかった。

やっと良い結果が出たのは、学期末の成績表だった。その成績は、全が一番上の評価、つまりオールAだったのだ。私は飛び上がって喜んだ。兄と同じように私もみんなに褒めてもらえる、兄の悔しがる顔を見ることができ、そう思った。

急いで家に帰り、ランドセルも置かずに成績表を両親に見せる。もちろん二人とも喜んでくれた。それを聞きつけた祖父と祖母も同じように喜び、褒めてくれた。

「お兄ちゃん、二階にいるから見せておいで。」

と言われ、褒め立てられて更に調子に乗った私は、したり顔で兄に成績表を見せた。すると兄は、

「え、何これ凄いじゃん！」

と、自分のことのように喜んだ。その顔は作り笑いでも何でもない、満面の笑みだった。

何かが違う。ようやくランドセルを置いた私はそう思

った。思った通り、家族は褒めてくれた。それも願いの一つだったので純粹に嬉しい。しかし、それだけでは駄目なのだ。私はまだ、兄が嫉妬する顔を見ていない。兄より優秀な結果を出したのに。

そして、どんなに考えても納得がいかない私は、腹いせにチョコ好きの兄がお小遣いで買ったミルクチョココレートをヤケ食いしようと思った。ミルクチョココレートは私の好物でもあったのだ。

そこで、戸棚の一番上に手を伸ばした瞬間、パリーンと何かが割れる音がした。驚いて床を見ると、ガラスの破片が一面に散らばっている。その破片の正体に気が付いた私は、目の前が真っ暗になった。

「どうしたの!？」

クラッシュ音を聞きつけた母と兄が、慌ただしく部屋に入ってくる。私はどのような顔で、どうこの状況を説明したら良いのか分からず、呆然と立ち尽くすことしかできなかった。割れたものは、兄が昔の友達からもらったお気に入りのコップだったからだ。手を伸ばそうとした時、横に置いてあったコップが落下して割れたのだ。兄がそのコップを本当に大事にしているということを私は知っていた。

兄は、私を責めたり咎めたりはしなかった。ただ、本当に悔しがって泣き叫んでいただけだった。それはまさ

しく、私がずっと望んでいた兄の悔しがる姿であった。しかし、私は喜ぶどころかそのような顔をさせてしまった自分を恨み、兄と一緒に泣き叫んだ。兄の弱い所を見て、兄弟とは互いに優劣をつけるような存在ではないのだとやっと分かった。

それから数年経った今でも、結局は兄が私より優秀であることに変わりはない。兄の悔しがる顔もあの時以来、見た覚えがない。

しかし、私の兄への敵対感情はすっかり変わり、心から兄を尊敬できるようになった。その他に、もうひとつ変わったことがあるとするならば、私たちの大好物であったミルクチョコレートが、ビター味になったということだと思う。

卵の殻

中三

私はいつか死ぬ。明日かも、明後日かも、今日寝ている時かもしれない。

「人はいつ死ぬか分からない。だから毎日を本気で生きる。」

どこかで聞いた言葉だ。私ももう、今年で十六歳にな

る。何もかも初めてだらけだった中学生も卒業する。大人になっていく。

中学一年生、周りには知らない人ばかり、嫌な人も、良い人もいた。一年の中で何度も何度もけんかをし、ぶつかり合い、今考えると自分は馬鹿だったと心から思うが、このけんかがあったからこそ、人との接し方が分かってきたのではないかと思う。

この時の私は、まだ卵だった。

中学二年生、自分の性格を知った気がしていた。好きなことも、やりたいことも、夢も、二年生になった途端、未来が見えるかのように全てが分かった。学校に行くのがすごく楽しくて、何もかもが良い方向へ走っていた。いわゆる、絶頂期だった。

この時私は、幼虫になった。

中学三年生、義務教育最後の年、中学生のトップとなった年、私は今まで以上に全てに命をかけていた。勉強、部活、人間関係、全てを全力でと思っていた矢先、休校となってしまい、何もかもなくなった。家にいる時間が増え、どうすることもできなくなり、私自身途方に暮れる毎日だった。でも今年は全てに全力で取り組みと決めた私は、休校中にできることは全てする、そう決めて部活で試合が出来ることを信じ、筋トレにはげみ、送られてくる課題はしっかり一つ一つ着実にこなしていた。

やっと学校が再開した。部活では一番の記録を出せて、テストの点数も上がって、私は小さなことでも続ければ大きな結果に繋がるということ、「継続は力なり。」という言葉の意味が心から分かった。数カ月間に、自分の殻を破れた気がした。

私はやっと、成虫になった。

これから、高校生になり、大学生になり、大人になって、たくさんの人と関わり、もっともつと自分の殻を破って生きていくと願っているけれど、人生には、まさかのことが起きる。いつ、どこで、何が起きるなんて誰にも分からない。だけど分からないからこそ、人生は面白くて、つまらなくて、たくさんのことを乗り越えて成長していけるのだと思う。

新しい所へ行くたび、何かに挑戦するたび、私たちは何度も卵になって、何度も殻を破って、成長し続けるのだと思う。

いつか死んでいく日まで。



春泥棒

高一

「春の匂いがした！」昔そう言って母に笑われたのを覚えてる。私も自分で言っておきながら照れ臭く、母と一緒に大笑いしてしまった。梢々の隙間から溢れる柔らかな日の光。春を象徴する満開の桃色の花。控えめに揺れる勿忘草^{わすれな草}。横を吹き抜ける風はそれらの匂いをぼろぼろとこぼしながら走り去る。春はいつも匂いで溢れている。

二〇二〇年四月。私の春は奪われた。

ザッザッ。靴が擦れる音。いつもは他の音にかき消される音も、今日は街に響いていく。ほんの少し前まで人で溢れていた駅前も、今はしんと静まりかえっている。閑散としたなか、時々すれ違う人は白い布で顔を覆い、手元のスマホに夢中だ。人を感じない。ほんやりとそう思った。コロナウィルス。昨年の私ならコロナ助みたいだと笑いそうな名前が、今世界に笑えない程のダメージを与えた。どのニュース番組でもこのウィルスについての報道がなされ、感染人数は、対策は、と専門家達が論じ

合う。スマホ画面を見れば政治家が絶妙に違和感を抱かせるマスクを着け、今後の生活様式について説明する写真が大きく掲載されている。人。仕事。学校。ウィルスはそれらを一瞬でかつさらっていった。それだけではない。やつはもう一つ重大なものをさらっていった。春を奪っていったのだ。風が横を吹き抜ける。肌に感触はあったが、もう風は春を運ばない。顔で日の光を浴びることもなくなつたし、花の香りも消えてしまった。それもこれも、口元を覆うこの布のせいだ。この白い布は春をすっぱり覆い、私の前から隠してしまった。やつはともないものを盗んでいきましたよ……。某アニメのそんな台詞を思い出しながら、私は駅に背を向ける。ウィルスについてとばかりに奪われた、私の体型を取り戻すため、母の迎えをすることにしたのだ。前より少し重くなつた体を揺らし、母との待ち合わせ場所へと急ぐ。待ち合わせ場所は駅前より人が多く、通りは少しずつ前の活気を取り戻していた。待ち合わせ場所にいた母は壁際で暗い顔をし、スマホに視線を落としていた。母はこちらに気付くと小さく手招きをし「マスク、まだあつたっけ？」開口一番そう聞いた。「ああ、たしかあと二箱。」母は眉間に薄くしわを寄せ、いつまでもつかなく、と眩く。日本では今マスク不足が、と深刻そうな顔で話すアナウンサーの顔を思い出し、少し気が重くなる。とりあ

えず、帰ろっか。その言葉で不安を追い出し、少し遠まわりをして家へと向かった。少し歩いていくと向かいの道の店に人が群がっていた。店頭には驚愕の値段！と書いた紙とマスクの写真が貼られている。少し前に見たニュース映像と姿が重なる。画面のなかの世界は私の生きているこの世界なのだ、と痛い程思い知らされる。家の近くまで来た時、突然母が「あ」と声を洩らした。

顔をあげるとそこには空を覆うほどの大きな桜の木がそびえ立っていた。「おお」。思わず私も声が漏れる。ちらりと母を見るとマスクを外し目を細めていた。私もそつとマスクを外す。湿った土の匂いと花の匂いがどつと流れこみ、私は匂いをこぼすまいと夢中で吸いこむ。木がそんな私を笑うように小さく揺れる。足元に視線を落とすと勿忘草が揺れていた。もしかしたら、また大切なものを失うかもしれない。揺れる勿忘草を見て、ふと思う。春の匂いも、時間も、出来たはずの思い出も。まったく関係がないと思っていた世界の動きで、大切なものはいとも簡単に奪われた。全て奪われた私は呆然と立ち尽くすしかなかった。これから先、また私がなにも知らなかったら。興味がないからと距離を置いていた政治の問題で、知らないうちにまた何かを失ってしまったら。きつとその時は、また呆然と立ち尽くすことになるのだろうか。いや、もしかしたら失っていることにすら気付か

ずにまた慣れていくのかもしれない。そうやって大事なものをぼろぼろとこぼしながら進んでいって、最後に一体何が残るのだろうか。いつだか、社会の動きを知るということは君を守ることになる、と誰かが言っていた。私が大切なものをを守るために。私が大切なものをを守るために。この言葉を繰り返している、心のピースがずっととはまった。ずっと剥がれなかった鱗が剥がれたような気がした。風が頬をすべる。桜と勿忘草が大きく揺れた。大きな声でこう言う。

「春の匂いがした！」

理由

高一

「え、五百円も上がるの。」大きな声を出してしまった。何カ月か前、まだ中学生の頃千円で観ていた映画が、高校生料金の千五百円になっていたのだ。五百円も上げなくていいよね、なんか損した気分、友達と話しながらふと思った。中学生から高校生に変わるだけで、なぜ同じことをするのに発生するお金が違うのだろうか。同じ場所で同じ映画を観るのに、同じ自分なのに、年齢によって払う金額は変化する。また映画に限らず、電車賃

やテーマパークのチケット代など「子供料金」が設けられ、子供が学生か大人かで払う金額が変わるものは、私たちの身の回りに多くある。どれも年齢とそこまで関係がない気がしたが、調べてみるとそこにはしっかりと理由があった。

まず一つ目は、利益の最大化だ。例えば美術館など顧客のメインが大人の場合、子供料金が設定されていないければ大人だけで行く、行くこと自体を諦めるということも有り得る。しかし、子供料金の設置や無料にして子供も行きやすくすることで、子供の分の利益増加や機会損失を防ぐことに繋がる。そして二つ目の理由は、リピーター育成だ。スキーで例えると、幼い頃から親しんでいることは家族や友人と毎年行ったり、家庭を持った際には子供を連れていったりと、将来にわたって利用する顧客、更には何世代にもわたって利用してもらえる可能性に繋がる。つまり、子供料金の設定で未来の収益を増やせるということだ。これらは一部で調べていくと他にも様々な理由があったが、どれも考えたことがなかった理由で驚いた。そうした確かに私は幼い頃から毎年スキーに行き、映画館にも中学生の頃は頻繁に行っていて、これが子供料金の狙いであり効果だったのかと納得した。

身の回りで決められていることには、しっかりとその理由がある。当たり前のことだが、映画や美術館のチケ

ット代の変更は今までも何度も経験していたはずなのに、そのことについて疑問を持ったことも理由を意識したことも、今回が初めてだった。そう考えてみると、私たちは日頃から身の回りの変化に疑問や関心を持つこと、ましてや既に決められていることの理由を調べてみようと思うことは少ないのではないかと思う。

校則が厳しい、今の政策が気に食わない、学校や社会、対人関係についてなど、耳を澄ませば様々な不満の声が聞こえてくる。私はそれらの不満の根本のきっかけは、そのものの本来の理由を知らず無関心でいることから生まれる誤解であるように思う。そして私自身が映画の料金についてそうであったように多くの不満の殆どは、どうしてだろうと関心を持ち、理由を知ろうとすれば解決できる問題なのかもしれない。そして理由を知ることです新たな改善点が生まれ、それは社会をより生きやすく楽しくする力に繋がると思う。

映画のチケット代が変わった、ただそれだけのことだったが、その中に疑問を見つけ調べてみたことで沢山の新しい事実に触れ、考えることができた。

色々なことが目まぐるしく変化し発展していく今、周りも自分も流れに追いつくことに必死になって、周囲の変化や自分の中の気付きに鈍感になっているように感じる。しかし、触れるものに疑問を持ち変化に気付き考え

ることで自分の視野が広がり、それは結果的に自分の考えや社会を豊かにすることに繋がるように思う。時には、何かに気付いても忙しさを理由に気付かないふりをしてしまうことがあるかもしれない。しかしそれでもこれからは、色々なことに目を向けて、ふとした時に生まれる自分の中の小さな気付きや疑問を捨てず、大切にしていきたい。

何も何も、小さきものは、みなうつくし。

高一

小さなもの。赤ちゃん、子猫、子犬、人形、ミニチュア、ドールハウス……。小さなものを挙げればきりがないが、思いうかべる小さなものといえば、だいたいかわいらしいものではないだろうか。

私にとって小さくてかわいらしいものの代表といえはミニチュアである。街で見つけると自然と手に取ってしまうし、ミニチュア写真を見ると、とても癒やされる。ミニチュアはとても忠実に実物を再現されていて、写真だけで見ると私たちの世界と同じ大きさだと思うことがある。

小さなものが好きな人は、きっと私だけではないはず

だ。枕草子を書いた清少納言も「何も何も、小さきものは、みなうつくし。」と書いている。昔の人でさえ、そう思ったのだから、現代では当時よりも多くの人がかわいいと思っているだろう。人間が小さなものをかわいいと思う理由の一つに、小さなものに対しては自分が主導権を握れるというものがある。この世界で生きている限り、自分の思い通りに、誰からも何も言われずに生きていくことは不可能だと思う。誰もが思い通りに行かず、悩んだり、もどかしい思いを抱えている。しかし、小さなものの世界（ミニチュアの世界）では違ってくる。自分の好きな場所に物を配置して人形なども自由に動かすことが出来る。つまり、その世界で主導権をにぎり、自分にとって完璧な世界を作り上げられる。そんな思いを抱いている人は私を含め、あまりいないと思うが、実は心の底にはそのような考えを持っているらしい。

小さなものを守ってあげたい、と感じるのも一種の支配感情だと思う。特に子どもに対してそのような感情を抱く親は多いと思う。「この子は自分のもの」という考えが、様々な問題を生む。子どもは小さいけれど、ミニチュアではない。自分の思い通りに動かすことなんて出来ない。このことを忘れてはいけないと思う。

「かわいい」という感情は実はとても怖いものなのだと思う。かわいいの底の方には独裁者のような感情が流

れているし、時にはそれが表に出てきてしまう。ミニチュアの世界で独裁者になることは大した問題ではないと思う。しかし現実の世界をミニチュアと同じように考えてはいけない。自分よりも小さいもの、弱いものを支配して、思い通りに動かし、主導権を握ることは許されない。小さなものにも私たちと同じように意志があり、それを最大限に尊重すべきだと思う。

私が最も大切だと考えることは、物に対する小さくてかわいいと生き物に対しての小さくてかわいいを混同すべきではないということだ。生き物に対して小さくてかわいいと思うことがあったとき、それが自分と対等な存在であるということさえ心に留めておくことが出来れば、今よりも優しい世界を作っていけるのではないだろうか。「何も何も、小さなものは、みなうつくし。」に私は共感できない。

私と彼女の世界

高一

さあ、仮面を付けよう。本当の私が、溢れ出す前に。嘘が、こぼれ落ちてしまわぬように。

私は、友達を作るのが苦手である。初めは仲良くなる

のだが、その後からあまり上手いかなくなるのだ。

小学生になってから、一番初めに出来た友達。一年生の時はとても仲が良かった。でも、三年生になって、また同じクラスになったら、彼女は少し変わっていた。私にきつく当たるようになっていたのだ。確か、習い事のクラスが上がつて練習が厳しくなったから、ストレスが溜まるという理由だった。まあ、別に変なあだ名付けられたり、いじわる言われたりするだけで、被害はなかったのだからあまり気にしていなかったが。他にも、幼稚園の時は仲が良かったのに、高学年になったらバカにしてくる子とか、小さい時からの親友だと思っていた子が、他の子に私の悪口言っていたりとか……。とにかく、失敗だらけだったのである。

そこまで気にしているわけではなかったが、当たられるよりは、仲良くしていた方がいいし、悪口を言われるよりは、楽しく話をしていた方がいいに決まっている。

そこで中学では、仲の良い友達を作ろうと決意した。まずは愛想良く。次に相手がどんな子なのかを考える。いつも笑顔を絶やさず、相手の発言に対し、どのように返事をすればいいか考え、常に相手からどう見えるかに気を付ける。自分が違うと思うことでも、相手がそうだとさえ言え、「そうだね」と同意する。どの答えが最適かわからない時は、「なんとなく」とか、「へー」とか、差

し障りのない返答をする。間違っても相手を不快にさせることのないように……。

しかし、私には問題があった。私は昔から、嘘をつくのがとても下手なのだ。自分ではばれていないと思っても、すぐ顔に出るらしく、すぐばれてしまうのだった。私は考えた。嘘がつけないのなら、どうすればいいのかと。そうしたら、ふと気が付いた。本当のことにしてしまえばよいのだと。本当たと思う誰かに成り切ろうと。イメージは、そう、中世ヨーロッパにいる貴族女性。社交界では有名は、完璧令嬢。さあ、今からお茶会という名の、華やかな化かし合いが始まる戦場へ……。

「君って、笑う時目が笑ってないよね。怖いんだけど。」
なんということだ。もっとしつかり仮面を付けなくては。

「えーっそんなことないよ？ 気のせいじゃない？」

そう、私は完璧令嬢。さあ、笑うのです。ばれたかもうんて思わず、いたって普通に笑うのです。

「気のせいじゃないと思う。」

「そうかな。いつも通りだよ。」

わたくしは、こうやって笑っていたはず……。あれ、わたくしってどうやって笑っていたかしら。こんな風に……。あれっ……。いいえ、自信を持つのです。わたくしの顔なのですから、わたくしが一番分かっているに決まっていますわ……。どうしましょう、やはり分からない

くなってしまうましたわ……。あつ仮面が外れる。外れてしまった。もう一度付けても、そこには仮面を付けた女子高生しかない。彼女はもう出てこなかった。それからしばらく経ったある日、友達に、

「なんか最近柔らくなつたよね。」

「そーそー。前はなんかピリピリしてて、近付きにくかったけど、今のほうが素が出てるっていうか……。今のほうがいいよ！」

と、言われた。私の手元にあつた仮面がパキッと音を立てて割れた。でも、全然悲しい気持ちにはならなかった。

「もう、わたくしが一緒にいなくても、大丈夫ですわね。」

と、言われた気がした。ありがとう。あなたの分まで、私は進むよ。私の親友と共に。



私と写真

高一

あれは忘れられない。初めて写真を撮ったときの感動を。両親の持っていたよく分からないけどカッコいい「カメラ」というものをねだって借りて公園で見つけたかわいいパンジーの花に向けて想いのままにシャッターを押した。それはありきたりなどこでも撮れる写真かもしれない。けれど私にとっては何にも代え難い大切な一枚なのだ。

私の大好きなこと、それは写真を撮ること。三歳くらいからちまちまと撮っているのかれこれ十二年以上はやっていることになる。けれど全く飽きるどころかますます熱中していく一方だ。最初は道端に咲いている花だったり空の雲だったり両親だったりを心で感じたままにただシャッターを押していた。写真とは何なのかイマイチ理解していかなくともなぜかそれがとても楽しかった。そんな中本格的に父に撮り方を教わるようになって、探り探りでどこか自分の生活の中で心に響いたものを残しておきたい気持ちで撮っていくようになっていった。そしてその写真を新聞社が主催するフォトコンテストにな

んとなく応募してみたところ、まさかの入賞を果たし紙面に掲載され、私のこの感覚はあっていたのだな、とどこか不安だった私にとって大きな自信につながった。その後別のコンテストにも応募していく中で「今この瞬間でしか撮れない最高のものを収めたい」という想いに変わっていった。どこかをふらつと歩いている時に脈絡もなく良い被写体が目に入る。私は風景をよく撮るので主に電車や船なのだが、これらをより良く見せることが出来る構図を考える。例えば鳥がよく通るところだったらあの辺りに鳥が来ると影が壁に良い感じに映るなどなど……そして後はその思い通りの状況になるまでひたすら待つ。私の場合は平気で三・四時間、時にはそれ以上待ち続けることがある。そんな場所が同じならいつ撮っても同じなのではないかと思うかもしれないが、時間帯による光線の入り方の違いだけでも一枚一枚が全く違う景色となり写真全体を見た時の印象は変わってくる。私は写真を撮ることの楽しさこそここにあるのではないかと思っている。待っている時間がたとえ大変だとしても自分の思い描いていた通りに写真が撮れた時の嬉しさは達成感も混ざって何にも代え難いもので、だからこそ飽きっぽいこんな私でもなぜか全く飽きずに心から楽しいと思えるものなのだと思う。

ここまで色々と自分の思いを語ってきたが、小さい頃

から今に至るまで実は一度も将来写真家になってみたいと思つたことはない。それはなぜなのか自分の中でも定かではないけれど、高一になって進路について考える中で思つたことはきつと自分の写真に“責任”がつくことが怖いのだと思う。仕事として写真を撮ることになれば純粹にただ好きなものを撮るだけでは生活が成り立つかどうかともわからないし、もしかしたら撮つた写真が人目により晒されることで今まで考えたこともなかった問題が新しく生まれるかもしれない。つまり趣味の範囲だからこそ樂しめていることがあるのだと思う。そこを一步踏み出してみればまた違う世界が見えるのかもしれないが、私にはそこまでの勇氣も根性もないので考えたことすらないというのが本音だと思つている。

それでも写真を撮ることが私の生活の中で重要な要素で、泣きたくなくなるような辛い時でも写真を撮っている時だけは何回も現実を忘れさせてくれたのも事実で、だからこそもちろん今も、そして将来社会人になつて働くようになっても続けていきたいいなと強く願っている。写真は人ではないのでお世話になつていても恩返しをすることはどうやっても難しいが、その中で出来ることとしては自分の写真を通して誰かが少しでも癒やされたり写真の秘められた良さに気付いてもらうことだと思う。たとえば写真家にならなくて、なにかのコンテス

トで入賞するだけだとしても自分の写真に込めた思いは見て下さつた方にも必ず伝わるはずだと信じている。だからこそ今日も私はそうなることを目指してちまちまと写真を撮っていく。

TIME WARP 二〇三〇→二〇二〇

高一

ぶおーん。ざー。エンジン音と海の音が混ざりあつて夜に溶けた。七色に光るあの橋がやけに輝いて見えて、窓から冷たい風が吹き抜けた。隣の車はすごいスピードで走り去つていった。紙がびりつと音をたてて破れるように、夢も、あっけなく破れた。いや、破いた。自分から、バラバラに。

十年前、私は六歳。あの頃の私は自分の描いた夢に向かつて無我夢中に突き進んでいた。幼い頃から続けていた演技の習い事が大好きだった。毎日練習に励んで、稽古で嫌なことがあつても、続けていた。その先に明るいものがあると信じていたから。稽古場に行くまでにある、事務所を通る時には「おはようございます」と元気に挨拶をした。今日は何が始まるのだろう、何が出来ようになるのだろう、そんなうきうきした気持ちと足取

りであの通路を通るのが好きだった。事務所の人が「よろしくね、今日もがんばろう」と言ってくれるのも嬉しかった。自分が認められている気がして。

ある日、「通ったよ」その言葉を聞いて、胸が踊った。今までも選考を通ることは多かったけれど、今回の受ける人数も多く、中々通らないことが普通だった。だからこそ、次の選考は期待と同時にやる気がみなぎった。

その日から毎日、先生と一対一の稽古が続いた。何をしても駄目で上手いかわず、泣きわめいたり、落ち込んだりした時もあった。だけど、夢の先が見たくて、悲しくても、立ち上がった。馬鹿らしかったかもしれないが、そんな時間が好きで、幸せだった。

当日。私は呆然と立ち尽くした。私と同じくらいの年齢の子が沢山いて、どの子も目をぎらぎらとさせていた。周囲に圧倒されてまるで、自分だけ時が止まったように思えた。これまで準備してきた色々なものが一瞬にして無くなったように思えて、怖くなって、ただただ虚無感に襲われた。控え室では「一緒にがんばろう」と言ってくれた子もいたけれど、そんな言葉すら信じられなくて私を苦しめた。その時の私には冷静になろうという合図が欲しかった。色々な声や物音、その喧騒に大事なものを聞き逃した。重ねてきた日々の記憶は崩れ落ちた。名前を呼ばれて会場に入った。前の人の順番が次々と

終わり、自分の番が回って来るのが怖くて怖くて、白い床を見て、何度も深呼吸をした。うるさいほどの静寂が私を蝕んだ。そんな中全力を尽くしたあの日は今でも忘れられず、はつきりと覚えている。

どうにか終わって、その日の内に結果が出た。もうなんとなく分かっていたが、合格者の番号欄に自分の数字はなかった。不合格だった。かすかにあった信念と期待が、がしゃんと音をたてて壊れた。両親は私のことを思っただけの言葉をかけてくれた。だけど、何を言われても届かなくて、申し訳なくて、もうどうしたら良いのか自分でもよく分からなかった。

車に乗ると、今までせき止めていた想いが溢れ出て、涙が頬を伝って流れ落ちて止まらなかった。今にも押し潰されそうな程に空気が重たくて、何かが、ろうそくの灯のように消えてなくなった。ライトアップされた橋が眩しくて、冷たい風は私をあざ笑っていた。あの時、あの日、私は、自分を嫌いになった。

十年後、十六歳になった今、十年前に私が夢見て描いていた未来とはかけ離れた生活を送っている。あれから時が過ぎて振り返るとため息ばかり、なぜあんな奇跡的なチャンス逃してしまったのだろう。もしあの時、悔しさと屈辱に奮起してあと一步の勇気が踏み出せていたら、そう考える時がよくある。けれど、これが自分の選

択した未来なのだから、背負って生きていくしかない。
あの日々無くして今はない。

何かのスイッチで進む道を間違える。その時が来るまで誰にも分らない。だけど、今が最悪な世界だとし、止められるなら、変えられるなら、止めたい、変えたい。自分の行く先のスイッチは何か、もし自分の選択一個、一個、一個が全部スイッチで、なんだかんだそれも人生で。そうなんだとしたら、一個一個、大事にしたい。間違えた方向に進んだとしても、ここから、ゼロ地点から進むべき方に向かって、また進み直すことだってできる。

あれから今までが暗闇だったのなら、暗闇の中で精一杯手を伸ばせば、何度でもチャンスがあるかもしれない、最後まで諦めずに信じ続ける。より良い未来を描くために。苦しくたつてもがいたって、やりぬいたその先に新しいステージが見えてくる。

あの日、潰れそうになって、未来を信じることも進むことも諦めたけれど、ゼロ地点から一歩ずつ重ねていけば、十年前あのバラバラになったピースをひとつに帰せるかもしれない。

十年後、どんな未来が待っているのだろう。今はまだ、分からない。まだ間に合うと、より良い未来に向かって、信じて。

ぶーん。ぶーん。高速道路を抜けると、窓から心地良い風が吹き抜けた。レインボーブリッジは闇夜で綺麗な七色に輝いていた。海の方こうで貨物船が大きな汽笛を響かせた。

間に合った。

かたち

高一

「……は今年一番の猛暑日になることでしょう。」

嫌でも一日に何度も耳に入ってしまったこの“猛暑日”という言葉がいつになっても好きになれない。理由は単純で「暑いのが苦手」というだけである。

五歳の頃だっただろうか。いつも止まっているように見えた雲が動くことを知った。当時の私にはかなりの大発見で友達から全然知らない電話越しの大人にまで「くもってうごくんだよ。」と誇らしげに喋っていた記憶がある。残念ながら雲は風で動くというそれも常識だというのを知ったのは一年後であり、それも二歳下の妹から「あたりまえのことだよ。」とバツサリ斬られたのもなぜかとても悔しかった。

同じ頃だろうか。“雲になりたい”と思った時期があった。幼児の語る夢には希望があり単純なものが多いなあと感じることは今でも十分あるが、約十年前の自分はなぜ夢も希望もない「雲」なんかを将来の理想像にしたのだろう。

地球温暖化の進行や新型コロナウイルス感染拡大によって酷暑の中、マスクをつけなければならぬという最悪なコンディションで人間誰しも日陰の道を見つけたらその道を歩いてしまうだろう。そんな道に行き、何も考えずに空を見上げるとそこには少し形の崩れたうす雲が広がっていた。

そんな時、ふとひらめいた。約十年前のきちんとした答えは分からないが、暑いのが苦手な私にとって雲の作ってくれる「日陰」という優しい場所のように、他人から見た時、優しいんだ、と思ってもらえるよう、幼いながらに考えていたのかもしれない。やはり幼児らしくマインナスな事は一切考えなさそうな当時の私を表すなら「空に浮かぶ無数のわたあめ」のような、いわゆる積雲とかわた雲とか呼ばれるやつだろう。空に存在していても悪天候を引き起こさない、純粹無垢な雲。

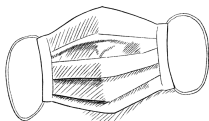
では今の自分はどうかだろうか。悪天候の引き金となる事が多い雲はみんなの嫌われ者になるかもしれない。例えば私がそのような立ち位置になったとしても何

も感じないだろう。ただ怖いのはきちんと自分の「形」を保っていられるか、だと思う。

考えればいつも人の意見に流されてしまっていたり、そもそも今自分の「形」なんて無いのかもしれない。すっかり雨模様かもしれない。正直自分自身が変わらないと、変わらないとこの降っている雨を止ませることは出来ないと思っている。

ただ十年後。自分の十年後は？ 十年前からすっかり姿形を変えてしまった私の雲はまた再形成されるのだろうか？ 十年で人はまた変わることができるようだろうか？

無くしてしまうことは簡単だが一度無くしてしまえば取り返すのはかなり大変であろう。でも小さい頃からの夢、「雲になりたい」というのをいつも心に忘れず、これからの人生強く歩んでいけたら、と思う。



広島行きへのチケット

高一

私が広島に行ったのは十四歳の夏休み。目的はYWC Aの「中高生全国カンファレンス」だった。実はあまり気乗りしておらず、親に半ば説得されて参加した、という感じ。だから広島に行くまでそのことを忘れて夏休みをエンジョイしていた。

そうこうしているうちに広島へ行く日になっていた。新横浜で先生と二人の先輩と合流し、ホームへと向かう。自分の手にかかるトランクの重さが自分の心の重さを感じる。

約三時間後、ついに広島に到着してしまった。トランクがさつきよりも重く感じたので持ち手をギュッと握って気合いを入れる。

数十分後、私は路面電車に揺られながら広島のリトロな町をボンヤリと見ていた。七十四年前、ここが地獄絵図のような有り様になっていたなんて、私には考えられない。

電車の窓から原爆ドームが見えてきた。教科書の写真では感じられない迫力がある。電車を降り、原爆ドーム

を過ぎて私達はさらに奥にある平和資料館へ向かった。外国人の女性がメイクがボロボロになる程号泣している。よく目にする光景だ。

しばらくして資料館内見学的时间になったので一人で展示を見ることにした。

資料館内は人でごった返していたが、私は人の流れに乗りながらじっくりと写真と説明書きを読んでいた。展示されている写真達を見ると慈悲と恐怖が混じったような気持ちが悪ってくる。後にこれらの感情を越える何かを私は知る由も無かった。

見学は始まって約一時間が経過した。その時入ったのは被害者の遺品が展示されているブースだった。遺品は被害者の親族が後世に原爆の恐ろしさを伝えるために資料館へ寄贈されたものだそう。夫が被っていた帽子、婚約者のスカーフ、三歳の息子が乗っていた三輪車。ああ涙が出そう。次に見た遺品はアルミ弁当と男子学生の制服だった。血の滲んだ跡がある。年は十四が三つ並んでいる。三人の制服を一体のマネキンに着せているのか。正直この辺で限界を迎えそうだったが根性を振り絞って一人一人のエピソードを読んだ。勤勉でおとなしい子、口下手だけど心優しい子。両親は皆あの日学校に行かせなければと悔やんだそう。時代は違えど普通の男子学生だ。沢山の愛を注いだ可愛い息子が帰ってこない

なんて、私だったら死ぬまで信じないだろうな。そんなことを思った時、今まで抱いたことのない感情を抱いた。具体的に言うとは心状態に近かった。

資料館を出て、ふと原爆ドームを見た。今はあそこだけ時が止まっているように見える。三人の男の子達が柵に近よって、「今はこんな時代になったんだ」「僕あの本の下でご飯食べたな」なんて他愛もない話をしていくのかも、なんて考えるとクスツと笑いたくなるけれど鼻の奥もツンとする。あの子達は永遠に十四歳なんだ。私がお母さんになったら絶対にまた君達の制服を見てここに来るからね、と言って指きりをした。見えないけれど、私には小指が三本見えた気がした。

あれから約一年経過した今、私は十六歳になった。あの子たちよりも二つ年上になった。彼らが私に与えてくれた出会いは私を大きく変えた。YWCAでは中心的な役割に就けるようになったし、私に看護師になる夢を与えてくれた。数年後、彼らとの指切りの約束を果たすために広島へ行き、平和の奉仕者になりたい。

本当の「正義」

高一

「正義」とは何かと問われたら何と答えるのが正解だろう。不正を憎むこと。弱者を救うヒーローのような人。間違っているものを間違っていると見える人。

私は以前こんな話を聞いたことがある。動画投稿を仕事としているある配信者が、大量の炭酸飲料でお風呂をいれるという内容の動画を投稿したところ視聴者からバッシングを受けた、という話だ。動画コメントでは意見の違う視聴者同士の喧嘩が勃発した。

この場合、間違っているのはどっちなのだろう。「もつたいない」という意見を持つ人か、それとも「自分のお金だから問題ない」という意見を持つ人か。ここで冒頭の質問を思い出してほしい。「正義」とは間違っていることを間違っていると見えること。間違いを認識する基準は人それぞれなのだから「正義」のあり方も人それぞれである。

先程の例でもどちらが間違っているかは決められないし、むしろどちらの意見も賛同できる。結局、この例で最悪手を打ったのは自分と異なる意見を受け入れなかった

た視聴者だろうなと私は思う。少しでも相手の言うことに耳を傾け、意見の交換ができていたらお互い気持ちよく動画を楽しめたのではないだろうか。

ところで、ここ数年「正義中毒」というものが話題になっていくことを知っているだろうか。「正義中毒」とは自分とは異なる考えや行動をなかなか理解できず、許せないと感じてしまうものだ。インターネットやSNSで簡単に自分の意見を発信できてしまう現代だからこそ生まれたのだらう。「自分のほうが絶対に正しい」という態度で他人を攻撃したりSNSでの炎上だったりとして「正義中毒」は改善すべき重要な社会問題である。さらに「正義中毒」は、人間なら誰しも陥ってしまう恐れがあるという。

ある脳科学者は、「正義中毒」は脳に備わっている仕組みであると言うことと、「許せない」苦しみから抜け出すための第一歩は、そうさせている脳の仕組みを知ることだと著していた。そこで、脳の仕組みについて調べてみたところ二つの要点があった。

まず、一つ目は日本の地理的条件が排除の性質を強めたという点だ。正義中毒は誰でもなり得るが、どんな人を攻撃するか、その基準は国や地域によって異なる。日本は、集団主義的な性質が強く、そのため同質であることが前提とされ、違っている人が愚かな人として叩かれ

る傾向が強い。だから異なる意見を持つ者の間ではすぐに互いへの人格攻撃になってしまいがちなのだそうだ。

二つ目は、SNSの登場で攻撃が加速された点。誰かを許せないと思う感情は、人間社会をつくった歴史とともに常に存在していた。だが、それを相手に向かって言うという行為は、誰もが参加でき、匿名でも発信できるSNSというツールによって加速している。また、SNSでは似た者同士でつながることが多く、インターネットでは気づかないうちに自分の嗜好に合った情報ばかりを入手している。そのため「自分が絶対に正しく、相手が間違っている」という思い込みがさらに強まるのだそうだ。

ここまで長々と脳の仕組みの要点についてまとめてみたが、もしかしたら心当たりがある方や、「許せない」という感情に苦しんでいる人にとっては、脳の仕組みを知ったところで自分の心が穏やかになる訳でも余裕が生まれるわけではない。でも脳の仕組みを知れば自分の感情との向き合い方が分かるようになるはずだ。感情を客観的に見直し、他人との価値観の違いを受け入れられるようになった時、初めて「正義」の本当のあり方が分かる気がする。少なくとも私はそう思う。

自分を愛するための最適解

高一

世界五分前仮説。世界は実は五分前に出来たのかもしれない。人も自然も地球も今までの記憶も最初から全て完全に存在する状態で意図的に「古びた感じで」創造されたのかもしれない。

私は人を殺した。まだ名前も性別もない生まれるはずだった妹弟だ。その時私は幼稚園生だった。周りにはお兄ちゃん、お姉ちゃんになった友達もいた。妹弟ができたと喜んでいる人を見て「おめでとう」なんて笑って言っていたけれど正直嫉妬の方が強かったと思う。そんな私に朗報が届いた。母が妊娠したのだ。家族が増えることとはうれしいことだった。私は飛んで喜んだ。毎晩毎晩、母のお腹をさすりながら「がんばれ！がんばれ！」と言っていた。検査に行った際、お腹にいる赤ちゃんがかなり小さいと医者に言われた。その時からなにかしら嫌な予感を感じていたような気がする。医者からそんなことを言われてから少ししか経っていなかったと思う。「お母さん、入院してもいい？」病院から帰ってきた母からそう告げられた。「いやだ。」怖かった。今まで当た

り前に隣にいた母が急に遠くに行ってしまう気がした。何よりその時私は幼稚園に通っている幼い女の子だ。こんなのはただの言い訳にしかならないけれど、自分のことではいいっぱいいっぱいだったのだ。母は結局入院しなかった。その数日後のことだった。「赤ちゃん死んじゃった。ごめんね。」突然のことで理解が出来なかった。いや、理解なんてしたくなかったのかもしれない。私は布団を深くかぶりなかなか出てこなかったそうだ。正直、動揺であまりそこら辺の記憶はない。私が覚えていることは、いつもふわふわで暖かい物が石のように固く冷たく感じたことくらいだ。自分が入院していいかと聞かれた時笑顔で送り出せなかったという「後悔」。母が「ごめんね」と謝ったのはなぜかという「疑問」。この日は私が初めて「後悔」の味を知った日だ。先の見えない「疑問」を背負った日だ。「後悔」は不味かったし「疑問」は重かった。

私は今でも思い出しては自責の念にかられ疑念を抱いている。いつもは特に意識していないのだが、二カ月に一度ひどく落ち込むことがある。そうなると私はあの時の「後悔」のまずさも「疑問」の重さも思い出す。でも私はかなりの面倒くさがりなので考えるのが面倒くさくなったり飽きたらすぐ通常運転に戻る。だから重症化していない。こんな性格で良かったと思えるのはこの時

くらいだ。でも、この「後悔」とこの「疑問」を感じてからもう何年も経つ。そろそろ終止符を打ちたい。

私は考えた。どうやって終わらせられるかを。私は終止符を打つことばかりに囚われていた。でもそうではないのだ。「後悔」も「疑問」も捨てる必要はない。「後悔」と「疑問」という感情を排除するのではなく、肥料にして自分の心の畑に撒けばいい。そこから出る芽はきっと強く育つだろう。これが私の最適解だ。

世界五分前仮説。世界は最初からこうなるように創られたのかもしれない。私は「後悔」と「疑問」と共存できるように創られた。なら、そんな自分も愛してやろう。

花と怪物

高一

「どれほど高く伸びた花でも

ここでは死のように白い

中央の一輪の花だけが

にぶい赤い色で咲いている

その色は太陽のせいではない

それは陽の光を受けたことさえない

その赤い色は大地からきたものだ

人間の血を吸い込んだのだ」

これはシューマンという作曲家が書いた「森の情景」の中の第四曲目「呪われた場所」で唯一つけられたヘッパルの詩である。

コロナで自粛期間中、することがなかった。課題は溜まっていたけれど、することが無かったけれど、「考える」ことが増えたと思う。自粛期間、二〇二〇年にできたこと、それは私にとって「考える」ことを身につけたことである。

以前の私は、欲張りで、主観的だった。何事も自分が正しく、相手の意見をも求めなかった。今考えると、無知な中学生であるが、当時の私は幸せだった。だから一年ほど前の自分自身を否定することはしない。

冒頭の詩は、「シューマンの指」という本に登場する詩。天才的なピアニストが技術と引き換えに悪魔に魂を売ってしまったと気づき、遠い所に行ってしまう場面に使われている。本の意味での解釈は、赤い花は自分自身であり、周りの花は自分の視点から見ると周りの花であり、青白く死んでいて、私はその花達の血を吸ってかうじて生きていて、私はいつか怪物になるだろう。というものである。コロナが無かったら私は、怪物になっていただろう。自分第一で無意識に人を見下し、とても傲

慢な人に。毎日毎日同じ場所で公園の時計の影が傾く瞬間を見る退屈であった四カ月。私にとって長く濃いものであった。

恐ろしく、不気味に感じる詩であるが、私は誰にでも一回は経験することであると思う。何か良いことが立て続けに起こると、いつかの夜気がつくと一人になっている感覚。気がつくと天狗になってしまっている感覚。周りが自分のせいで傷ついているのでは、この先傷ついたらどうしようとビクビクしている感覚。

ふとした瞬間、とても孤独になる時がある。これこそ、周りの血を吸ってかろうじて生きている花（私）である。だが、まだ怪物ではない。本当に恐ろしいのは、この感覚を忘れてしまった時である。忘れてしまった時こそ本当に怪物になると思う。

ゴシップニュースで性格が良いと評判だった芸能人が逮捕されることがある。この人達は怪物になってしまったのでは、と思う。怪物になって騒がれるのは芸能人や、影響力を持った人に限るが、怪物はだれにでも訪れる。なぜなら、花から怪物になるのは、夏から秋に変わるように一瞬であるから。

私は花になりたい。血を吸う花でなく、幸せを周りに与える花。怪物になっても花になろうと努力するだろう。蜜を持つ花になるために何をしよう。

私はまだ模索中である。

ときどきヒト

高一

「私なんて。」私たちは何回この言葉を耳にし、使ってきたのだろうか。誰しも一度は使ったことがあるのではないだろうか。

勿論、昔はただの謙遜の言葉だったかもしれない。しかし、今はそれ以上に自分に対する否定的な感情や嫌悪感が入り交じっているように思える。

自己肯定感なんてものもその一因であると思う。自分のことを一番知っているのは、どうしたって自分自身なのだから自分を肯定するも否定するも自分次第ではないはずなのだ。だが、ネット社会において多くの情報や、まったくの他人からの思慮が足りない酷評などによって自分の軸となる考えや当たり前の基準は一瞬にして崩れ去るのだ。

そしていつの間にか自分のことも他人のことも考えられず、ただ曖昧に情報の海に流され結局何も残らずじまいである。一見ポジティブに見えるものでもこういったことは起こる。現在インターネットでは多くの人が簡単

にさまざまなコンテンツを楽しむことができる。それによって話題になる、俗に言うバズる事は誰にでも起こることとなっている。しかしその期間と言うのは以前よりも短く、一瞬にして消えていく。このとき私たちは話題になったその瞬間しか見ていない。その人の努力や経歴を見ないまま断片的な情報だけを受け取り、まるでその本人が運命的に選ばれた、自分とはまったく違う何か特別なものを持った人のように思うのだ。そして、「私には何もない」という錯覚による意味のない自己嫌悪だけが残るのだ。日々大量の情報を受け取る私たちは頭の中で分かつていても、この状況に陥ってしまいがちだ。実際、私も不意によくわからない焦燥を感じることがある。称賛の嵐はいつの間にか不安を煽る竜巻となってしまふのだ。この悲しい勘違いに取り込まれ、自分を肯定するためにネット上に他人を否定するような言葉を書き連ねる。まさに悪循環である。将来のことを考えるのが億劫になると言うのも自尊心の低さによって自分に可能性を見出せないことが原因なのかもしれない。このような社会問題も、自分の将来についてのことも、結局は「人間」の問題に収束すると私は考える。やはり私たちは人間から、ヒトに戻るべきだと思う。

人間とは、人の間にあると書いてとされるもので、今の社会において私たちはこの状態に縛られすぎているの

だ。他人との協調性。他人から見た自分。安定した人間関係。このように他人が主体となったことばかり考え、自分のことを後回しにし、押し潰してしまっているのだ。勿論、それで問題がなければいいのだが、実際そうでない人が存在しているからこそSNS上で匿名性による問題が多発しているのだ。どうすればそのような状況から脱却できるのか、それは簡単なことである。ヒトに戻ればいいのだ。

ヒトというのはより動物的に考えた私たちのことだ。

食欲や睡眠に貪欲。つまり生存することが第一で、私たちの欲求に正直な生き物である。自分が生き抜くために生物として、何より自分のことを考えている。それは自分のことを大切にしている、愛しているといえるのではないだろうか。そんなヒトは手を使うこと、運良く手に入った知能により遊びなどというものを嗜むことができるようになり、さらに生物として優位になるよう社会性を持った。そして何千年も過ぎた今、小さな社会の中で生きる「人間」となった私たちは周囲の目ばかり気にする弱い存在になったのだ。それも地位が高ければ高いほど臆病になるような。

だからこそ、私たちはこの二つの状態を行き来しながら生きていくべきだと私は思う。どうにもうまくいかず消えてなくなってしまうときは、ヒトに切り替えて

本能的に過ごせばよい。好きなので自分が求めることをすれば良いのだ。それが人間のほうに悪い影響を与えるならば考えようだが、本来、人間は一匹の動物に過ぎないのだから、できる限り、ヒトとして楽しく過ごしていくなきではないだろうか。動物的に満たされればまた新しい解決策や、その後の未来が自ずと浮かんでくるだろう。

ただヒトらしく、ほんの少し強欲に、自分のために自分を愛することが一番なのだ。隣人を愛するのは、その後人間としてすることだ。

ネット社会、情報に躍り流され、せわしない日々を送る私たち。人間としてヒトとして、その両方を大切にすることやつと生きている、と言えるのではないだろうか。

青い表紙のペイ・フワード

高一

母方の祖父に癌が見つかった。胃癌だろうと言われていたので、当時十歳の私は手術で取り除けば治るのではと期待していたが、詳しく検査したら膀胱癌。あちこちに転移していた。

祖父は潔く治療しない選択をした。死に向かう祖父に何と声をかけていいのかわからないまま家族で見舞いに行くと、渋沢栄一のようにふっくらしていた祖父が、川端康成のように痩せこけていた。固まってしまった私は、以来、お見舞いに行けなくなってしまった。

たった数カ月で祖父は他界した。葬儀ではやたらと張り切る祖母と母がいた。未練なく逝くのだからあまり悲しまないで、という考えの祖父を思っただけのことなのかもしれない。

忌引きを理由に小学校を休むことはなかった。学校にいる間は祖父のことを思い出さずに済んだ。しかしお腹に原因不明のじんましんが出て、病院で点滴を受けてから登校すると、担当の山口先生に

「疲れたかな。」

と聞かれた。

数日後、山口先生から、母に手紙を渡すよう頼まれた。そこにはこう書かれていた。

「愛弓ちゃんに変わった様子は見られませんが、体調を崩した時に私が『疲れたかな』と聞くと、深く頷いていました。」

加えて、先生ご自身の悲しい別れの経験、人は大きな悲しみに遭遇した場合、その悲しみ（グリーフ）に対してケアが必要だと書いてあり、

「私はその時自分に対して十分なケアをしなかったの
で、数年後にその反動が大きく出てしまいました。それ
以来、自分の反省も込めてこの本をご紹介します、差し上げ
ております。この本を次に必要な方に役立てて頂ければ
大変嬉しく思います。」
と結ばれていた。

同封されていたグリーンフケアの本を、母が読んでくれ
た。――悲しみには段階があり、それに向き合うこと
は、辛くもあり大切でもある――

そして母は

「泣いていいんだ……。」

とつぶやいて、嗚咽しながら私に打ち明けてくれた。祖
母に、

「私だって我慢しているんだから、おいおい泣くんじ
やないよ。」

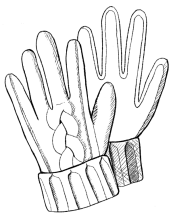
と言われて祖父の前で泣かないようにしているうちに、
祖父が亡くなってからも感情の持つて行き方が分からな
くなり、いつもだったら感動していた学校行事に対して
も何も感じなくなってしまうていた、と。母は自分の気
持ちを出すことによって、徐々に普段の涙もろい母に戻
っていった。

後日、母はその本を、冗談が好きだった祖父の話をし
ては笑い、そして泣き出す祖母に手渡した。今の祖母

は、泣かなくなったどころか、軽く祖父の悪口を言うま
でになっている。

今までの自分は、祖父のお見舞いに行けなくなったこ
とや、じんましんのこと、忌引きでの欠席を拒んだこと
を、現実逃避だと思っていた。しかし改めて自分と向き
合うと、それらはある段階の悲しみの表れだったので
は、というのが高校生になった自分の見解だ。

その後、その本は祖母の親戚へ受け継がれたと聞い
た。山口先生の青い表紙の本は、今もきつとどこかで誰
かのグリーフのケアをしてきているだろう。



千円札の価値

高二

朝が苦手な私はその日も大急ぎで学校へ向かっていた。ギリギリでバスに飛び乗ることができて安心したのもつかの間、絶望が私を包み込んだ。財布にはたったの五十円しか入っていなかった。前日にパンを買い漁ったからだ、すっかり忘れていた。代金を支払うことができなかったら当然バスに乗ることはできない。諦めて下車しようとしたその時、私に救いの声がかけられた。「お金忘れちゃった?」「帰りも必要だね、お昼は大丈夫なの?」そう言って運転手さんが私に千円札を差し出して下さったのだ。

この時感じた衝撃は今でも忘れることができない。見ず知らずの学生に、バス代金のみならず帰りのことやお昼ご飯のことまで気遣ってくれる大人に初めて出会ったからだ。お礼をするためにバスの車庫へ伺った際に「わざわざありがとうございます。人に手助けや良いことができるのと僕にとってもその一日が良いものになるから……」と満面の笑みで話をする運転手さんを見て、人を幸せにすることで自分も幸せになれる日常を送っている

人がいることに心があたたかくなった。

お金はあらゆるものの価値を同じ尺度で表すことができ、その使い方は様々である。食料品や生活用品などの有形物の売買や、マッサージや散髪、観覧・観戦などのサービスや技術に対する支払いだけでなく、お祝いやお悔やみの気持ちを表すためにも用いられる。

仕事をしてお金を稼ぐ経験をしたことがない私はお金について知らないことはばかりである。この作文を書くにあたってお金とは何か調べてみた。千円札の原価は十・四円であるという。一万円札は二十円。物を作るにはお金が必要という現代の常識を理解しつつも、お金を作るためにお金がかかっていることに不思議な感覚を覚えた。参考にした資料には、「原価約二十円の一枚の紙で一万円分の商品やサービスを購入することができる背景には、貨幣に対する信用がある」と書かれていた。経済が成り立たなくなると、お金はいくら持っても意味のないものになるということらしい。

経済学という学問ができるほどに難しい存在のお金は、暮らし易い社会をつくるための一つの手段に過ぎず、何のために用いるかで個人のお金に対する価値観は大きく異なるのではないかと思う。何故なら、あの日バスの運転手さんに頂いた千円札は私にとって他の千円札よりもずっと大きな価値があったからだ。

わたしけんきゅうしや

高二

女性の好物といえ、いも、栗、かぼちゃといわれている。私もこの三つは大好きだった。何故、「だった。」と過去形なのか。これには理由がある。私はこの三つのうちの一つ、さつまいもが好きすぎて毎日食べている。私の身体はさつまいもで構成されている。つまり、さつまいもが好きどころか、むしろ私はさつまいもなのだ。

さつまいもが私の日常に入り込んできたのは、今年の四月。近所のおじいちゃんが焼きいもをおすそわけしてくれた。新聞に包まれた焼きいもは手にもつとまだほんのりと熱がある。そつと新聞を開き、焼きいもを手で二つに割ったら、卵の黄身と同じ程の色彩を帯びて、琥珀の如く艶やかな糖蜜を含むものの姿が現れたのだ。一口噛んだあの日の、焼きいもの味わいが身体にしみわたる感覚を、私は墓に入り身体が朽ちても忘れる事はないだろう。

翌日、焼きいもを忘れられなくて八百屋でさつまいもを手に入れた。早速家で調理すべく準備しようとするも、家にある道具は蒸し器、電子レンジ、オーブン、ト

ースター、魚焼きグリル。どのようにしたら、もらった焼きいもの味になるのだろうか。それから私のさつまいも研究は始まった。

最初に試してみたのは電子レンジ。早く食べたくて三分チンして食べてみる。ホクホク感は満点だが甘味が少ないと感じる。お次は蒸し器。もんもんと湯気の出る蒸し器で三十分。今度はホクホクしていないもののしつとりとしたさつまいもに。最後にトースター、魚焼きグリル。アルミに包み三十分じっくり焼く。この方法が当たり。もらった焼きいもを見事に再現できた。しかし、他の調理法で味、食感の変化したさつまいもも悪くなかった。もつと新たなさつまいもの加熱法に出会いたい。失いかけていた好奇心が現れたのだ。

さつまいも研究は四月から今もなお、絶え間なく日々行っている。おかげでさつまいも農家が引くような量のさつまいもが置いてある。台所に入れば一面紫色。紅東に紅はるか、紅天使にシルクスイート、安納芋。まだまだ食べてみたい品種があるのに私の経済力では手が届かないこのもどかしさ。この作文を書いている今日も、私はさつまいもを加熱する。

大事だけど好きではない。

高二

暑い、暑い、暑すぎる。今にも溶けそうな暑さだ。元々汗っかきの私だが今年の夏は昨年より暑く感じる。地球温暖化のせい？ それとも太ったから？ それはあるかもしれない。だが昨年と確実に違うことが一つある。それはマスクを着けているかいないかの差だ。この一枚の布のせいでまるまる坂がいつもの倍苦しく感じる。私がマスクを着ける時、それはほとんどが花粉症対策だった。しかもそこまで重い花粉症ではないため、一年のうちにマスクを着けるのは一カ月ちょっとで済んでいた。あとは風邪を引いた時、喉が痛い時、熱が出た時はもちろん着ける。しかし私はお腹は弱いがそれ以外は健康すぎるため、マスクのお世話になることはほとんどなかった。

そんな私だったが二〇二〇年は人生で一番マスクを着けた年だった。というか多くの人がそうなのではないか。今や、マスクは私の中の外出時に忘れてはいけな物ランキングでスマホと並ぶ物と言える。いや、スマホよりも大事かもしれない。もし学校に行くのにスマホを

忘れても、「忘れちゃった」とは思うがわざわざ取りに帰らない気がする。でももしそれがマスクだったら、きつと急いで家に戻るか、コンビニに駆け込むだろう。たとえそれが学校に遅刻するかもしれない時間だとしてもそうするだろう。マスクを着けずに満員電車に乗るだなんて今では考えられない。

二〇二〇年の三月頃から今日までお世話になりまくったマスクだが、私はできることなら着けたくない。まず、夏とマスクの相性は最悪だ。マスクがあるだけで呼吸がしづらいし本当に暑い。それに肌も荒れる。また、メイクはしても崩れてしまうしリップは塗っても見えない。可愛い色のリップを買っても結局無駄になってしまうのだ。しかしマスクはウイルスから私たちを守ってくれるし、マスクのおかげで安心して外に出られている。また、冬の間はマスクを着けるととても暖かい。だがやっぱりメリットよりもデメリットの方に目が行ってしまう。

ほんの一年前まではマスクをしていないのが普通だったのに、今ではマスクをするのが普通になっている。マスクを着けなくても安心して外に出られる日はいつ来るのだろうか。このままずっとマスク生活だったらどうしようと考えることがある。二〇二一年もまた、夏にマスクを着けなければいけないのだろうか。ああ、また汗を

かきながらまるまる坂を登るのかと考えたりもする。大
事ではあるが好きではないマスク。君の顔を見ないで済
む日が早く来ますように。

私を創る

高二

画用紙の凸凹した表面をすべる鉛筆の音が耳を刺激す
る。急に速くなったり、遅くなったり、人によってその
音は違う。鋭い音の人、優しい音の人、細かく鉛筆を動
かす人など、様々だ。どの音もその人の感情や性格を表
している。私はどうだろう。私が描く音はどんな音なの
だろうか。何を表すのだろうか。

美術系の進路に進むと決意してから約一年。いつもの
ように過ぎて行くのだろうと思っていた時は、普段とは
大分違う形で進んで行くことになった。四月から通うこ
とになっていたアトリエは、オンライン上での作品提出
となってしまう、十分に指導を受けられないまま毎週送
られてくる課題をひたすら描いた。一つの課題につき約
六時間、一人で部屋にこもってデッサンを描き続けるの
は、そう簡単なことではない。集中力が続かない上、一
人で描いているため、緊張感を感じることが難しいから

だ。そのため、それから約二カ月後にやっとアトリエに
通えるようになった時はとても嬉しかった。しかし、そ
れと同時に激しい緊張感も覚えた。「何人の人が同じク
ラスにいるのだろう」「私の能力はどの位のレベルなの
だろう」「周りの人たちはどれほど絵を描けるのだろ
う」。同じ不安がずっと頭の中をぐるぐる回っていた。
一度不安に陥った気持ちを切り替えるのは非常に難し
く、アトリエで初めて描いた絵の描き始めは、酷く悲惨
だった。しかし、不思議なことに、思い通りに絵を描く
ことができずにイライラしている反面、自分の心の中に
押さえきれない興奮の渦を感じた。もっと描きたい。も
っとずっと上手に描きたい。誰よりも上手に、誰よりも
楽しんで絵を描きたい。そういう思いをはっきりと自分
の中に感じた。

本当のことを言えば、進路を決めてからずっと、自分
の気持ちと選択に確信が持てずにいた。たくさん悩み、
よく考えて決めたことではあったが、「完全に迷いを捨て
られたのか」と問われたら、自信を持って「はい」と
返事することは難しかったかもしれない。全てを選択
することはできないと分かっているが、何とかもがいて
それを手に入れたと思う欲張りな自分があったのだ。
しかし、今回の出来事を通して、はっきりした。私にと
って「絵を描く」ということは特別だ。だが、ただの

「特別」ではない。全てのものが奪われるとしても、これだけは失いたくない、守りたいと思える、私の「自由」そのものののだ。絵を描けないのなら、何で表現できるだろうか。私の気持ちを、望みを表現できるのは「絵」だけなのだ。

これから先、何度壁にぶつかり、何度立ち止まりそうになるのかは分からない。だが、もし壁にぶつかりそうになったのなら、壁を壊してでも前に進みたい。もし立ち止まりそうになったのなら、立ち止まらないように走り抜きたい。やっと見つけた答えを、この先に進むための力にして、私の一生を創って行こう。

ぐるぐる

高二

バタービールは絶対飲む。絶対不味いけど、飲むんだ。映画も見て予習して行って、最後の日は沢山写真を撮ろう。完璧な計画。最高としか言いようがないくらい完璧。そう思っていたのに、修学旅行は中止になった。

六年間で一度きりの修学旅行だった。正直、行き先の内のはほとんどは行ったことのある所だった。それでも友達と学校の行事で思い出を作る、それが醍醐味だし、家

族で行った時とはまた違うし、絶対楽しいはず！と期待していた修学旅行が中止になった。おのれコロナ。ふざけんな。口も悪くなる。

高二の行事は全部そうだった。中止、小規模化、延期。高一の頃来年度はあなた達が学校を引っ張っていくんですよと言われていた頃が懐かしい。もっと大々的に引っ張っていきたかったですよ。だから、その分色々なものに参加した。文化祭も補助委員として手伝い、有志団体を作り、体育祭にも参加した。ワースト二位だったけれど。文化祭の衣装に合わせたメイクも落とさず、目の周りが皆真っ黒で、息も全然合わなくて、それでも友達と笑いながら何かをしているのが楽しかった。

思い出を作るのが好きだ。友達の写真が増えて、後から見返して、元気になれる。別に自分としては写真は撮らなくても良いと思っていた。でも思い出を目で認識できるのは悪い事ではないし、何より友達が撮りたがっている。そんな甘い判定のせいでスマホの容量は常に瀕死である。好きな漫画のイラスト、友達の変顔、自分かいたイラスト、また友達の変顔、遊んだ時の決めポーズ、お互いの家での自撮り、好きなアニメのイラスト、学校帰りの自撮り、また変顔、エトセトラ。何も撮らない時もあった。それでも自分の中に思い出が積み重なっていく。それはとても小さなことのはず。けれどなぜか

それのお陰でがんばろうかなと思える。特別大きな悩みがある訳ではないけど、漠然と助けられているような気持ちになるのだから不思議だ。自分の思い出は自分でしか見られない。どんなに仲の良い友達でも、自分が知らない場所で新しい思い出を更新していて、相手から見た自分も同じで、ちょうどいい距離感を保ちながら互いの思い出を作り続けていて、そうやって時間が過ぎていく。

そんな風にどうでもいいことについてぐるぐると考えてしまう時が誰にでもあると思う。自分はいつ死ぬのかとか、今なぜ意志を持って生きているのか、とか全てが不思議に感じる。自分の人生は運命でできているのか、偶然で作られていくのか。例えるなら、今自分はずっと続いているレールの上を歩いているのか、何もない場所にツルハシやらなんやらを持って立っているのか。ぐるぐるぐるぐる。考え出すとキリがない。結局、決まった事なのか否かなんて関係ないのだと思う。未来の自分とか過去の自分に気を遣っている余裕なんてないのだから。今、こうして作文を書いている時間も少ししたら思い出の一部になる。作るなら素敵な思い出の方が圧倒的に得だ。だから「今を楽しめ」なんて言葉があるのかもしれない。

それでもやっぱり、いくら日常を素敵な思い出にしようとして前を向いたとしても、それとこれとは話が別で、い

つまでも未練たらしく思っていることがある。もうお分かりだろう。今一番この作文で伝えたいこと、「修学旅行行きたかった!!」以上だ。

正義の反対は、悪ではない

高二

人にとって悪と正義には、どんな考え方の違いがあるのだろうか。

誰しも一度は正義のヒーローにあこがれたことがあるのではないだろうか。しかし、現実世界では、悪と正義は複雑に絡み合っていて、なかなかはっきりと決めることは出来ない。

悪と正義がよくわかるアニメとして、アンパンマンがある。アンパンマンはどの世代でも、ほとんどの人が一度は見たことのあるアニメだと思う。そのアニメに出て来る、アンパンマンとバイキンマンから、悪と正義について考えてみた。

物語だけ見ると、完全にバイキンマンが悪で、アンパンマンが正義のヒーローだ。しかし、アンパンマンの正義が困っている人を助けるなど、私たちの正義と同じと

いうだけであって、バイキンマンにも彼なりの正義があり、それに従って戦っているのではないかと思う。

では、作者であるやなせたかしさんはどのように考えているのだろうか。やなせたかしさんは、正義を「自己を犠牲にしながら『明らかに困っている人』を助けること」と定義づけている。これから考えると、確かにアンパンマンは、自分を犠牲にして、困っている人に自分の顔をあげ、困っている人たちを助けているという点で、やなせたかしさんがたてた正義の定義に当てはまる。では、バイキンマンについてどのように考えているのだろうか。やなせたかしさんは、「アンパンマンは少し優等生」と語っている。ここから、バイキンマンが悪なのではなく、アンパンマンが優等生すぎる、完璧すぎるということなのではないかと思う。逆にバイキンマンは、普通の人と同じで、優しい時もあれば、悪を働いてしまう時もあるのではないかと思った。また、「絶対的な逆転しない正義は献身と愛」と語っている。現実世界でこのような愛を実現できる人はほとんどいない。そして、本当の悪意を持って悪を働いている人もほとんどいないのではないかと思う。

正義の反対は、悪ではなく、別の正義である。そして、悪や正義は、行動に現れるものであって、それぞれは生き物として存在しているわけではない。すべての人

は、悪と正義の両方の性質を持っていて、絶対的悪も、絶対的正義も存在しないのではないかと考えた。心から悪を振りかざし、人に接している人はおらず、その人の正義を向けているということ。それを悪だと判断しているのは、受け取る側だということを知り、常に頭におきながら人と接していけば、もつと世界は変わっていくのではないかと思った。

中間人間

高二

私は高校二年生だ。子供かと聞かれたら「いいえ。」と答えるし、大人かと聞かれても「いいえ。」と答えるだろう。では一体何なのかと聞かれても、答えは出てこない。

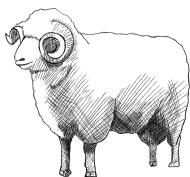
いつからかこんなことばかりを考えるようになった。幼稚園生や小学生からするとかなり「大人」な私達は、親や先生、大学生の視点で見た途端、まだまだ未熟な「子供」になってしまう。実際に私も小学生の時は高校生というものはキラキラしているお姉さん、大人だと定義していた記憶がある。しかしいざ自分が高校生になると、高校生⇨大人というのは間違っていると云えるとい

うことに気づいた。私の中でまだ大人は自分と違ってこうだという定義のようなものがある。その定義が頭の中で私達高校生と「大人」を引き離している。一つ例を挙げてみよう。例えば時間を聞かれた時。高校生の私は「今何時？」と聞かれた時、たとえそれがほとんど十時の九時五十八分だったとしても、正確に、そして単純に「九時五十八分。」と答えるだろう。しかしなぜか「大人」達は大雑把に「十時。」と答えてしまう。私はこれが本当に理解できない。今の時刻は九時五十八分なのに、十時まであと二分あるのに！ ほとんどの大人がこう答えるので、「十時。」のように答える人は全員大人という定義が私の中で完成した。たとえ私と同じ高校生がそのように答えても、その生徒はほとんど「大人」となる。

逆に、子供は自分と違ってこうだという定義も私の中に存在する。例えば大勢でパーティーをすると決まった時。私達くらいの年齢になると、パーティーが楽しみという気持ちももちろんあるが、「あれを準備しないと」「みんな喜んでくれるかな」「準備で忙しくなるなあ」など、マイナスな気持ちがちらつくようになってしまう。ところが子供の場合、周りがどうということは関係なく、ひたすらにパーティーが楽しみだというプラスの気持ちで胸が満たされる。私も幼い頃は完全にそのよ

うな思考をしていたが、いつからか自分でも気が付かないうちに前者のようになってしまっていた。

これだけで考えるとやはり私は大人でも子供でもない。「十時。」と答えないし、パーティーで大喜びもしない。けれど逆に言えば私は大人でもあるし子供でもあるのかもしれない。「大人」のように友人とカフェに行っておしゃべりを楽しむこともできれば、「子供」のように体を使つて校庭で鬼ごっこを楽しむこともできる。大人になることが良いことかなんて分らないけれど、早く大人になってまだ踏み入れたことのない「大人の楽しさ」というものを味わってみたい。けれど私もじわじわと「大人」に近づき、いつの日か私という人が百パーセント大人で構成され、子供のような無邪気さと気楽さを完全に忘れてしまう日が来るのかと思うと、少し恐ろしくもある。この何とも言えない不思議な気持ちを感じられるのも、高校生の今だけなのかもしれない。



青春症候群

高二

数年後、高校生活は楽しかったかと尋ねられたら私は何と答えるのだろうか。楽しかった、努力をしたと胸を張って答えることができるのだろうか。

高校生は青春という言葉にとらわれてしまっている。特に高校二年生は青春の年、青春の学年と言われているがそもそも青春とは一体何なのだろうか。私たちはよく「青春したい」という言葉を口にする。実際の所、その青春の中身についてはあまり考えたことがなかった。ただ漠然と、とらわれたように青春という言葉を連呼している。

恋愛映画のように異様に短いスカートをはいて、イケメンで高身長なサッカー部の男の子ときらきらした恋をすれば青春をしたことになるのだろうか。本音を言ってしまうと恋愛映画に対する憧れは大いにあり、自分も体験してみたいと思うのだが、青春とは目に見えるものだけではないのではないだろうか。

高校生活の中で何かしらの目標に向かって努力をすることが出来たならそれも一つの青春の形ではないかと思

う。だがこの努力をするということがとても難しく、高校生にとっての一番の課題ではないかとも思う。高校生にとって努力の形が見えやすいのは定期テストである。

今回こそはちゃんと二週間前から勉強を始めて良い点数を取ると口では達者に言っていたのにも関わらず、いつのまにかテスト前日になってしまい一夜漬けをするなんてよくある話である。口だけの努力なら誰でもすることが出来るが、それを実行することはとても難しい。その難しいことを実行することが出来たならば将来、大人になった時に、胸を張って高校生活ではたくさんの努力をした、青春をすることが出来たと言えるのではないかと思う。

色々と青春について考えてみたが、未だに青春の実体はよくわからないままである。思い出は多少なりとも美化されるものだ。結局、思い出が美化され高校生活が全て青春となってしまうのかもしれない。何気ないいつもの学校帰りに友達と一緒に寄り道をしたり、買い食いをしたことが一番の青春と思うのかもしれない。先生に怒られたことが一番の青春だったと思う可能性も大いにありえる。今はまだ全て仮定の話だが、数年経てば自然と自分自身が正解を導き出してくれることだろう。今の生活を数年後の自分が青春だったと思うことが出来るかどうか、とても楽しみである。

忘却への反抗

高二

思ったとおりに表現すれば忘れない筈だ、そう信じて書き始める。

好きなことはどこかを眺めることだ。心が、すうつと軽くなって穏やかになる。とても身近なものではあるけれど、空を眺めることが特に好きだ。雲一つない晴天も好きだが、夕暮れ時の空は格別だ。暖色系の色味の空が綿飴のような雲に穏やかに反射して朱くなる。そしてクリムソーダのアイスがソーダに溶けていくように空と雲の境目が曖昧になり、やがて夕闇へ消えていく。その過程を見ると私は切なくなると同時に懐かしい気持ちになって、幸せだとも思う。

些細な幸せは心を豊かにするものだ。先程のこと以外でも、ありがとうと言われたことや美しい花を見たときなど色々ある。おそらく些細な幸せを感じなくなっていくことで、どこか寂しい、虚しいと感じるのではないかと思った。だから、些細なことでも喜んだ童心に返ることも必要なのではないかと思った。何故些細な幸せを感じにくくなってしまふのか。あくまでも私の仮説だが、

きつと何気ない日常を過ごすことによってだろう。知識やパターンを学ぶにつれて段々と思考が深くなり、いつの間にか経験を積んでいく。これによって幸せのハードルが高くなり、そして徐々に忙しくなって考える暇もなくなるのだろう。勿論、学ぶことや成長することは大切で立派なことであると思う。しかし、その一方で忙しさのあまり、些細な幸せや幼い頃の大切だったことを忘れてしまうようで怖いのだ。何気ない日々というヤスリで幼い頃の感性まで段々と擦れて粉になり、人によってはおもう戻らないかもしれないのだ。もしかしたら私ももう幸せのハードルが上がリ、幼い頃の大切だったことを忘れていくかもしれない。そして更に何年か経てば今憶えている些細な幸せや大切なことを忘れてしまうかもしれない。嫌だ、そう思ったから私は反抗する。些細なことなどを詳しく言葉で言語化して表現することによってきつと幸せを更を感じるようになり、大切なこと忘れないようにしてやる、と。

忘れたくない。そう強く思い、反抗しながら、今日も私は何気ない日々を過ごす。

なんか面倒くさいヤツ

高二

小さな不幸にあいたい。そう思うことが時々ある。幸せでいることが何よりだと分かっているのに、幸せよりも不幸せを求めてしまう日がある。

幸せの基準は人それぞれだ。毎日ただ普通に生きていられる、それだけで幸せを感じる人もいるし、たくさんのお金を稼いで裕福な暮らしを送ることに幸せを感じる人もいる。考え出したら切りが無いほど色々な場面があげられる。私が幸せだと感じるのはどのような時だろうか。今簡単に考えた中だと、夜ベッドに入って眠る時、次の日が休みである時、美味しいご飯を食べている時、など、圧倒的にこの三つだろうと思う。少ない方なのか。それとも普通なのか。正直、本当に心から幸せだと感じるタイミングは、さほど多くはないと思う。もしくは気づいていないだけなのだろうか。

さて、話を初めに戻して、私が何故不幸にあいたいと感じてしまうのかについて。その理由はよく分かっている。それは幸せを感じるということが、私にとって難しいことになってしまったからだ。

これは成長する中では当たり前のことと言えばそうなるのかもしれない。子供から大人になる間に、幸せを感じる頻度は低くなるのではないか。日常のちょっとしたことでは何も感じられず、それが日々重なってだんだんと幸せであるということを忘れてしまう。私もその典型的なタイプの一人で、本当に極端に言えば、一日を終えるために一日を過ごしているのだと思う。そのような毎日だんだんと嫌気がさして、逆にいつそのこと最悪なまでに、不幸にでもなってしまうばいいのに思ってしまう。自分でも自分が可哀想だと悲しめるような。本当にいかにも人間らしい人間だなと思う。きっと人間は幸せを感じなければ生きていけないのと同じくらい、悲しみも感じなければ生きていけないのだ。時には自分が悲劇のヒロインになることで、生きる気力を取り戻している。だから幸せになりたいと思うなら、まずは悲しみを噛み締めるべきだ。私は本能的にそれを求めて、可哀想な自分を思い浮かべる。でもどうせ、幸せにも満足できないのだから、その不幸にも満足できないのだろう。

正直、この文章を読んで何を言っているのかよく分からないと思ったなら、それは決して間違っていないのだ、そのように思ったまままで構わない。私は明日も小さな不幸を求めながら、しかしそうはなりたくないと思いながら、幸せであると感じるのだろう。早速幸せを感じ

にベッドへ入ろうと思う。

Photograph

高二

久しぶりの部屋掃除。部屋の一番隅にある引き出しにはガラクタのようで捨てられないものが詰まっていた。友達からもらった沖縄土産の星の砂、それを包むいちごのにおい付きの紙袋や友達とやりとりした絵手紙。なつかしさがこみあげてきた。小さい頃おもちゃのカメラをどこにでも持ち歩いたことを思い出し、ピンク色のカメラを手にとった。電源ボタンを押してみる。何年も使っていない電池式のカメラはジーという大きめの音をならしながらちゃんと起動した。

小さい頃から写真を撮ることが好きだった。その時、撮りたいと思ったものは何でも撮った。道端の花の写真、白熊の肉球、家族の写真、謎の白い物体。何を撮ろうとしたのか分からないものもある。感じている光景そのままをカメラに残したい、残せると思っていたのかもされない。今この場で感じている気持ち、空気をそのままとっておけるような気がしていた。でも実際、今見てみると、その時の気持ちは思い出せない。日常をきり

とった写真なんてなおさらだ。その時にしか感じられないからこそ、その気持ちは貴重でとっておくのは難しい。最近スマホなどで手軽に写真を撮って加工できるようになった。学校から見える富士山や○○坂からの美しい夕焼け空はカメラで写してみると、本物よりも劣ってしまうことがほとんどだ。目で見た実物の方が数倍美しいと思う。だからより美しい写真にしたいという加工してしまふのだ。友達と撮る写真も最近は加工アプリを使って撮るのが当たり前になっている。確かに加工して撮ることとかわいくなれる。しかし写真のようにならない自分に対してかえって悩んでしまうのではないかとも思う。

「写真を撮影する」の「写真」＝ photograph とはギリシャ語で光の絵という意味らしい。日本語で言う撮影は影を撮ると書く。光と影、全く正反対のように感じた。調べてみると、影は光にさえぎられてできる暗い部分だけでなく光や物の形という意味もある。光も影も一方が欠けると成り立たない。写真が光と影で成り立つようにすべてのものは光と影で形作られているのだ。そう考えると私にも同様のことが言えるのだろう。私の長所が光で短所が影だとしたら、どちらかが欠けても私という人物は成り立たないのだ。

幼い頃撮った写真は空も青くないし、月なのか電灯な

のかもよく分からない。それでも愛おしさとか何と
いうか、とにかくその頃の写真をみると温かい気持ちに
なれた。最近撮った写真は、きれいで夕焼けも真っ赤に
写っているのに、心の奥に温かさが広がるような気持ち
にはなれない。写真は見た目だけではない撮った人の心
もあらわすのだろう。格好つけず自分の光と影を認め、
受け入れることで温かい素直な人になれるのだと思っ
た。今、その時に感じた気持ちを大切に過ごそう、そう
思いながら、ちょうど整頓し終えた引き出しにカメラを
そっとしまった。引き出しだけでもあと二段。部屋の掃
除はまだまだ時間がかかりそうだ。



未来の私をプロデュース

高三

受験生になって、私は日記を書くようになった。きつ
かけは、塾での予定を立てるために、手帳を活用し始め
たことだった。それまでは手帳を上手く活用できていな
かった私だが、手帳に学習の計画を書き込むうちに、持
て余された空白が許せなくなった。何とか余白を埋めた
い。それで日記も一緒に書くようになったのである。

そんな曖昧な動機で日記を書き始めたので、当初は特
別な感情もなく、大きな文字で一行ほど「アイスを食べ
たい」などと、日記というよりは独り言ばかりを書い
た。それでも、なんだかんだ続けるうちに習慣化したら
しい。気づけば日に日に欄の文字は小さく、びっしりと
埋まるようになっていた。高校二年の冬ごろから始め、
そうこうするうちに現在に至るまで続いているという訳
である。

私は学校で配られた手帳を使っているから、五百円玉
くらいの小さな正方形にそれを書くことになる。すなわ
ち、日記を書くには、三十一文字のごとく言葉の吟味と
取捨選択が必要なのだ。

まず当然だが、日記を書くためには、その日にどんなことがあったか、どんな気持ちだったかを思い返すことから始める。高校三年生で受験生という、人生の一大イベント真つ最中だからだろうか。以前にも増して自分の様々な感情を見つけられる。多幸感どうかうかしていたかと思えば、制御不能なまよやが行きつ戻りつして、——意外と、感情は変わりやすい。

一日過ごせば、だいぶ多くの出来事に出会うものだ。「友達のプレゼンが上手過ぎた」とか、「塾でお気に入りの席が偶然空いていた」とか、日記の素材は溢れている。それらの中から書くべきことを直感で選びとって、文字に起こすのだが、この時私が気をつけることがある。それは、なるべくポジティブに、未来を見据えて、言葉を選ぶことだ。後で見返すこともあろう、なるべく楽しい記憶で埋めつくしたい、そう思うゆえだ。楽しかったことはありのままに表現し、嫌だったことも明日へのヒントとして、そこから学んだことを沢山書く。

日記を始めて、強く意識させられたことがある。当然と言われればそれまでだが、「過去を書き換えるのは不可能」ということである。どう足掻いても変えられない過去なのだ。受け止め方次第で、印象も意味合いも変えられる。そもそも、過去に囚われているくらいなら、未来を変える努力をしたい、そう思うようになった。過去

の失敗なんて、武勇伝を作る材料にでもしてしまえばいいのだ。失敗あつての成長だろう。

それともうひとつ、分かったことがある。「主人公は私」ということである。この世には色々な人がいて、多様な生き方がある。歴史の教科書を見ても、それは一目瞭然だ。でも、私の人生を生きられるのは、私しかいない。私の日記を書けるのは、私だけなのだから。私は他の誰にもなれない。けれど、私は私になれる。望むなら、どんな私にでも。だったら、自分を磨くしかないだろう。結局のところ、自分を一番理解しているのは、やはり自分自身だ。セルフプロデュースのこの人生、主演の私をどれだけ光らせられるかが腕の見せ所なのだ。自分なりの理想像を突き詰めて、短所も長所に変えていく。誰の真似でもないのがいい。間違はなく、私は私だ！

ガチャガチャ

高三

私は時々、目的の有無にかかわらず、一人でぶらりと電車に乗り、ショッピングモールへと足を運ぶ。そして、建物内のエスカレーター脇にずらっと並んでいるガ

チャガチャ。今でも見かける度にそこへ行き、ついつい一回二回と回してしまう。勉強機の縁には、これまでに手に入ってきたフィギュア達が、所狭しと並んでいる。

最近では、「いきもの大図鑑」というシリーズの、生き物の模型を主に集めている。ワニガメ、アルマジロトカゲ、ダイオウグソクムシなど。他にも、多種多様な生き物が、机の縁に並んでおり、異様な空間と化している。

どの生き物も、実物の写真と見比べてみても、特徴がしっかりと再現されている。ワニガメを例に挙げると、皮膚のとげのような突起物をはじめとして、甲羅の角ばりや鋭い爪先にいたるまでが忠実に再現されている。このような模型をはじめて目にしたとき、五百円と比較的低価格ながら、ここまで細かに各生き物の特徴を捉えているものかと、全く感心してしまった。また、可動部も多いため、ボーリングを自由に変えることができるため、いつまでも眺めていて飽きることがない。

さて、ガチャガチャの魅力について、その完成度の高さは然ることながら、やはり、引いてみるまで何が出るか分からないというところが、醍醐味ではないだろうか。一番好みの色合いや、種類の子が出て来てくれるよう、願いを込め、出て来るフィギュアに思いを馳せながら取っ手をぐるぐると回す。これは、何が出るか分からない、ガチャガチャならではの胸の高鳴りである。結果

として、最初の目的ではない子が出て来ると、はじめはがっかりしてしまう。しかし、自分が引いたタイミングで出て来た、ということは運命なのでは、と前向きに考え直す。そして、家に連れて帰ってから、机に元いた子達と並べ、眺めているうちに愛着がわいてくる。

ガチャガチャは、開けてからのお楽しみということで、当然、出るものが被ることがある。私は、今までで最大五回連続で、同じフィギュアが出て来たことがあった。出て来たものはというと、頭は普通のコアラ、だが首から下が人間の胴体になっていて、その人型コアラが直立している、というものだった。友人にきいても、引き取り手は見つからないだろうと、仕方なく、普段と同様に机に飾ることにした。引いているときは、確かに欲しかったはずなのに、なぜこれを五回も引いたのだろう、と虚しさを感じつつ、コアラ達を机に飾った。しかし、これらのコアラ達をよく見てみると、一匹一匹に少しずつ違いがあることに気が付いた。もちろん、全て同じようにつくるのが難しいからこそ、違いが生じてしまうのだろう。一匹目は、少し目が離れていて、間の抜けたような顔をしていた。二匹目は、模様が一匹だけずれていて、特徴的なものとなっていた。これに気が付いたとき、一匹一匹同じようで、それぞれに個性があるのだと感じた。それと同時に、被ったことにすら楽しみを見

い出すことができるなんて、これだからガチャガチャはやめられないのだな、と改めて好きになった。

これから先、いくつもの素晴らしいガチャガチャが生み出されていくと思うと、期待に胸が弾む。机上に並んだフィギュア達を眺めていると、この子達は、私の知識の引き出しの一つなのだと感じた。ガチャガチャを引いたことで、普段の生活で知ることがなかったであろう、マイナーな生き物の造形や、生態を知ることができた。私はこれから大人になっても、ガチャガチャと回しては、机に飾つてを繰り返していくのだろう。いつか机が全て埋め尽くされてしまうまで、ガチャガチャを引き続けたい。

気になる

高三

頭が良くなりたい。頭が良いとは、三種類の力が重なって起こる状態だと、私は考える。知識量、物事に対して機転が利くこと、そして、地頭が良いことの三つだ。私は、機転は利く方だと自負しているが、他の二つが問題だ。

地頭を鍛え、知識量を増やすにはどうするべきか。解

決するキーワードは「知的好奇心」であると考えた。

「知的好奇心」があれば、一生、知識の上書きをしつづけ、知識量を増やすことが可能だ。さらに、地頭力、つまり、自分で考える力の一番根底にも、それがあるのだ。私は頭が良くなるための基本中の基本である「知的好奇心」を見逃さず、追求することの大切さを教わり、身をもって体感した。そのあらましを記したいと思う。

全ての始まりは、高校の現代文で出された「意味調べノート」であった。授業で読む作品の中の分からない言葉を一語以上調べるという課題だ。高一の時は「面倒」という最強の敵に負け、私はひたすら「テキスト」に済まそうとしていたため、分からないものは放置というスタイルが身についてしまっていた。もし、タイムマシンであの頃の自分に丁寧に調べる大切さを語ったとしても、昔の私は動き出さないだろう。私が把握している限りの、長田千英のア・プリオリの性格として、やり始めるのが遅い、それでもやり始めると徹底的に時間をかけること。さらに述べると、興味のあるものとなないものは、かける熱量が百八十度変わることなどがある。しかしながら、どれをとっても明白になる私の極端さには、自分でも疲れる。

こんな調子で私はある日突然、「意味調べノートを本気でやってみよう!」と意気込んだ。毎回十語以上とい

う条件のギリギリラインで提出していた私が、八十語を本文から取り上げ、意味調べを始めた。さらに、取り上げた語が、反語や英語にしたらどの単語になるのかを徹底的に調べた。時間を忘れていた。自分の好きな英語や、選択授業の世界史に通じる言葉に関連づけられるだけでなく、今までに読めなかった難しい漢字を読めるようになった。嬉しいから楽しい、楽しいから好きのように、意味調べは、私の中で着実に興味のある方へと地位を高めていった。

その良い影響は、同じ調べ学習の音楽のレポートにも及ぼされた。授業で勉強していた世界史の一部であったということもあり、「つ、繋がってる!」と感動を覚えた。漢文と世界史でも同じ現象が起きた。アルキメデスが叫んだという「ユーレカ」の気持ちの連続であった。私は高二になり、初めて勉強や学校の授業に、強い関心を持つようになったのだ。

そんな高二の三学期、COVID-19がパンデミックとなり、気づいた時には私は高三。つまり受験生になっていった。休校期間中のことだった。全く受験生の自覚なしで、例のごとく急にダイエットしようと思ひ立ち、ダイエットに勤しみ始め、勉強という概念を忘れてしまいそうなほどだった私に、新しい意味調べの課題が出された。久しぶりにワクワクが止まらなかった。数日間はその

れらをずっと調べていた。気になったものを自分なりにまとめ、一度調べたものでも、「やはり足りない!」こをもっと調べたい!」と、私はどんどん知ること、理解することに貪欲になっていった。調べているうちに今辞書で引いている語が塾のテキストや「キーワード読解」や倫理、そして、世界史や英語の学習範囲でも繋がりがあることに気づき、二度目の感慨無量の感覚に襲われた。自ら深みにはまると、勉強って意外と楽しいのかもしれない、思えるようになった。

本題に戻ろう。私は頭が良くなるきっかけを得たものの、しかし、夢への道はまだまだ遠い。しかし、「鉄は熱いうちに打て」だ。分らないことはすぐに調べ、「温故知新」、常に好奇心を持つて周りを見てみるという考え方を大事にしながら、これからも進化しつづけた。このきっかけを逃がさずに、熱中して自信がある分野をつくることは受験においても重要である。逃げ出さなくなったり、逆に逃げたくなかったりするが、つべこべ言わず勉強しよう! 受験生!



責任

高三

高校三年生の夏休み、容赦ない日射しと生暖かい風に包まれながら、重い足取りで塾へと向かう。その道中、ふとマンシヨンの駐車場が目に入った。数台の車が一行に整然と並び、フロントガラスに光を反射させながらきらきらと輝いている。その光景を遠目に眺めながら、私も、もう運転ができる年齢になったのかとしみじみと感じた。

私は幼い頃から、車の運転に対して密かな憧れを抱いていた。きっかけは、遊園地にあるゴーカートに乗ったことである。アクセルを目一杯踏み、颯爽と走り抜ける快感は、当時の私にとって衝撃そのものだった。それからというもの、車に乗る時は必ず、テーマパークで貰った運転免許証を持ち、父の運転を真似してエアハンドルを握った。早く本物の車を運転してみたい。運転への憧れは日を追うごとに強くなっていった。

しかし、その憧れも長くは続かなかった。小学五年生の時、車の追突事故を目撃した。車のボンネットは大破し、リアバンパーは潰れている。まるでニュースで目に

するような悲惨な事故だ。私はこの光景を前にして言葉を失った。

車は言うまでもなく、便利で快適な乗り物だ。歩くと途方に暮れてしまいそうな距離でも、車ならすぐに行くことができる。しかし、一歩間違えれば事故を引き起こし、自分の人生、そして話したこともなかった誰かの人生を狂わせ、命を奪うことさえある。私は事故を目の当たりにした時、幼い頃から抱いてきた、夢があつて無限の可能性を秘めた運転への憧れが一瞬にして消えた。この日を境に、私の中で運転は「楽しいもの」から「恐ろしいもの」へと変わってしまったのを感じた。

私から運転への憧れを奪い取ったものとは一体何なのだろう。勿論最初は、誰かを傷つけてしまうことや、事故への恐怖心だと思っていた。しかし、本当にそれだけだろうか。運転が許される年齢になった今だからこそ、改めてこの問いと向き合った時、ある言葉が脳裏に浮かんだ。

「責任」

加害者は、決して故意に事故を起こしたわけではない。事故を起こす直前まで、私たちと同じように日常生活を送っていた人だ。しかし、誰もが一瞬の気の緩みで、加害者と成り得るのだ。自らが起こした事故の罪を償わなければならないこともある。それは、まさに運転への責

任があつたからだ。責任とは、たとえどんなに辛い代償であつたとしても受け入れる覚悟を持つこと。当たり前のことと言われればそれまでだが、私にとってはその責任はあまりにも重く、恐ろしかった。

私は今後、自分の人生において沢山の決断を下すだろう。その一つ一つに、必ず多かれ少なかれ責任が伴う。責任を持つことはやはり怖い。けれど、私は今、責任を持つことは悪いことばかりではないと思う。例えば進路だ。私はこれから進んで行く道を自分で選んだ。それは、決して誰かにお願いされた訳ではなく、強制された訳でもない。紛れもなく、全て自分の意志だ。それでも、困難な壁を前にして、辞めたくなくなることもあるだろう。沢山後悔をするかもしれない。しかし、どんなに辛く、苦しいことが起きても、自分の決断は自分の責任だ。その責任が、きつと私を踏ん張らせて奮い立たせてくれるのだと思う。車の運転においても、責任があるからこそ、気を引き締めて安全に運転を楽しめるのではないだろうか。そう思った時、ずっと私を苦しめてきた責任が、そつと背中を押してくれるような気がした。

今日も沢山の車が私の前を通り過ぎて行く。その一台一台を目で追いながら、幼い頃に抱いた懐かしい憧れが少しずつ蘇っていくのを感じていた。

つくること

高三

創造というものはとても偉大である。絵、漫画、歌詞、曲、文章、小説、お笑い、劇、コント……私たちが日々目にしているものの全ては誰かが創造し、生み出したものだから存在しているのだ。その創造されたものによって人は、楽しくなったり、笑ったり、考えたり、泣いたり、頑張れたり、生きられたりする。そして、私の命も救っている。

ある日、突然、全てを無意味に感じた。私がいくら絵を描いたって、漫画を描いたって、他に上手い人、面白い人、魅力的な人がいるから、その人たちに任せておけば、何もしなくてもいいのではないか。面白い漫画は読めるし、素敵な絵も見られる。それでいいのではないかと思つたのだ。私の下手な絵より、この世にはいくらでも上手い絵があるのだから、私は必要ではないのではないか。描く意味などない。私が時間や体力や氣力を費やして生み出しても何にもならないと思つた。

そんな時に読んだのが、『姫と騎士たち』という漫画だった。この漫画こそが、泥沼から私を引き上げてくれ

た。「あなたが読んでくれるから頑張れる。マンガは読んでもらわなければならたない。あなたに恥じるものは描けない。そう思うから描けたシーンもたくさんあります。」とマンガを描いている先輩が、もう筆を折ってしまいそうな後輩に強く伝えたシーンである。そうなのである。全くもってその通りなのである。私は読みながら何度も頷き泣いた。

何かをつくる時、忘れてはいけないことがある。それは自分軸かどうかである。自分が見たいものを書いて、自分が読みたいもの書いて、自分が楽しいからつくる。まず、それがあって他人の評価を見られると思う。他人の評価を気にしすぎる人は可哀想だったし、腹立たしかった。描きたいから描くんでしょう。人のためではなくて自分のために描かないと、性根が腐ってしまうではないか。

嫌なことがあったとするだろう。例えば、ひどいことを言われたとか。そして、私は絶対にこういう言葉を人に投げないようにしようと心に決めるも、心からはどんな汚い感情が出てくる。苦しい、悲しい、死ぬ、死んでやる、助けて、辛いよ、もう。ドロドロが蠢いている。そんな状態の時に描いた絵を見返すと、とても苦しそうな顔をしている。訴えている。これで人に「辛い」と伝わる。伝わるとその分の私の「辛い」が昇華され

る。もしかしたら私も誰かの「辛い」を共に昇華しているのかもしれない。共感は大きな救いである。私も実際に、言葉にできなかった、言いたくても言語化できなかった、その「辛い」を、ある歌手が代弁してくれているかのように、歌っていた。痛いほどに分かる辛さを、この人も持っていて、それを表現してくれていたのだ。私は彼女に何度も何度も命を救われた。彼女の作る詞や音楽、心の叫びが分かる人は、きっとみんな優しい人である、社会や世間の大多数になれなかった人であろう。そんな理解されないマイノリティである人間を、私を、救い上げてくれたのだ。

この世には私と似た「辛い」を持つ人がどこかにいるかもしれない。私が表現して発信しつづければ、いつか遠い未来、誰かの共感が得られる、ほんの少しの救いになるかもしれない。「辛い」をこんな素敵に昇華できたら、とても嬉しい。このような淡い夢も描くことに含められるのだ。私は創造を止めない。

真の贅沢

高三

私が埼玉の家を訪ねたのは二年前の夏だ。この誘いを受けたのは、それよりさらに遡ってその年の元旦、曾祖母の家に親戚一同が集った時だった。私の父の当時の赴任先は埼玉だった。夏休みに遊びに行くという話をしたところ、埼玉に住む母の叔父が、うちにも来ればよいと言ってくれたので、誘いを受けることにした。

一日目は私たち家族三人で父の普段住んでいる家に泊まり、二日目に埼玉の大叔父と大叔母が二人で暮らす家を訪ねた。父の家の周りには見慣れたチェーン展開のスーパーやドラッグストア、中華料理屋など数件のお店があったが、同じ埼玉でも高速を下りて大叔父の家へ向かう細い道は、畑に挟まれていて、民家がぼつぼつとあるだけだった。

家に着くと大叔父が家の外まで出迎えてくれた。庭はとても広く、一角に畑もあった。家の中に入ると、ちょうど大叔母が夕食の支度をしているところだった。三人で訪ねたが、交代で大叔父自慢の檜風呂に入りながら、皆で手分けして夕食の準備を進めた。

大叔父が自身の手で作った木の円卓で作業をしていると、窓から赤い西日が一瞬、強く差したかと思うと、フワッとゆるやかに消えていった。

料理はどれも素敵だった。自宅の庭で採れたナスやカブなどの野菜を使ったメニューも多くあった。ナスは天ぷらにして、シンブルだが素材本来の味を引き立たせてくれる塩をつけて頂いた。またカブは、白い部分はお味噌汁に、捨ててしまいがちな茎や葉はジャコとあえてお浸しにした。これがまた新鮮なシャキシャキという食感を楽しむことのできる絶品だった。

夕食を食べ終えお茶をしていると、大叔父がなつかしいだろうと言って取り出してきたのは、私にはあまりなじみのない昔の映画や音楽のCDだった。大叔父の家には真空管アンプと対になっている大きなスピーカーがある。それで音楽を流すと、重くて低い音が体の芯に響く感じがした。いつもイヤフォンで音楽を聴いている私には新鮮で、忘れがたい感覚だった。

次の日、朝食を終えた後、書斎に案内してもらった。壁一面が本棚だった。加えて幅広いジャンル、年代の本があるので、まるで町の隠れ家的古本屋のようだった。ここから今日の気分にあう一冊を持って行って、静かな午後、あの円卓で本を読んだらどんなに心地良いだろうと想像を膨らませた。大叔父は気に入った本はどれでも

持つて帰りなさいと言ってくれたので、その言葉に甘えて何冊か気になった本を自分のリュックの中に入れた。また、最後にお土産としてクラシックのCDを数枚渡してくれた。こうして埼玉の家での有意義な時間は終わってしまった。

私はあの時間を通して「真の贅沢」を知ることが出来た気がする。食においての贅沢とは、果たしてお金を惜しみなく使い、高級食材を沢山使った料理なのだろうか。私はあの時、新鮮な食材を余すところなく使った料理のおいしさを実感した。また、音楽も、インターネットで簡単に鑑賞できるようになったがゆえ、実際のものを見たり聴いたりしなくても満足している人も多いのではないだろうか。しかし、もしかすると、本物を一度体験し、深く心に刻まれることで、一生記憶に残る贅沢な時間になるかもしれない。

休校中、断捨離をしていた。するとCDラックからあの夏、大叔父からもらったクラシックのCDが出てきた。その中の一枚を、デッキに入っていたリスニングのための英語のCDを取り出して流してみる。あの時大叔父の家で聴いたほどの感動はないものの、心地良いクラシック音楽の中で作業するのはなかなか悪くない。あの夏のことを思い出し、手が止まっていたところ、ふと我に返り、再び手を動かし始めた。ちょうどその時、父が

いつもより少し早く帰宅した。そして帰宅して早々、「あ、そういえば次の現場、また埼玉かもしれない。」単身で赴任する父には少々気の毒だが、また、あの贅沢に触れることが出来るかもしれないと、内心嬉しい私がいる。



第二回エーカック記念作文コンクール テーマ「青」

〈作文・エッセイ部門〉 優秀賞

青

高一

目が覚めるほどの青だった。思わずこぼれたため息が空に白く溶ける。青はいつまでも鮮やかでどこまでも続いていた。

小学校低学年の頃、よく弟と川岸で遊んだ。川に入りびちよびちよになった服で帰って以来、母に川のなかには入るなと口酸っぱく言われていたため、もっぱら川岸が私たちの遊び場だった。草舟を流したり、綺麗な石を拾ったり。川に入れずとも、無限にあそんでいられた気がする。

青。川の色を多くの人がそう呼ぶ。でも、一口に青といっても全部が同じ青じゃない。川は青じゃなく、なんだかもっと柔らかい感じがする。幼いながらに何となくそんな気がしていた。私は青が苦手だ。まっすぐすぎて怖い感じがする。

ある日、いつも通り川岸で綺麗な石探しをしている

と、一瞬何かが青く光った。青い光の正体を暴くべく、石の間を探してみると、ビー玉位の大きさの硝子の破片があった。歪な三角形をしたその破片をそっと傾けてみると、透明から鮮やかな青になった。それは空と同じ、目が覚めるような青だった。傾けたり元に戻したりしながらしばらく眺めていると「痛っ」硝子の削られた先端が親指を突き刺した。親指からドロツとした血液がまあるくなつて現れる。やっぱり青は苦手だ。舌打ちをした。

ある日学校に行くと、ある女の子が私良いの持つての！と鞆をガサガサしだした。これ！そう言つてその子が出したのは鮮やかな青い鉛筆だった。綺麗、いいなあ。そんな声がちらほら聞こえる。その子は自慢げに頬を紅潮させた。青い鉛筆を中心に置いて何人かで盛り上がっているのを眺めていると。

「青なんて男の子の色じゃん。」

誰かがそう言った。一気に空気が冷たくなる。その言葉に続くように輪の外からたしかに、青好きとか変、という声が出た。その言葉を皮切りに、輪のなかにいた人たちもそう言われればそうかも、青よりピンクの方が良い。そんな言葉を口にし始めた。

「青好きとかおとこ女じゃん。」

止めを刺すように誰かがそう言った。汚い笑い声が終わるまでその子はずっと下を向いていた。

青の話題が飽きられた頃、その子は静かに鉛筆を鞆に
入れた。ああ。青なんて持つてくるからだよ。あの子
の悲しそうな顔を見ながら残酷にもそう思った。それ以
来、あの子は学校に青い鉛筆を持ってこなくなった。青
は硝子の破片のようにあの子の心を突き刺した。

「あー疲れたあ。」

あれから何日か過ぎた、校外学習の帰りだった。全員で
うす暗い街を過ぎ、埃っぽい路地裏を抜けた頃、突然あ
の子が言った。

「空見て。」

見上げると。目が覚めるほどの青だった。思わずこぼれ
たため息が空に白く溶ける。青はいつまでも鮮やかにど
こまでも続いていた。綺麗。思わず誰かが言った。

「青がいい。」

あの子は震えた声でそう言った。手には、あの青い鉛筆
をぎゅっと握りしめていた。みんな、何も言わなかつ
た。青、いいよね。私はつい、そう言っていた。あの子
と目が合う。あの子は私の目を見て小さく笑った。瞳の
奥には目が覚めるような青があった。

高校生。春。「見てー。」その一言と一緒に送られてき
たのはキラキラと光る青い爪の写真。あの子からだ。
「マニキュア塗ったのー」「可愛いでしょ」あの子はあれ
以来、少し強くなった。私は携帯をそっと閉じ、周りを

見渡す。きつと誰のなかにも青がある。いつか彼女と再
会するときには、私も持つていたい。目が覚めるほ
どの青を。

佳作

ブルーハワイ・パラドクス

高一

ブルーハワイって何なんだ。夏祭りの時期になると私
はいつも疑問に思う。

ブルーハワイを知らない人にブルーハワイとは何か説
明してくださいと言われても、上手く伝えられない独特
な味をしている。甘いような爽やかなような不思議な
味。かき氷のシロップの中で定番となっているが、ブル
ーハワイだけ異質感じがする。いちご味ならいちご、
メロン味ならメロンの味がするけど、その並びの中に一
つだけ味ではない味がある。ブルーハワイという名前だ
けで味を想像するのは難しい。

その上、人が食べてはいけないような色をしている。
だからなのか、私はあまりブルーハワイが好きではな
い。好きな人からしたら、ブルーハワイは夏の決まった

時間にしか会えない特別な味なのだろう。だが幼い頃、母の下を見てしまつて以来、ブルーハワイは食べていない。

そもそも、かき氷の味は全部同じ味らしい。そんな都市伝説のようなものが一時期流行つた。シロップ自体は全て同じ甘い液体で、香料と色の違いで味を錯覚させているらしい。赤色といちごの香りならいちご味、黄色とレモンの香りならレモン味、緑色とメロンの香りならメロン味。だから鼻をつまんで目隠しをしてかき氷を食べると、全て同じ味になるらしい。

なるほど。だから青色で爽やかな香りがすると、ブルーハワイになるのか。いや、何かがおかしい。そもそもブルーハワイが何か分からないのに、どうしてこのかき氷はブルーハワイの味だと言えるのだろうか。

いちご味ならまだ理解できる。いちごが実際に存在するからだ。だから赤色といちごの香りを感じた時、今まで食べたいちごの味と、かき氷の味を比べることができる。そうして、このかき氷はいちご味だと判断できる。

だが、ブルーハワイはどうだろうか。青色と香りで、ブルーハワイと判断できるのは過去にブルーハワイを食べたことがある人だけだ。でもそれだと本当のブルーハワイ味とは言えない。いちご味は本物の野いちごと比べている。ブルーハワイも本物のブルーハワイと比べなけ

ればいけない。

だがここで一つ大きな問題が生まれる。本物のブルーハワイなど、どこにもないのだ。ブルーハワイは味ではない味。つまり、あのかき氷のシロップこそ本物のブルーハワイとなつてしまうのだ。

ブルーハワイはブルーハワイの味という結論になつたが、何かが腑に落ちない。ブルーハワイはいちごと違って材料がある。だとしたらブルーハワイの味を説明できるはずだ。でもできない。ブルーハワイはブルーハワイ味だからだ。でもブルーハワイには材料がある……。いくら考えても堂々巡りを繰り返してしまふ。

かき氷ぐらい何も考えずに食べたいような気がする。でも、結局ブルーハワイって何なんだ。青いハワイって一体、何なんだ……。



佳作

ビッドブルーのあなたへ

高二

拝啓

残暑もようやく和らいできましたが、いかがお過ごしですか。私はあなたのお陰で快適な生活を送っています。さて、今回筆を取らせて頂いたのは、どうしても感謝をお伝えしたかったからです。

あなたはご自分がいかに素晴らしい存在であるかご存知でしょうか。私のような、唯一あなたにしか頼ることのできないちっぽけな高校生にとっては、あなたはかけがえない存在なのです。

どんな環境にあっても、あなたは私たちのことだけを考えておられます。ご自分がどれだけ夏の直射日光に当たっていても、冬の張りつめた冷たい空気の中にいても、あなたはこれらの不快分子を取り除き、いかに私たちが快適に過ごせるか、それだけを考えておられます。時にその思いやりが行き過ぎて寒く感じられようとも、あなたの心遣いを思えば不快になることはありません。どれだけ落ち込んだことがあっても、あなたの御顔を

見るだけで安心することができます。あなたの御顔は凛々しくて、とても格好良いです。間近で拝見することや長時間見つめることは叶いませんが、いつか機会があればその造形を拝謁したいものです。

加えて、あなたの御声も素晴らしいです。眠い時でもあなたの御声を聞くだけで目が覚めますし、時には安心感をもたらしめます。私が学校に行くのが億劫だと思っている時には父性あふれる頼もしい声色で励まし、帰り道疲れを感じている時には母性に満ちたやさしい声遣いで癒してください。私はあなたの御声が大好きです。

あなたは五十年以上もの間、昼夜問わず休みなく働かれています。これは本当に素晴らしいことです。私はまだ十七年しか生きておりませんが、ゆり籠から高校まで、あなたのお世話になっていきます。

あなたは私の世界を広げて下さいました。あなたがいらっしやらなかつたら、どれだけ狭かったことでしょう。そして、雨に負けず雪にも負けずに早朝から深夜まで働かれているあなたの姿を見ると元気づけられます。

その頑丈さのゆえに遅れることも少なく、学校を休みたい私は、あろうことかあなたを恨んだこともありましたが、その強さにどれだけ救われた人があることでしょう。環境に左右されず我が道を進むことができるあなたが羨ましいです。私もあなたのようにになりたいです。

十年前の春、初めて一人で登校する不安で一杯だった私を、あなたは温かく包み込んで下さいました。

一緒に登校する仲間ができてからも、優しく見守って下さいました。私や友人がどれだけ騒ぎ、愚かなことをしても、あなたは何も言わず黙っておられました。その裏にあなたの優しさがあることを知っています。

あなたはこの日本社会において珍しいほど女性に優しいです。男女平等が声高に叫ばれて久しいですが、それでも男女間には埋められない差もあります。それはひとえに悪と呼べるものではなく、お互いに理解しあい協力すべきものです。それをあなたはいち早く理解し、行動に移されました。痴漢被害から女性を守り、外気温に敏感な私たちのために冷房を弱くしてくださいました。そのお心遣いには脱帽しました。

それだけでなく、お年寄りの方や妊婦さんへの心配りも素晴らしいです。立っているのが辛い彼らのための席を用意したり、周囲の人にもそれを喚起したりと思いやりにあふれています。私も見習いたいです。

ここまで非の打ち所のないあなたですが、僭越ながら一つだけ気になる点があります。それは、少しばかりお金にうるさいことです。これだけあなたのお気遣いを享受している身でこんなことを申し上げるのは大変恐縮なのですが、やはり他と比べてもあなたの利用料はいささ

か高いように感じられます。ご検討して頂きますと幸いです。

さて、長くなっちゃいました。私はこれからのあなたと共に過ごして参りたいと思っておりますので、これからどうぞよろしくお願い致します。

敬具

市営地下鉄ブルーライン様



空白とみかんのアルベド

高一

『しょう来のゆめわせあおい ぼくのしょう来のゆめはじいちゃんのみかん農家をつぐことです。じいちゃんのみかんはすっぱくてみかんがりをしてもあんまり人が来ないけど、だけどぼくはじいちゃんをつくるあいじょううたつぷりのみかんが大好きです。いろんな人に食べてほしいです。』

じいちゃんの遺品整理をしていたら懐かしい物がでてきた。多分小三とかそのくらいの頃の作文なのだろうな、と思った。あまりの字の汚さにそれ以上文を読むことが出来なかった。あの時の僕ははじいちゃんのみかんに対して何を思っていたのだろう。今となってはもうわからない話だ。

あの頃はまだここいらのみかん農家は各々育てたいみかんを育てる、そんな感じだったのではないかと記憶している。しかし近年、みかんも甘いほうが売れると周りの農家は育てるみかんの品種を変え始めた。数年前まで

「みかんは酸っぱいからいいんじゃないか」と言っていた小川さんは甘いほうが売れると分かるとすぐに品種を変えてしまい、酸っぱいみかんを育てているのはもうこの辺りじゃうただけだ。そんなわけで今じゃ何か地域の集まりに参加するごとにやれ時代遅れだの時代は糖度の高いみかんだのと馬鹿にされるようになってしまっていた。じいちゃんはそれを言われる度に「うるさいぞ。大体お前は去年までうちと同じ様な品種を育てていた癖に……」と反論していたが、内心どう思っていたのだろうか。今となっては聞くこともできなくなってしまった。

僕があのみかんを好きなのは、じいちゃんが収穫するみかんは未熟なみかんの酸っぱさじゃなくて熟しているのに「酸味」があるからだ。僕の中で酸っぱさと酸味は別物だ。こんなにおいしい酸味を持つみかんはじいちゃんのみかん以外出会ったことがない。前に僕がみかんの収穫を手伝った時に、僕が取ったみかんがまだ熟していなかったことがある。じいちゃんはそんな僕を茶化して「葵のとるみかんは青いな、葵だけに」

と笑った。自分がまだおいしいみかんも見分けることができないみかん農家の後継者になるには若造すぎることを暗に突き付けられたような気がしてその時僕はなんにも言い返せなかった。

何につけても不器用だった僕はよく友達に助けてもら

っていた。よく世話になったのは背が高い淳ちゃん、面白かった秀ちゃん、そして幼馴染の……。あまりそのことを思い出さなくて考えるのをやめた。

色々なことが一気にのしかかってきて、気付いたらじいちゃんの葬式の日になっていた。いろんな人に避けられていたようなじいちゃんだったけど、葬式には生前関わりがあったいろんな人が弔問に訪れた。その顔ぶれの中には僕の幼馴染で大学進学とともに上京してしまった敬太の姿も見られた。

はつきり言っていて敬太はこの町から「逃げた」のではないかと思っている。限界集落の類に入り、大手コンビニエンスストアは車で一時間行かないと無いこの町から。大学進学から五年間、就職してもあいさつに来ず、今日この日にきたのが不思議なくらいだ。だから少し個人的には氣まずい。あつちはなんだか大人っぽくなっている。身に着けている服や腕時計を見て、東京に染まったな、と思った。

黙々と執り行われる葬儀、ホール内に立ち込める線香の煙と百合のにおい。僕から向かって左側、親戚以外がご焼香する場所には敬太の姿があった。煙越しに目が合っ、敬太はふっと笑った。高校の時と変わらない笑顔にドキッとしたその隙に敬太はそのままその場を後にしてしまった。何も話せなかったという後悔が残る。目が

合った時の僕は滑稽な顔をしていただろう。やっぱりもう一度会って話したい、もう一度変な顔しないで「敬ちゃん」って明るく呼べたなら……。

精進落としの料理を食べる時間になって、僕は急いで敬太を追いかけた。こっちに帰ってくるのは久しぶりだからいろんな人に捕まって足止めを食らっているのではないだろうか。まだ近くにいないのではないだろうか。そんな淡い期待を抱いてエントランスに降りたら案の定敬太はうちの叔母さんに捕まえられていた。

「敬太く~~~~ん！久しぶりねえ！今日はこっちに泊まっていくな？　そういえばもう就職はしたのよね？　東京の会社？　ところで今お付き合いしてる人はいらん？　ちょうど今日敬太君に紹介したい子がいてね〜今来てるはずなんやけど……」

「あの、早生さん。僕、もう……」

「ワセなんて呼ばないで、しょうこさんって呼んでよ！　私結婚して早生姓じゃないし」

名前を呼ぶ前、一瞬、時が止まった気がする。うまく唾が呑み込めなかった。

「敬ちゃん！」

名前を呼んだ瞬間、口から生温かいものが垂れた。「やばい」。そう思つてとつさに口をおさえた瞬間、体は大理石の床に叩きつけられた。

敬ちゃん家は食堂を経営している。そうか、お兄さんが継いだのか、そうか……。

生き方の違う二人の今生の別れ、と覚悟しようとしているのどこかやりきれない自分がいた。最後の最後で切りきれなかったたくあんみたいだ。ただはつきりと自分は今「寂しい」のだと実感した。結婚したらきつと敬ちゃんは東京に行って一生会ってくれないのではないのだろうか。そんな予感が胸に立ち込めた。

「やば、あと五分で電車来るわ。じゃあな」「あ……」

「ん？」

「いや……」

行くところがある人をむやみに引き留める気にはもうならなかった。もう「また明日な」なんて言葉は二人の間からは消えて、空いた席には「また今度な」がでかい図体をして座っている。取り残された手は空を掻いた。

はた、はたと涙が零れ落ちた。ただ「独りである」という感覚が胸に入り込む。欲望と罪悪感が水と油みたいに分離し続けて消えない。

そっとベンチに触れた。もう既に表面は冷たくなっていた。敬ちゃんがいた熱はそっと夜風に溶けた。ラピスラズリみたいな空に一番星が光る。瞬きをしただけで見失ってしまった。大げさに立ち上がって歩き出した。さようなら、この村の若者のひとり。さようなら、唯一心を許

した同級生。僕の青い春。

翌朝目が覚めた。外はまだ暗い。どうにも目覚めが悪くて散歩しようと思った僕はおもむろにじいちゃんが着てたジャンパーを羽織って畑に出た。潮風が鼻奥を刺す。海。ここから見えるんだつけ。

山の向こうから朝日が昇ってくる。稜線がはつきりしてくる。大きく息を吸い込んだ。空っぽの肺に入り込んだ生まれわたの風は肺胞を掴んで離さない。四肢の感覚も、山の稜線も、海の地平線も、新たに形作られたみたいにはつきりした。畑の土も僕と同じ存在だったかのように体と一体化している。わかる。一つ一つの細部が。

この道、どこまでも繋がってる。確信を得た。そっか、独りじゃないんだ。じいちゃんが死んでから忘れていたこの感覚。酸味の強いみかんの香りが鼻に抜ける。朝ごはん食べたら農協行ってみようかな。……大丈夫だよ、じいちゃん。僕は僕なりにうまくやってみるから。うん、たぶん今日はたくあん切るの上手くいさそう。たくあんが上手く切れる日は良い日だ。そう心の中で呟いて歩き出した。海に、山に、みかんに、じいちゃんに、けたけたと笑われた気がした

佳作

海の声―乙姫の秘密―

高二

人間というのはどうしてこうも残虐な心をもっているのだろうか。こんなにも美しく弱い亀を虐めるとは。やはりこんな生物なんて、

「おい、何をしている。」

爽やかで、かつ明瞭な声が、僕を蹴る鈍い音と子供たちの揶揄を止めた。濃紺の着物を着た男が釣竿を抱えてこちらに近寄ってくると、子供たちは蜘蛛の子を散らしたように逃げて行つた。「可哀そうに。痛かっただろう。」と僕の甲羅についた泥を払ってくれる青年。齢は二十を少し過ぎたあたりだろうか、たれ目で人の良さそうな顔と、少し癖のある総髪髪が相まって十代にも見える。細身だが相応の筋肉がついていて背丈もあり、風邪などは引かなそうである。この人だ。僕は思い切つて口を開いた。

「助けてくださりありがとうございます。」

彼は「亀が、」と言ったきり、口を大きく開け、大きな目をさらに見開いて動かなくなつた。

亀が人の言葉を喋るなんて驚くのも無理はない。しかし、僕のように頭がよくて、ちゃんと教育を受けた亀なら人語でも蟹語でも鯨語でもお手の物なのだ。

僕は固まったままの彼をよそに説明を始めた。助けてもらったお礼に深海の竜宮城へ招待したいこと、竜宮城にはそれはそれは美しいお姫様がいてご馳走もたくさん出ること、僕のような賢い亀なら人間の言葉も話せること。

後半はあまり信じてくれなかったが、肝心の招待は受けてくれたので早速甲羅に彼を乗せて、海の奥深くへ潜つていった。彼の理解が追いつくのを待っていたら日が暮れてしまうからね。

終始混乱していた彼だったが、海中でも普通に喋れることを知ると何かを諦めたようにぼつと会話してくれるようになった。そういう柔軟な適応力、僕は好きだよ、お兄さん。

彼は名前を太郎といった。あの浜辺で毎日釣りをして、獲れた魚を売って生計を立てている。「僕は魚を取っているけど、君はそれについてその、憎んだりとかしていいのかい。」「確かに友達だった魚が目の前で釣られていったときは驚いたけど、君たち人間は魚を食べて生きているんだし、生態系の一部なのだから恨んでなんかないよ。僕も食べることもあるし。それに君たちは出

汁をとったりして骨や頭まで無駄なく使ってくれるじゃないか。」「そうか、なら少し安心したよ。」

家族は病気がちな母と既に結婚した妹が一人。伴侶はおらず、気づいたら結婚適齢期を過ぎてしまった。そんなことを話しながら僕たちは更に深く潜っていった。

竜宮城へ着くと、乙姫様自らが数匹のお供を連れて迎えに出てくれていた。太郎と会わせるや否や、『お前は用済み』と言わんばかりに、報酬のミミズを一貫ほど置くと足早に太郎を連れて竜宮城へと消えていった。冷たいなあ。深海だけに。そこ、笑うとこだよ。乙姫様に狙われたとなつては太郎が心配だけど、彼も乙姫様に気に入ったようで「世にはこんなにも美しい人がいるのか」とぶつぶつとつぶやいていたからまあいいか。

その後、竜宮城では太郎をもてなす宴会が三日三晩続いた。予定ではあと十日ほど続く予定だったが、太郎が「病気の母が心配だから帰りたい」と言つたらしく、乙姫様も「お母さま思いの太郎様、素敵」と帰すことになったので、また僕が地上まで送ることになった。

「宴はどうだった。」

「素晴らしかったよ。お招きありがとう。ご馳走もお城も今まで見たことがないくらいに豪華だったし、何より乙姫様が美しくて、上品で、なまめかしくて、賢くて、丁寧で、優しくて、」

彼は地上までの道中ずっとあらん限りの言葉で乙姫様をほめちぎり続けていたが、僕はそれを全て聞き流した。太陽が反射して、きらきらと光る水面が見えてきた時、少しだけ魔が差した。

「何かお土産をもらったかい。」

「この漆塗りの箱をもらったよ。」

「絶対に開けてはいけないからね。」

「それ、乙姫様にも言われたんだけど、どういうことだい。」

僕はその問いには答えず、「開けない方が君のためなんだよ。」とだけ言つて彼を元いた浜辺へと降ろし、またゆつくりと海に潜った。

竜宮城へ帰ると、乙姫様はさめざめと泣いていた。毎度のことながら何だかいたたまれない気持ちになつてくる。「そんなに悲しいなら帰さなければいいでしょう。」と言うと、「そんなわがまま言えないわ。酷い人だと思われたくないもの。」と返してくる。女心とは難しいなあ。帰したところで、どうせ彼は母親には会うことができないのを知っているくせに。

ここ数年、竜宮城では乙姫様の婿探しにとても手こずっている。その相手は地上の生物でなければならない。しかし、乙姫様をはじめとする魚類は地上に出られないので、水陸両用である僕が探してくる役を担うことにな

ったのだ。

直近一年は乙姫様のご意向で、といっても完全なる好みだが、人間の雄という縛りで探している。ただし見つけても、欲深かったり、横暴な人だと乙姫様のお眼鏡に合わないの、わざと子供たちにいじめられて助けてくれた人をお礼と称して竜宮城へ案内しているというわけだ。太郎は今までで一番有望株だったんだけどなあ。

「二時間、たったの二時間我慢してくださればいいよ。」

「乙姫様、地上の感覚では一年ですよ。」

そうそう、一番大切なこと。深海と地上では時間の感覚が違う。こちらで一日と思っても上では十年が経っている。一生竜宮城で過ごしてくれるのなら全く関係ない話なのだが、人間というものはどこかで必ず帰りがる。そこで玉手箱なのだ。

玉手箱にはその隔たりを調節する機能があつて、たとえ竜宮城で三日過ごして三十年先の未来に来てしまったとしても、玉手箱を開ければ元居た時代に戻ることができる。ただしその機能の発動には地上時間で一年かかるのだ。ちなみに深海時間だと二時間。一年経ったらひとりで開く仕組みだが、それまでは絶対に開けてはならない。一年経たずに開けたとき、玉手箱の効果は人間の体をその時代に合わせてしまう。

しかし人間は、自分だけが取り残された世界に耐え切れず、ふたを開けてしまう。すると過去に戻れないうえに、太郎なら恐らく五十代の姿になってしまうのだ。もしうまく発動したら、元の時代で寿命を全うし亡くなった後にその霊を迎えに行く。そして、彼が初めに乙姫様と出会った時の姿にしてから結婚してもらう予定なのだ。だが、まだその段階まで行つた人間は一人もいない。見つけても見つけても失敗していくので、正直少し疲れた。

「乙姫様、こんな不毛なことはそろそろやめませんか。もうこれで三十人目ですし御父上も困つていらつしやいますよ。」

これで何度目かわからないが、やはりもう一度口に出してみよう。すると少しの沈黙の後、洪々といった様子で、「そうね。もしこれで太郎様が駄目だったら人間にくだわるのはやめます。」

と言つた。あな嬉しや。何せ地上の生物の中で、人間が一番難解で残酷な動物なのだ。助けてくれる人を持つて、わざと虐められているとは言つても、ただ海岸で手足をしまわずに日光浴をしているだけなのに、毎回虐めてくる子供がいるのにも心底辟易している。

「こんなにうまくいかないなんて、そもそも玉手箱の仕組みを口外できない掟が悪いんだわ。『絶対に開けな

いってくださいね。』と言ったって、理由がわからないままそう言われても、大抵の人間は開けるのよ。仕組みを言わないで開けさせない方法なんか初めからないのよ。』やっと分かってくださいましたか。だから人間はやめた方がいいとあれほど御父上も仰つていたのに。まあ、一匹の猫に執着し続けた御父上が言える筋合いではないのだけど。

「ねえ、そろそろ半年くらい経った頃よね。」いつになく饒舌でそわそわした乙姫様のために僕は様子を見に行くことにした。

彼はちょうど浜辺にいた。岩陰に隠れて様子をうかがっている、何かを決心したように脇に抱えていた風呂

敷包みを解き、中の箱を取り出した。遠目であまりよく見えないがあれは玉手箱だろうか。彼は躊躇なくその箱の蓋を開けた。ああ、やってしまったか。僕は思わず目をつむった。しかし煙が出たことに驚く声や、体が老化するときの沸騰した薬缶のような音もしない。

そつと目を開けると、彼は流木に腰掛け弁当を食べていた。思っていたより骨太な奴なのかもしれない。次はまた半年後、玉手箱が発動するころに来るとしよう。いちいち帰るのも面倒だが、僕の報告を待つて落ち着かない状態にいる乙姫様のために、僕は、どこまでも美しく深い透き通った青い住処へと潜っていった。

近年、学校をあげて取り組んでいる「言葉にフォーカスした教育」の一環として、昨年度より、校内コンクールを開始しました。第二回コンクルールのテーマは「青」です。審査委員長の中山校長先生と国語科教員全員による選考・協議の結果、応募総数三十九点の中から、作文・エッセイ部門優秀賞一点・佳作二点、創作部門優秀作一点・佳作一点を決定し、三学期の終業式で表彰および副賞の贈呈を行いました。

次年度も多くの力作の応募を期待しています。

外部コンクール入賞 おめでとうございます

第三十一回 伊藤園「おいお茶」新俳句大賞（二〇二〇年二月応募、十月結果発表）

佳作特別賞

中3

「あし組んで考える人ふきのとう」

佳作

高一

「青い海一足先に走り出す」

高一

「正月は皆で手を取り祖父散歩」

高一

「ばあばの背に合わせ剪定す柿の枝」

高一

「美術室遠のく声と春時雨」

高一

「青空にひとすじの雲金木犀」

高一

「時は過ぎ思い出語り桜散る」

中3

「放生会飛び立つ小鳥の背に夕日」

中3

「おじいちゃん素直にマスクつけてくれ」

中3

「桜見る今年一つの影足りず」

2020年度 国語科年間行事

- 4月27日(月) 『文集』45号発刊
10月31日(土) 有志 漢字検定
1月27日(水) 中2・3 文章検定
1月28日(木) 中1 漢字検定
1月31日(日) 第2回エーカック記念作文コンクール締切
テーマ「青」

編集後記

二〇二〇年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため博物館見学・第一回沖縄修学旅行も中止になり、例年文集に掲載しているその体験の作文がありません。歴史に残るこの年の、生徒たちの様々な思いを文集四十六号から汲んでいただければ幸いです。

文集

第四十六号

二〇二二年五月 印刷
二〇二二年五月 発行

発行者 捜真女学校中学部・高等学部国語科
編集者 捜真女学校中学部・高等学部国語科
発行所 捜真学院

印刷所 株式会社工友会印刷所
電話 〇四五(四九)三六八六番
横浜市神奈川区中丸八

〈題 字〉沢野 三郎 (旧教師)
〈カット〉 (高三)

東京都目黒区自由が丘一三一九
電話 〇三(三七七)〇一〇三三